

# 紀要

第2号 平成15年3月30日

## 原著論文

- 教育臨床におけるコミュニケーション分析の試み  
— 吃音のある子どもと教師の話し合い場面について —…… 長 澤 泰 子 3  
太 田 真 紀
- 新古典派パラダイムと情報の非対称性問題について…… 古 山 英 二 15
- 0 - 3ヶ月児をもつ母親のニーズの構造についての考察  
— 地域保健センターにおける育児支援を念頭に据えて —…… 柴 原 宜 幸 27  
橋 本 栄里子
- 馬車と宮殿  
— 17世紀のピッテイ宮諸計画案における馬車の影響 —…… 金 山 弘 昌 39
- 高所順応トレーニングおよび高峰登山の大腿部軟部組織に及ぼす影響  
…………… 高 橋 早 苗 53  
浅 野 勝 己  
高 橋 英 幸  
岡 崎 和 伸

## 報告・資料

- 本学学生の未梢循環動態と骨密度の傾向 …………… 小 山 貴 61
- 情報倫理と情報心理に関する一考察 …………… 茶 園 利 昭 69
- インターネットにみる今日のシャーマニズム  
— 霊性のネットワーキング — …………… 塩 月 亮 子 79  
佐 藤 壮 広

## 書評

- マルク・メルジェ「ぼくはこの足でもう一度歩きたい」…… 長 澤 泰 子 89  
朝吹 由紀子 訳

## 日本橋学館大学紀要 第2号

### 目次

原著論文					
教育臨床におけるコミュニケーション分析の試み					
- 吃音のある子どもと教師の話し合い場面について -	長澤泰子	3			
	太田真紀				
新古典派パラダイムと情報の非対称性問題について				古山英二	15
0 - 3ヶ月児をもつ母親のニーズの構造についての考察					
- 地域保健センターにおける育児支援を念頭に据えて -	柴原宜幸	27			
	橋本栄里子				
馬車と宮殿					
- 17世紀のピッテイ宮諸計画案における馬車の影響 -	金山弘昌	39			
高所順応トレーニングおよび高峰登山の大腿部軟部組織に及ぼす影響					
	高橋早苗	53			
	浅野勝己				
	高橋英幸				
	岡崎和伸				
報告・資料					
本学学生の未梢循環動態と骨密度の傾向				小山貴	61
情報倫理と情報心理に関する一考察				茶園利昭	69
インターネットにみる今日のシャーマニズム					
- 霊性のネットワーキング -	塩月亮子	79			
	佐藤壮広				
書評					
マルク・メルジェ「ぼくはこの足でもう一度歩きたい」				長澤泰子	89
	朝吹由紀子 訳				

# THE BULLETIN OF NIHONBASHI GAKKAN UNIVERSITY NO. 2

## Contents

### Original Article

- A preliminary study on the communication analysis  
in the clinical work at the educational setting ..... Taiko NAGASAWA 3  
Maki OTA
- The Neoclassical Paradigm and Information Asymmetry ..... Eiji FURUYAMA 15
- A Consideration of the structure of mother's needs while parenting  
baby younger than three months old  
With the prospect of supporting child-care ..... Yoshiyuki SHIBAHARA 27  
Eriko HASHIMOTO
- Le carrozze ed una reggia:  
l'influenza dell'uso del cocchio nei progetti  
secenteschi per Palazzo Pitti ..... Hiromasa KANAYAMA 39
- Effect of Simulated Altitude Training and Climbing on Soft parts  
Tissue of Thigh ..... Sanae TAKAHASHI 53  
Katsumi ASANO  
Hideyuki TAKAHASHI  
Kazunobu OKAZAKI
- Report**
- Tendency of Students' Peripheral Circulation and Bone Mass Density  
..... Takashi KOYAMA 61
- A Study of "Information Ethics and Psychology on Web Sites"  
..... Toshiaki CHAZONO 69
- Shamanism Today on Internet  
A Networking of Spirituality ..... Ryoko SHIOTSUKI 79  
Takehiro SATO
- Book Review**
- LÈVE-TOIET MARCHE  
By Marc Merger, translated by Yukiko Asabuki ..... Taiko NAGASAWA 89

# 教育臨床におけるコミュニケーション分析の試み

- 吃音のある子どもと教師の話し合い場面について -

長澤 泰子\*1 太田 真紀\*2

日本において、児童期の吃音指導の多くは公立小学校の通級指導教室（通称ことばの教室）の教師によって行われている。そこでは、子どもに吃音を受け入れさせるために、多くの教師は子どもと吃音の話をして「どもることは悪いことではない」というメッセージを伝える立場をとっている。しかし、吃音のある子ども達は吃音にかかわるつらい経験をしているため、それらの経験について話したがない。そこで、本研究では吃音について話し合う際の留意点を明らかにするために、吃音のある小学6年生と教師が彼女の吃音について初めて話し合う場面の相互交渉を質的に分析した。分析指標には相互交渉における両者の発言、表情、身体の動きを用いた。結果は次の通りである。

1) 吃音に対する子どもの気持ちは、ことばより顔の向きや顔の表情と一致していた。教師が吃音のある子どもと話をするとき、教師は子どもの非言語的行動を注意深く見るべきである。

2) 子どもが教師の質問に対して沈黙したり、「分からない」と答えたとき、教師は子どもがなぜそのような答えたのかを考えていた。質問が難しかったと判断した場合は、より答えやすい聞き方、より具体的な質問をしていた。また、子どもがそれについて話すことを拒否したと判断した場合、教師はそれ以上無理強いせず、別の話題に変えていた。そのような対応によって、子どもは自分の吃音について再び話し始めた。

3) 子どもが吃音について否定的に話した時、教師がそれに対して「どもってもいいんだよ」という内容の話をしたりせずに、子どもの気持ちをより知ろうという態度でいると、子どもは自分のことをより話していた。吃音の話をするというのは、「どもることは悪いことではない」というメッセージを一方的に伝えるのではなく、子どもの吃音のいやな体験や混乱した気持ちを一緒に整理したり、吃音のある暮らしについて話し合うことであることが示唆された。

..... キーワード .....

非言語的コミュニケーション 吃音のある子ども ことばの教室

否定的感情 「どもってもいいんだよ」

## 1. 問題と目的

吃音の原因は解明されておらず、吃音を治療する方法も未だ確立していない。幼児期の吃音の80%は自然に治癒するが、残りの20%はなおらな

2002年9月30日受理

A preliminary study on the communication analysis in the clinical work at the educational setting

\*1 Taiko NAGASAWA

日本橋学館大学人文経営学部

\*2 Maki OTA

東京都立大学大学院人文科学研究科

い (Van Riper, 1971)。また、自然治癒する人を見分けたり、その時期を予測する方法は確立されていない。吃音の問題は話しことばの非流暢性にあるのではなく、吃音のために人とのかわり合いを避けたり、自分の意思の実現を断念することにある。

成人吃音者の中には、自分の話し方を受容できないまま、転職を繰り返したり、引きこもりに陥る者も多い。この要因の一つとして、児童期、思春期における指導や治療の成否が考えられる。児童期の吃音指導の多くは公立小学校の通級指導教

室(通称ことばの教室), 思春期の吃音指導は病院や民間矯正所において行われてきた。症状が残った場合を見すえ, 生活上の行動が吃音によって制限されないような支援および自己受容のための支援が指導や治療において行われていることが, その成否の鍵であると考え。

自己受容とは自己の現実の姿について正確な観察を行い, 価値判断を含めずに自己の特徴を十分自覚することであるように(Combs & Snygg, 1959), 自分の話し方の受容とは, 吃音と向き合い, 価値を伴わずに吃音について語れることである。ことばの教室においては, 子どもが吃音と向き合うために吃音の話をするという指導方針をとっている教師が80%を越えている一方で, 教師は子どもと話をする上で問題を抱え, カウンセリング, 話し方の指導の研修, ケーススタディの機会を求めている(長澤・太田, 2002)。

先行研究や実践報告において, ことばの教室の教師と子どもが吃音の話をしている場面の相互交渉を分析したものはほとんどない。教師が子どもと効果的に吃音の話をするための話し方や気持ちの受け止め方などを明らかにするためには, 教師と子どもが吃音について話し合っている場面の相互交渉がどのようなものであるかを明らかにする必要がある。また, 相互交渉に関する従来の研究は数量的なデータを分析してきたが, 自己受容に関する研究にそれを応用することはかなり困難である。

本研究は, 子どもの吃音に対する考えが深まるきっかけとなった指導において, 相互交渉にはどのような特徴があるのかを, 質的な分析から明らかにすることを目的とする。

## 2. 方 法

### 2.1 対象者

ことばの教室に通級している吃音のある6年女子A児とことばの教室のB教師である。通級指導開始は5年3学期であり, 本研究が分析の対象とした指導の録画時期は6年2学期後半である。A児は担任のすすめで「総合」の学習発表テーマを

吃音に決め, 通級指導時間にB教師と相談して吃音の特性を調べていた。録画までの指導においてA児はB教師と「吃音」について話をしていたが, 「自分の吃音」については話し合ったことはなかった。

### 2.2 分析場面の設定

週1回通級指導を受けていることばの教室において, 指導場面をVTRに任意で録画してもらった。天井設置カメラを用いた。A児と教師は向き合っていたため, A児の顔の向きは判定できたが, 教師の顔の向きは判定できなかった。指導は吃音に関する絵本(朝日他, 2002; 長澤, 2001)を用いた話し合いであった。絵本は「どもってもいいんだよ」というタイトルで「どもることは悪いことではない」というメッセージが込められており, 発吃当時の家庭における典型的出来事, 通級指導の様子, 吃音のある子ども数名の体験が描かれている。収録時間は約60分であった。

録画から約8ヶ月後, A児はすでに卒業して中学生になっている。B教師に聞き取りを行い, 以下四点を確認した。録画した指導はA児が「自分の吃音」について初めて語った指導であったこと, 話し合いの中でA児が泣き出した時, 教師は「A児が気持ちを出した」と嬉しく思ったこと, 指導において, 読み方のリズムを紹介程度に1度取り組んだだけが, A児が翌週「授業で読み方を試したらうまくいった」と報告したこと, 中学生になったA児が母親に「ことばの教室に通ったのは無駄じゃなかった」と語ったこと。

### 2.3 記述方法

音声言語, 声の様子, 顔の向き, 身体の動きなどを書き起こした。発話は教師をT, A児をAと表記する。発話者が誰であるかにかかわらず, 発話を時間的な指標として, A児の様子を図1に基づいて表記する。身体の動きなどは( )内に記す。会話のポーズをストップウォッチで測定し, 2秒以上の場合は明記する。分析者の補足説明は〔 〕で表記する。また, 相互交渉から第三者として明

(傍点)	涙声、泣き声
===== (二重線)	顔の向き：真下
———— (一重線)	顔の向き：うつむき
~~~~~ (波線)	顔の向き：そむけ
(下線なし)	顔の向き：教師の顔を見る

図1 子どもの様子をあらわす記号

らかに推察できる点も記載する。

#### 2.4 分析の視点

収録された指導のうち、吃音に関する話し合い約45分間を分析対象とする。呉(2000)を参考に、会話の話題を単位とした相互交渉を「エピソード」、エピソードが一つの主題という単位でつながったものを「ストーリー」とよぶ。

以下三つの視点でエピソードおよびストーリーを分析する。子どもが吃音について話したがらない時、教師はどのような対応をとり、それによって子どもはどのような行動の変化を示したのか。子どもが気持ちを話した時、教師はどのように受け止め、子どもはどのような行動の変化を見せたか。話し合いの流れの特徴はどのようなものであったか。

### 3. 結 果

まず、教師がA児に絵本をどのように提示したかを見る。教師は絵本の内容を知らせずに、ある絵本を読んでもらいたいと話し、A児の理解を得た。絵本を裏がえしたままで、二人は絵本の読み方、話し合い方を相談した。相談するにつれ、A児の自然な身体の動きが見られなくなっていった。絵本のタイトルを見せる場面を以下に記す。

T：(絵本の裏表紙を見せたまま) Aちゃんの気持ちを聞いてみたい、この本のことで。但し、内容のことで。

A：(うなずく。)

T：では、はい、こういう本です。(絵本を表にして、子どもの前に置く。)

A：(絵本を黙って4.4秒間見る) う？(恐る恐る手を伸ばして、絵本を裏がえし、絵本の裏表

紙のまん中に描かれている小さなイラストを触る。)

T：(笑いながら) え、何？

A：(イラストを触りながら) これ、気に入ってたの。

T：これ、気に入ってたの？かわいいよね。

A：うん。(絵本をひらく。)

A児は絵本のタイトル「どもってもいいんだよねっ」を見た後に本を裏返していたことから、A児はタイトルに抵抗を感じたと推察することができた。また、教師がタイトルをA児にすぐに見せなかったことは、教師はA児の抵抗を予測していたと考えられた。

読後の話し合いからエピソード26個、ストーリー4個を得た。話し合いにおける話題の流れを図2に示す。以下において、エピソードごとの相互交渉を見ていく。

#### 3.1 ストーリー1 (エピソード数2個)

話したがらない場面：以下は絵本の黙読後、教師が感想を求めた場面の相互交渉である。(エピソード1の一部)

T：なんか、どう思う？

A：別に、ふつう。

T：ふつう？

A：なんか、よく分かんなかった。

T：ふーん、なに？

A児も教師もお互いに顔を向けながら発話をしていたが、絵本が提示された時のA児の様子から考えると、A児の「別に、ふつう」という発話は感想を述べたくないという気持ちの表われと推察することができた。しかし、教師はA児に質問を続けた。A児はいくつかの質問に答えることで、

〔ストーリー〕

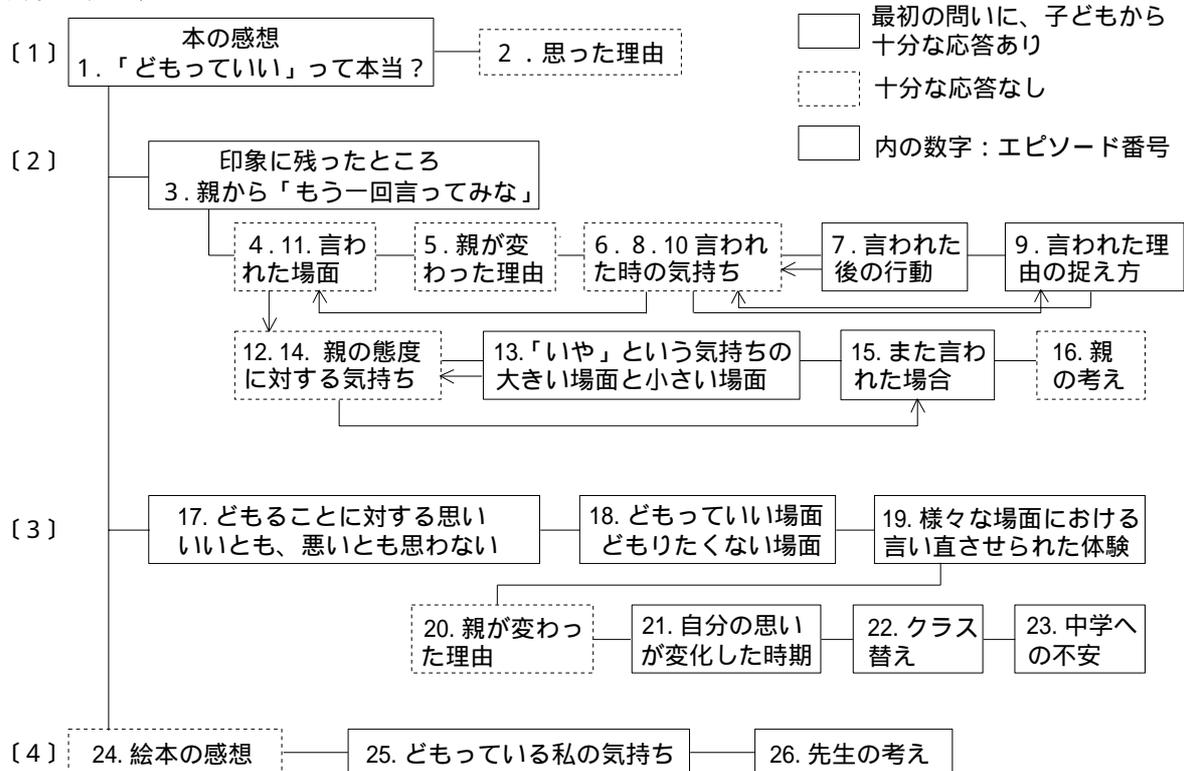


図2 話し合いにおける話の流れ

タイトルを見た時「へー」と感じただけだったが、読後には「本当に(どもって)いいの?」と思ったこと、吃音のあるいろいろな友だちがいると知ったことを読後の感想として話した。感想が変化した理由を教師はたずねたが、A児は約14秒間沈黙した後、「分かんない」と答えた(エピソード2)。

### 3.2 ストーリー2 (エピソード数14個)

読後の感想が変わった理由をA児が述べないため、教師は「なんかさ、ここの、ここの辺、残ってるなって、この辺なんか印象あるなっていうところある?」と質問した。A児は約3秒沈黙し、親が「ゆっくり」「あわてないで」「もう一度」と言っているページを指摘した(エピソード3)ことをきっかけに、二人はその経験に関し話合っている。

話したがらない場面：図2に示したように「もう一度言ってみな」と言われた場面(エピソード4)、最近、言い直させられなくなってきたの

はどのような理由からだと考えているのか(エピソード5)を教師は質問したが、A児はいずれも「分からない」と答えた。教師は「もう一度言ってみな」と言われた時の気持ちに話題を変えた。(エピソード6)

T: そう言われて、どうだった?

A: 別に、何にも感じなかった。

(エピソード7)

T: そう?じゃ、もう一回言った?

A: うん、一応。

T: ふーん、いやじゃない?

A: いやだった。

T: いやだったんだ。でも、言ったんだ。

A: うん。

T: 言いたくって言った、もう一回?

A: (首を横にふる。)

(中略)

(エピソード8)

T: あたってたら教えて。あたってなかったら、違うって教えて。

A：うん。

T：うーん、もう、「言ってみな」と言われると、言わなきゃいけないと思った？

A：うん。

T：言わなかったら、怒られると思った？

A：(首を横にふる。)

T：あ、そうではない。

A：うん。

T：私が言ったのに、なんで分かってくれないのと思った？

A：(うなずく。)

エピソード6の質問は「もう一回言ってみな」と言われたことに対する感想を漠然とたずねていたのに対し、エピソード7においては言い直し行動、次いでその行動自体に対する感想をたずねるというように質問内容は明確であり、順序立ったものであった。さらに、A児の「(言い直しをするのは)いやだった」という発話をもとに、言い直すように言われた時のA児の気持ちを教師は推し量ってたずねていった。A児はうなずいたり、首を横にふったりする形で「私が言ったのに、なんで分かってくれないの」という気持ちを表現した(エピソード8)。この間、A児は真下を向き、泣き声を押し殺そうとしていた。

次いで教師は、親が言い直しをさせる理由をA児に質問した(エピソード9)。選択肢を選ぶ形で、A児はつまったから言い直させられていると思っていたことを表現した。この時もA児は真下を向き、時折泣いていた。

(エピソード10の一部)

T：ふーん。それ〔つかえたから言い直しをさせられること〕って、どう思う？

A：いやだ。

T：すごい、いやだった？どのくらいいやだった？

A：(4.4秒) ちょっとだけ、いやだった。

T：ちょっとだけ。それ、難しいね。

A：(うなずく。)

T：(紙を渡しながら) この紙がさ、この紙でたとえられないと思うけど、どのくらいでもい

い、どのくらいいいやだったか、その紙で足りなかったら、もっとおっきな紙、渡すから。好きなように書いてみて。

A児はスツと横線を引いた。教師の「数字で言うところのどのくらい?」という質問に、A児は線の長さを指で測り、紙の長さに対する線の割合を考え、次第に「ここで50だとしたら」「ここが80、ここが30」「80、ここが70」と思考過程を発話するようになった。教師は、A児の思考発話一つ一つに「うんうんうん」「好きなようでいいよ」とあいづちをうっていった。約3分半考えることで、A児は「いやだった」度合いを紙に表現し、その大きさを「68」と言うことができた。A児が気持ちを紙に表現するまで、顔は真下を向いていたが、「いやだった」度合いを表現した後、顔はやや下向きという程度まであがっていた。

エピソード6においてA児は気持ちを話したがらなかったが、具体的な質問が順序立ててなされたことや(エピソード7, 9)、ゆっくり考える時間を与えられたことにより(エピソード10)、気持ちを徐々に表現していった。同様の相互交渉は、エピソード4 11、エピソード12 13 14に見られた。

気持ちを話した場面：エピソード13では、言い直しさせられたいくつかの場面に関し話し合われた。非常にいやだった場面は親に「一生懸命伝えようとしていた時」に言い直させられたときであり、あまりいやでなかった場面は「ただのおしゃべり」をしていたときだったことを、話し合いによって明らかにしていった。

(エピソード13)

T：話を一生懸命お父さんに分かってもらおうと一生懸命に言った時に(絵本の「もう一度」をさして)これを言われたら(「いやだった」度合いが大きい方をさして)もっといった？

A：うん。

T：そうだよ。そりゃそうだ。それじゃ話聞いてないよ、お父さん。

A：(うなずく。)

T：つまることばかり言って。

A: (うなずく。)

親はことばの教室に来るまで、対応の仕方が分からず、A児に言い直させていたこと、対応を知ってからは言い直させなくなったことを教師は知っていたが、親を弁護するのではなく、A児の気持ちを代弁していた。A児は教師の発話を聞きながら泣きうなずいていた。

エピソード15においては、親から言い直すように言われた後の行動について話し合われた。A児はうつむいて、「機嫌が悪ければ、反抗するかもしれないし、反抗できなければもう一回言うかもしれない」と答えたが、やはり反抗しないほうが良いと思うと述べた。

(エピソード15)

T: さっき、ほら、反抗するって言ったじゃない。

A: うん。

T: 先生も、結構いっぱい反抗してきたけど、親にはね。うん、もし反抗するんだったら、どんなふうにやりたい？

A: (2.3秒)(涙をふく)ことばで言う。

T: うん。どんなふうに言う？

A: こっちも一生懸命話してるんだから、そんなこと言わないで。

T: うーん。それ、言ったことある？

A: ない。

T: まだ、ない。いつか本気でさ(「いやだった」度合い100をさしながら)ここまできた時に言っちゃえば。

A: (うなずく。)

教師がA児の発話をもとに気持ちを代弁したり、教師本人の体験を話すことで親への反抗心を肯定する中で、A児は気持ちを述べた。

### 3.3 ストーリー3 (エピソード数7個)

いやだった体験の話の後、吃音に対する親の考えについての質問がなされたが、A児は「分からない」と答え(ストーリー2)、教師は吃音に対するA児の考えに話題を転換した。

考えを話した場面: (エピソード17)

T: Aちゃんはと思う、ことばがつまること、

どもること。(A児、涙をふく)

A: (涙をふきながら)いいとも、悪いとも思わない。

T: そっか、難しいな。でも、言われるのは、いやだ。(A児、涙をふき終わる。)

A: うん。

T: うん。いいとも、悪いとも、言えない。じゃ、悪くはないんだ。

A: うん。

T: どもることは、悪いわけではないんだ。

A児は最初、真下を向いていたが、教師が応答したり、A児のことばの意味を確認しようと質問するうち、A児の顔は少し上がってきた。この後、教師はどもってもいい場面・どもってはいけない場面があるのか、ある場合どのような場面かをたずね、エピソード10と同様、教師はA児に考える時間(約2分)を与えていた。A児は、最後は涙声ではあったが、教師を見て「いい方から。どもってもいいほうとかは、友だちとかのおしゃべり。別にどもっても全然気にしないし、こっちも全然安心して話せるから。あと、だめなほうは、音読とか、授業中は、なんでこんなになっちゃったのかなって。」と述べた(エピソード18)。

話さなくなった場面: エピソード20において、エピソード5の話題「親の聞く態度の変化の捉え方」が教師から再び出された。この話題は5度目であった(エピソード5, 9, 10, 16, 20)。

(エピソード20)

T: (問題のページを広げ)お母さんが言わなくなったのは、どうしてかな？

A: 分かんない。

T: 分かんないか。じゃ、お父さんは、どもったらいけないと思ってるのかな？

A: 分かんない。

T: じゃ、お母さんはどう思ってるのかな？

A: 分かんない。

T: 聞いてみる、いつか。

A: うん。

「分かんない」という応答に加え、それまで教師を見ていたのに顔をそむけたことから、A児の

拒否が推察された。その時、エピソード13と同様、教師は話題を変えた。

不安を話した場面：どもっていいという考えが「どもることはいいとも、悪いとも言えない」という考えに変化したのは3年生のクラス替えであり、その時、友だちができるかとても不安だったとA児が述べた。

(エピソード21)

T：でも、出来たよね、友だち。なんで出来たんだろう。

A：知らない。

T：知らない。こわかったけど、Aちゃんもしゃべってた？

A：うん。

T：ふーん、そうしたら、仲良くなれた？

A：うん。

T：よかったね。いいよね。

この後の発話から、A児が中学進学に不安を抱えていることを教師が理解していたことが分かる。上記の会話には、A児に友だちを作る力があることを気付かせることで、A児の中学進学への不安をやわらげる意図があったと推察することができた。エピソード23においては、クラス替えを不安に感じた教師自身の経験、通級指導を受けていた吃音のある中学生女子の体験を話題に出しながら、誰もが中学進学時に不安に思うことを教師が話した後、中学進学についてはあらためて話し合うことを教師が提案し、A児は了解した。

### 3.4 ストーリー4 (エピソード数3個)

絵本の感想をもとに、どもることに対する思いが話し合われた。

気持ちを話した場面：教師が本の感想を再びたずねたところ、A児からは「変なの」という返事しか返ってこなかった(エピソード24)。再び、教師は「どもっていいんだよ」と言っている登場人物の先生に言いたいことをたずねると、A児は顔を教師に向けながら「別になんとも言わない」と答えた。教師は「たくさんの人がいたら?」、「母親が言ったら?」、「父親が言ったら?」と質

問するうちに、A児の顔はだんだん下に向き、「ひとに意見をおしつけるのは、あまりよくない」「お父さんとお母さんはどもってないから、分からない」という発話をした。その後、教師は初めて自分の考えを述べた(エピソード26)。

気持ちを話さなくなった場面：(エピソード26)

T：うん。先生は、どもってもいいと思ってる。(4.0秒)なんでさ、どもっちゃいけないと思う?

A：(3.9秒)さあ。

T：いろいろあるよね。恥ずかしいとか、皆と同じようにうまく言いたいのに言えなかったとか。うーん、なんだろう、あと(A児、涙をふく)どもるから言いたいことがうまく言えない、分かってもらえない。かっこ悪い。いろいろあるけど、なんか当たってる?

A：ううん、当たってない。(涙をふく)  
(中略)

T：あー、なんだろう。

T：どもらないで話せるようになりたい?

A：(首を小さく横にふる。)

T：これはまた今度、話そうか。

どもってはいけないと思っている理由をA児は話したがらなかった。教師は手がかりがないまま理由を推察し始めた。A児の手・身体 of 自然な動きは次第に見られなくなり、A児は泣き出し、顔を徐々に下げていった。教師は「今度話そうか」と話を切り上げた。その後、教師は「これは先生の意見。AちゃんはAちゃんの考えでいいから」と言って「どもっていいんだよ」という考えは「どもっても伝えることができるから、どもってもいい」という意味でA児の行動と一致した考えであると話した。A児はずっと下を向いていた。

### 3.5 ストーリー・エピソードの流れ

ストーリーの流れの特徴を見る。話し合いは絵本の感想(ストーリー1)という漠然とした話題から始まったが、A児の拒否的な様子から、話題は印象に残った箇所に転換された(ストーリー2)。しかしこの話題転換は子どもの発話に基づ

いて、教師が展開したものである。「どもってもいいんだよ」というメッセージに対する気持ちが読後なぜ変化したのかを聞かれたA児は約14秒間考えた末、教師を見ながら「分かんない」と答えた(エピソード2)。教師はそれを受け、印象に残っている箇所を質問した(エピソード3)。感想がすでにいくつかあげられていた(エピソード1)ことから、教師は話題を変えたのではなく、心の変化を生じさせた箇所を探ろうとしたと推察された。つまり、教師は質問を答えやすい具体的な質問に変えたといえる。その後、どもることに対する思い(ストーリー3)、次いで最初の話「どもっていいんだよ」という考え方に対する考え(ストーリー4)へと、具体的な話の積み重ねをもとに抽象的な話へと話し合いは展開していった。

次いで、ストーリー内の特徴を見る。図2から分かるように、エピソードの最初の質問にA児から十分な応答が得られなかったのは、ストーリー2が最も多かった。ストーリー2におけるエピソードの流れの特徴は、A児が話すことを拒否した時にはそれに関わる具体的な話をしてから再びその話題に戻るといったものであった。ストーリー3においては、どもることに対する思いという抽象的な話題からスタートしたが、その話題にかかわって、話し合いは子どもの生活にかかわる話題へと展開していった。

## 4. 考 察

### 4.1 子どもの気持ち・発話・非言語的行動との関係

吃音の話し合いにおいて、A児の気持ちはどのように表現されていたかを見ていく。分析対象の話し合いは、A児が初めて自分の吃音について話した場面であった。しかし、A児は自分の気持ちを最初から話したわけではなかった。例えば、吃音に関する絵本の感想を聞かれた時、「本当に(どもって)いいの?」と感じたにもかかわらず、「別に、ふつう」と答えたり(エピソード1)、言い直しをさせられることは非常にいやだったにも

かわらず、最初は「別に、何も感じなかった」と答えたり(エピソード6)、「どもらないで話せるようになりたい?」という質問に首を小さく横にふって否定したりしていた(エピソード26)。このように見ると、A児の発話には自分の気持ちを表現したものもあれば、自分の気持ちと異なる内容のものもあった。

自分の気持ちと異なるこれらの発話は、どのような様子で述べられていたか。絵本の感想場面(エピソード1)は、A児の顔は教師に向いていたが、視線までは判別できなかった。言い直しに関する場面(エピソード6)では、A児の顔は真下を向いていた。「どもらないで話せるようになりたい?」というやりとり場面(エピソード26)でもA児は顔を真下に向けており、身体の自然な動きも全く見られなかった。

話し合いにおけるA児の顔の向きに注目すると、A児が真下を向いて話をしていた場面では、A児のつらい体験や気持ち、吃音に対する考えが話し合われていた。A児が顔をそむけた場面は、言い直しをさせていた親の吃音に対する気持ちをたずねられた場面であった。A児が顔をやや上げた場面は、自分のつらい体験について時間をかけて考え、落ち着いて話す場面であった。指導開始時の吃音以外の会話においてA児は教師と顔を合わせて話していたことから、A児が顔を下に向けたり、そむけたりして時の話の内容はA児にとっては話したくない内容であると考えられる。これをもとに、気持ちと異なる発話がなされたときについて考えると、A児はことばでは「(言い直しさせられたとき)別に、何も感じなかった」と言いながら、これについては話したくないという気持ちを顔を真下に向けるといった非言語的行動で示していたといえる。

子どもが心の中で思っていることはことばと異なっていることがある。むしろ、それは顔の向き、表情、身体の様子など非言語的な行動によって表われているように思われる。子どもの気持ちとことばの食い違いを察知するためにも、教師は子どもの非言語的な部分に注目しながら、話を進めて

いく必要があるだろう。

#### 4.2 子どもと教師の相互交渉

A児が吃音について話したがないとき、言い換えると、教師の質問に対し沈黙したり、「分からない」「何も感じていない」と答えたとき、教師はA児がなぜそのように答えたのかを考えていた。質問が難しかったと判断した場合は、より答えやすい聞き方、具体的な質問をしておいた。また、A児がそれについて話すことを拒否したと判断した場合、教師はそれ以上無理強いせず、別の話題に変えていた。そのような対応によって、A児は自分の吃音について再び話し始めた。このとき、教師が子どもの反応の理由をその場で考えるには、冷静な思考力が要求される。教師側に吃音や吃音指導に対する抵抗があると、子どもとの話し合いにおいて冷静な判断はできなくなり、子どもの気持ちを導きにくいであろう。

また、A児が吃音を否定的に話したり、親への誤解を話した時、教師はそれに対して「どもってもいいんだよ」という内容の話をしたり、親に対する誤解をとらうとせずに、A児の気持ちを受け止め、より知ろうという態度でいると、子どもは自分のことをより話していた。

本稿においては子どもの反応に注目したが、今後は教師の反応・態度の分析も必要である。さらに、分析にあたって第三者として明らかに推察可能なものを客観的データとして扱ったが、分析者の主観が前面に出てしまうため、この点については今後検討する必要がある。

#### 4.3 吃音の話をするとは？

話し合いの流れは、具体的な話（ストーリー2, 3）から抽象的な話（ストーリー4）へと展開していた。またA児が質問に答えられない場合、B教師はより具体的場面に関連させて、質問しなおすことで、A児が自分の経験、その時の出来事、その時感じたこと、他者に対する気持ちをことばで表現できるように誘導していた（ストーリー2）。このような話の段階を経るうちに「どもってもい

いんだよ」というメッセージに対するA児の思いや考えがまとまり、ことばで表現できるようになっていた。

吃音の話をするとは、「どもってもいい」という考えを子どもに一方的に伝えるためにするというよりむしろ、いやな体験や気持ちが混乱して内在する心を整理しながら吃音を見つめ、自分の一部として認めていく過程である。そのため、吃音の話の内容は症状の生起だけではなく、子どもの生活に関することが中心になる。ストーリー3において吃音に対する思いという抽象的な話をしながらも話題がA児の生活にかかわる具体的なもの（過去のクラス替え、友だちのこと、中学進学への不安）におよんでいた。一つの経験について話し合ったストーリー2においては、その経験が非常に深く話し合われていた。子どもの「吃音のある暮らし（青山, 2002）」という話題の深みと広がりがある話し合いをすることは、吃音を客観的に見つめ、吃音に対する考えを深める機会を子どもに与えると考えられる。

#### 4.4 A児の自己受容

本研究が分析した指導は通級指導のわずか1回分であった。しかし、教師はA児の気持ちを受け止めながら、吃音に対するA児の考えを整理させていた。それは、中学生になったA児の「ことばの教室に通ったことは無駄じゃなかった」ということばや学級で「小学1, 2年の時、話すのが嫌いで吃音の自分が嫌いだったけど、（ことばの教室の）B先生に会って吃音の自分と向き合えた」や「吃音者の自分であったことが今の自分を好きにさせた」という文章を書いていたことから明らかである。一方でA児が吃音と向き合えたのは、心理的ケアだけではなく、一回ではあったが、読み方の練習に取り組んだこと、さらにはリズムをとる読み方はみんなが成功するわけではなく、感情を込めにくいことまで確認し合えたことも関連していると考えられる。

A児が成人になるにはまだ時間があり、吃音への考えは何度も揺れるであろうが、小学生の時に

ことばの教室においてB教師と出会い，共に吃音について考えたことで，社会に出ても吃音のある自己を受け入れ，A児は自分の意思を実現していくことができるだろう。

#### 謝 辞

本論文の作成にあたり，快くデータを提供して下さったC小学校AちゃんとB先生に心より感謝致します。

#### 参考文献

- 1) 青山新吾．「吃音のある暮らし」への援助．実践障害児教育．7月号，(2002) p.12-13.
- 2) 朝日滋也・中村勝則・豊嶋瑞穂・太田真紀・長澤泰子．子どもとともに吃音に向き合うための教材開発の試み．日本特殊教育学会第40回大会集．(2002) p.616.
- 3) Combs, A.W. and Snygg, D. Individual Behavior. Rev. ed., NY, Harper, 1959, 522p.
- 4) 長澤泰子．どもってもいいんだよねっ．第一次試作版．未公刊, 2001, 32p.
- 5) 長澤泰子・太田真紀．「ことばの教室」における吃音指導の実態(2)．日本特殊教育学会第40回大会集．(2002) p.615.
- 6) 呉 宣児．語りから見る原風景．発達心理学研究．11(2)，(2000) p.132-145.
- 7) Van Riper, C. The nature of stuttering, Englewood Cliffs, N.J., Prentice Hall, 1971, p32-57.

## A preliminary study on the communication analysis in the clinical work at the educational setting

Taiko NAGASAWA<sup>\*1</sup> Maki OTA<sup>\*2</sup>

————— Synopsis —————

The children who stutter in the school age are treated by the teachers of the Kotoba-no-Kyoshitsu (special speech classes) in the public elementary schools, in Japan. Many teachers of the Kotoba-no-Kyoshitsu try to talk with the children who stutter about their stuttering aiming to give them the message, "It's OK to stutter." Many children, however, are not willing to talk about their problems with others, probably because of their bitter experiences in the past.

In order to clarify the points that the teachers should pay attention while they talk about stuttering with a child who stutters, a communicative interaction between a teacher and a sixth-grade girl who stutters, in which they talked about stuttering for the first time, was recorded with a VTR and analyzed. The analysis was made in terms of each utterance, the directions of the face, the facial expressions and the behaviors of the both.

The findings were as follows:

- 1) As for the child, the directions of the face and the facial expression agreed with her feelings or thoughts on stuttering rather than her utterances. The teachers, therefore, should carefully watch the non-verbal behaviors of the children when they talk about their stuttering with the child who stutters.
- 2) When the child kept in silence or responded that she didn't know to the questions, the teacher tried to figure out the reasons of her responses. The teacher changed questions into easier form and more concrete substance, assuming that the difficulty of the question for the child. On the other hand, when the teacher assumed that the child's behavior is the expression of her rejection, she changed the subject itself. Calm and composed behaviors of the teacher often led the child to talk about her stuttering again.
- 3) If the teacher tried to listen and understand the child utterances, even when the child talked her experiences negatively, she talked more about her stuttering. The teacher should not insist the message, "It's OK to stutter" to the child one-sidedly, but should talk about their life with stuttering to help them think their experiences concerning the stuttering in the past and help them accept their stuttering.

————— Key words —————

non-verbal communication, child who stutter, special speech classes, negative feeling, It's OK to stutter

\*1 Faculty of Human Cultural Sciences and Business Administrations, Nihonbashi Gakkan University

\*2 Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University

# 新古典派パラダイムと情報の非対称性問題について

古山 英二\*1

市場経済に関する新古典派パラダイムは次の仮定の上に築かれている：経済主体は合理的であり、企業は利潤の極大化を、消費者は効用の極大化を求めて行動し、市場においては完全競争が行われ市場に関する完全な情報が提供されている。このような仮定は、非現実的であり、非現実的な仮定の上に築かれた理論は経済の実態を説明できないとする批判に度々さらされる。本稿は情報の不完全性、主に情報分布の非対称性問題を考察する。

..... キーワード .....

情報の非対称性 欠陥品 群れ 効用 消費者

## 1. 新古典派のパラダイム

アルフレッド・マーシャルの有名な経済学の定義<sup>1)</sup>をもち出すまでもなく、物的満足に関わる個人的、社会的人間行動の研究が、経済学の重要な課題の一つであることには異論の余地はないであろう。しかしながら、物理学を範に厳密性を追求するあまり経済学は、経済現象の行動論的側面 (behavioral aspects) に言及することを努めて避けようとした結果、特定の刺激に対し一様に反応する homo oeconomicus (economic man = 経済人) の存在を前提に理論体系を構築せざるを得なかった。経済人とは概ね次のような存在である。彼は合理的で、財貨・サービスの価格や所得等の経済変数のいかなる微小変化や差異も識別可能 (infinitely sensitive) であり、経済変数の変化に関する情報を完全に知っているので、不確実性 (uncertainty) や危険 (risk) とは無縁である。このような前提の下に、伝統的ミクロ経済学 (Micro Economics) の価格理論は、参入・退出自由な完全競争市場における経済人の合理的行動

が、価格メカニズムを通じて希少資源の最適配分と社会的効用の極大化という社会的“善”を実現するという命題を導き出す。

経済理論の非現実性が批判される場合、批判の矛先は理論体系それ自体よりももっぱら理論の前提条件に向けられる。第一の批判は経済主体がはたして合理的に行動しているかどうかに向けられ<sup>2)</sup>、第二の批判は完全競争市場が現実に存在するかどうかという点と経済主体が市場に関する完全な情報をもちうるかどうかという2点に注目する。「経済学は役に立つのか」という俗流議論における主役は「ありもしない完全競争」と「実現不可能な完全情報」の指摘である。しかし見方を変えれば、そのような批判を可能にしているものが実は伝統的ミクロ経済学の理論そのものであり、それゆえに競争の不完全性と資源最適配分の関係、即ち市場独占の弊害、および市場情報の不完全性がもたらす諸問題、即ち不確実性とリスクの問題を分析する契機が与えられているともいえるのである。本稿の目的は市場情報の不完全性、主として情報分布の非対称性に関わる諸問題の考察である。

情報の非対称性問題とは Problems of Asymmetric Information にあてられた日本語訳であるが、その

2002年9月30日受理

The Neoclassical Paradigm and Information Asymmetry

\*1 Eiji FURUYAMA

日本橋学館大学人文経営学部

意味するところは取引関係にある経済主体の一方がより豊富な市場情報を持ち、他方がより貧弱な情報しか保有していない場合、そのような非対称的情報分布の状態が決まる均衡価格は資源最適配分を実現する Pareto-Optimum から乖離しているという問題提起であり、1970年以降取り上げられるようになったテーマの一つである。ちなみに2001年のノーベル経済学賞はジョージ・アカロフ、マイケル・スペンス、ジョージ・スティグリッツの3名に授与されたが、3名の受賞理由は for their analyses of markets with asymmetric information であった。(参考文献10参照) また、北米で広く用いられている経済学教科書の一つである Michael L. Katz, Harvey S. Rosen 共著の *Microeconomics 3rd Edition* (1998 Irwin/McGraw-Hill) は Asymmetric Information に一章を費やしている。情報の非対称性問題に対する高まる関心は、1930年代に競争の不完全性問題、すなわち imperfect competition と monopolistic competition 問題が広く議論されたことを彷彿させ興味深い。

## 2. 情報分布の非対称性の指摘

市場情報分布の非対称性が経済現象に及ぼす影響に関する最初の考察を試みた経済学者はハイエクであるとされる。フリードリッヒ・フォン・ハイエクは、1936年に London Economics Club の会長に就任したときに行った記念講演のなかで次のように述べている。

「交換経済においては、ある個人の行動は、その行動の結果他の個人が示すであろう反応が事前に明示されていることを前提に計画されると想定されている。ある個人は特定のデータに基づいて行動し、その行動自体が他の個人のデータになるという状況において、異なる多くの個人の行動が両立し得ると想定することは一見困難なようにも思えるが、伝統的な均衡分析においては、この困難性は、すべてのデータが個人の嗜好と技術的諸条件を内包する需要曲線の中に含まれており、それらがすべての個人に等しく提供されているという想定により解決されて

いる。中略 データとは行動する個人の心中に存在する主観的事実である。しかしながら、個人の経済行動の分析を経済社会の分析に展開するとき、データの内容がたちの悪い変質を遂げてしまうのである。こうした混乱の原因は、データの概念それ自体の中に求められる。

中略 経済学者はこの点に関し少なからぬ不安を抱く。そして、それらのデータは“与件”(given data)であると主張する。これでは問題が解決したことにはならない。問題は、誰に(whom)対し与えられている(given)かである。」<sup>3)</sup>

ハイエクはデータという言葉を用いているが、今日流の表現では“情報”であろう。講演のタイトルも「経済学と知識」であるが、彼自身冒頭で断っているように、題目の意味は経済学に関する知識ということではなく「知識が経済活動において果たす役割」という意味であるから、知識という言葉も情報と書き換えてよいであろう。

市場経済における情報の媒体として決定的に重要な役割を果たすものが価格である。価格はその財を生産するための技術的諸条件とその財を需要する消費者の嗜好に関する情報を含んでいる。

「ワインには赤と白の区別があるという程度の知識しかもち合わせない消費者がワインを選ぶとき、多くは価格が品質に関する情報を媒介していると判断する。より高価なワインは品質がよく、低価格のワインは品質が劣ると考え、予算と相談しながら適当な価格帯のワインを選択する。このような現象はワイン選びの場合に限定されることなく、多種多様な市場において、不完全な情報しか得ていない消費者の間で観察される」<sup>4)</sup>

## 3. 市場と価格

経済システム全体に価格が果たす役割とその本質に関する体系的な研究は、アダム・スミスを端緒とする古典派経済学者により始められた。生産の効率化を追求した結果人類は分業を発見し、分業に基づく生産体制は必然的に交換経済 = 市場経

済を生み出し、市場における財の交換比率として価格が誕生した。交換価値 = 価格を決める要素は、その財を生産するために費やされた労働時間であると考へた古典派の人々にとって、公正な市場とは1時間の投下労働を含む財1単位が2時間の投下労働を含む財1/2単位と交換される場であり、そのような交換を通じてより多くの所得を獲得するための最も効果的な手段は、市場で1時間の価値と認められる財を1時間以下の時間で生産することであった。労働生産性の向上が豊かさの源泉であると考へられた。

投下労働量と交換価値との間に因果関係が存在することは間違いないとしても、どちらが原因でどちらが結果なのかは注意深く分析する必要がある。鹿とビーヴァーの例え話によって説明を試みたアダム・スミスは、投下労働量が原因で交換価値が結果であると考えたわけだが、この論理では捕獲がより困難なビーヴァーを敢えて追い求めようとする獵師の動機を説明できない。ビーヴァーの毛皮が鹿皮の2倍の交換価値をもつことを事前に知っていたからこそ獵師は2倍の労働時間を費やしてビーヴァーを追い求めるのであって、より高い交換価値が原因であり、より多くの投下労働量はその結果に過ぎない。この矛盾をスミスは自然価格と市場価格という二つの概念を使い分けて解決しようとした<sup>5)</sup>。

即ち、獵師はビーヴァーの毛皮が市場で高価に取引されること(ビーヴァーの毛皮の市場価格が鹿皮より高いこと)を知っているので多くの時間を費やしてビーヴァーを射止めようとする。その結果ビーヴァーの毛皮の自然価格は高くなるのであるとした。しかしながら、「その商品を取得することの重要性が競争者たちにとってたまたま大きいか小さいかに応じて」また、「市場へもってこられた量が有効需要を超過するときには、中略 その総価値を支払う意思のある人々に、そのすべてが売られることはありえない。」<sup>6)</sup>ので、市場価格は自然価格を中心に上下する、と説明するのみで市場価格の本質についての精緻な分析はスミスには見られず、投下労働と市場価格の関係

は矛盾をはらんだまま後代の古典派経済学者に引き継がれていく。

矛盾に敢えて言及しないまま労働価値説を徹底的に用いて経済理論を展開したのがデイヴィッド・リカードであった。時間に還元された価値法則は、古典力学における万有引力の法則にも似て経済学を厳密科学に仕立て上げるための論理道具として好都合であったに違いない。このような価値法則を根拠にリカードは差額地代論と貿易論(比較優位説)を展開する<sup>7)</sup>。そして、「労働価値説」を徹頭徹尾用いて「社会発展」の「法則」を発見し、未来を「予測」して「社会・経済革命」の「理論」を構築したのがカール・マルクスであった。労働が唯一の価値の源泉であり、その源泉の担い手が労働者階級であると規定することにより、資本家階級と地主階級の社会的寄生性は容易に説明される。スミスの素朴な労働価値説はその後思わぬ方向へと経済学を展開する結果となった。このような経済学説史的展開を岩井克人は次のように記述している。

『資本論』の出版からまだ何年もたっていない1870年代の初頭に、イギリスのジェヴォンズ、オーストリアのメンガー、フランスのワルラスによってそれぞれ独立に発表された新古典派の経済理論のほうが、価値体系の科学としては比較にならないほどの「進化」をとげている。方法論的個人主義にもとづくこれらの新古典派経済学者は、消費者の主観的な選択と生産者の技術的選択とを分析する手段としての限界原理(微分法)を駆使して、古典派やマルクスの労働価値論を(生産技術の線形性の仮定と労働を唯一の希少な資源とする仮定に全面的に依存している)特殊モデルとして葬りさることになる。<sup>8)</sup>

新古典派が採用した方法論的個人主義によって経済学は人間行動、特に物的欲望とその充足に関わる人間行動を研究する科学としての色彩を強めた。このことは同時に経済活動における需要先行性、つまり需要あつての生産という原理を経済学に根付かせることになる。ビーヴァーの毛皮に対

する需要が増大したからこそ猟師はより捕獲が困難なビーヴァーを長時間かけて追い求め、これを市場に供給しようとしたのである。このようにして需要先行性の原理は、価値法則を投下労働量という尺度から切り離し財がその消費を通じ消費者に与える満足という主観的尺度に結びつけたのである。

新古典派が発見した方法論上のもう一つの原理は限界原理である。限界原理は、欲望充足という主観的認識が客観的に測定可能な実体性を持ち得るという前提から出発する。人間の欲望の中で価格により測定され得る欲望、つまり代価を支払って満足させようとする、あるいは満足させることができる主観的に認知されている欲望のみが経済学の研究対象であり、欲望の満足は主観的な認識であるが個人の意識の上では実体的でありかつ測定することは可能であるとされる。「十分満足した」、「ある程度満足した」、「ほとんど満足していない」といった表現は財の消費と満足との間に(基数的ではないまでも少なくとも序数的な)数量的因果関係、もっと端的に言えば消費量 $X$ を独立変数、満足度 $U$ を従属変数とする関数関係 $U=f(X)$ が成立すると考えることができる。そして、財の消費という場合、財それ自体ではなく財が提供するサービスないし効用(utility)を消費していると考えれば食料のような消費財と乗用車のような耐久消費財とを区別する必要はなくなる。乗用車の実質使用期間(より厳密にはその乗用車を私有財産ないしリースされた財として実質的に支配して満足を得ている期間)を10年とすれば、10年は120ヶ月であるから、最初の1ヶ月から最後の1ヶ月まで、その乗用車が与えてくれる1ヶ月毎の効用を主観的な満足として認識することができることに不自然さはない。そして、この乗用車が10年間に生み出す全部効用は、1ヶ月毎に生み出されるすべての追加的効用を定積分したものであり、全部効用を1ヶ月毎に追加的に消費される乗用車の部分量で微分したものが1ヶ月毎の限界効用であると結論することは論理的整合性をもつ。

限界効用は一定ではなく逡減するという考え方も十分に納得的である。例外として挙げられるのは蒐集家の場合である。日本の郵便事業が開始されて以来今日までに発行されたすべての種類の記念切手を蒐集するという目標を掲げている philatelist にとって、一枚一枚買い集める記念切手の限界効用は逡減することはないどころか、それによって蒐集が完成するという最後の1枚の限界効用は極めて大きいに違いない。こうした例外を除き限界効用逡減の法則は一般的消費行動に当てはまる。収集家の場合も、一つの collection を完成させることが消費の目的であると考えれば、記念切手の収集を完成させた philatelist が再び同様な記念切手の collection を計画することはないであろうから、二回目の記念切手 collection が philatelist に与える限界効用は限りなくゼロに近いといえる。

限界効用は消費者の主観的認識であって、これを外部から客観的に測定するためには、財1単位を獲得するために、消費者がどれだけの犠牲を払う用意があるかを観察しなければならない。犠牲とは当該財を1単位獲得するために消費者が差し出す別の財1単位のことである。貨幣経済の下ではこの犠牲は価格によって測定され得る。当該財を購入するために貨幣を支払う消費者は、その貨幣で買ったかもしれない他の財を犠牲にしたわけだから、当該財の限界効用はそれを獲得するために支払われた価格によって測定され得る。先に引用したハイエクの講演の中にある「すべてのデータが個人の嗜好と技術的諸条件を内包する需要曲線の中に含まれて[いる]」というのはこのことを意味している。消費者個人個人がもっている当該財に対する需要曲線とは、消費者自身の当該財に対する限界効用曲線に他ならない。Y軸に限界効用=価格、X軸に消費量をプロットすれば、限界効用逡減の法則にしたがってこの曲線はX軸に向かって右下がりの曲線として描かれる。消費者個人の行動が当該財の価格に影響を及ぼすことはないので、価格は与件であり、Y軸に対し一定の値をもつX軸に平行な直線として描かれる。右下

がり需要曲線とX軸に平行な価格線との交点で消費量 $Q_x$ が決まる。量 $Q_x$ において消費者が享受する総効用は、消費量 $Q_0$ から $Q_x$ までの限界効用を定積分した値に等しいが、消費者が実際に支払う貨幣額は数量 $Q_x$ と単価の積であるから、定積分値 $S$ と貨幣額 $M$ の関係は $S > M$ となり、 $S - M$ が消費者余剰である。消費者は当然の行動として、消費者余剰が最大となるような $Q_x$ を選択するであろう。このようにして、消費者が彼自身の限界効用曲線を自覚し、与件としての市場価格が明白に存在するかぎり、情報の非対称性を原因とする市場経済の歪みは生じないであろう。

#### 4. 市場と情報

経済取引はこのように売り手と買い手が明確に取引内容を認識した上で行われるものばかりではない。スティグリッツが行った分類に従って情報の非対称性が存在する可能性が高い取引の例を列挙すると次のとおりである<sup>9)</sup>。

- (a) 保険会社は被保険者自身に比べて、付保される保険のリスクに関しより少ない情報しかもち得ない。生命保険であれば保険会社は被保険者の健康状態を被保険者自身ほど正確に知る立場にない。火災保険の場合、テーブルファイアーのごときモラルハザードも発生し得ることを保険会社は予知できない。
- (b) 労働市場において労働者を募集する雇用者は、応募者が被雇用者として長期間にわたり提供することになる労働の質に関して正確な情報をもたないまま雇用契約を結ぶ。
- (c) 穀物取引業者が穀物市場で穀物を売買する場合と異なり、消費者が食料品を小売店で購入する場合、当該食料品を販売している全ての小売店の単価を調べることは実際問題不可能であるから、消費者は不完全な価格情報のまま購入することになる。
- (d) メカニズムが複雑な耐久消費財を購入する消費者は、多くの場合当該財に関する正確な技術情報をもたないまま漠然とした判断で購入するが、供給する側は当該商品の性能、耐久

性等々に関し正確な情報をもっている。

- (e) 中古車市場においては、中古車の売り手は当該商品に関する相当に正確な情報をもっているが、買い手は、塗装に傷があるか、エンジンの音が静かかどうかといった程度の情報もちうるだけで、売り手のステートメントをそのまま信用して判断する他に手段が無い。米語の俗語で質の悪い中古車を買ってしまうことを“レモンをつかまされた”と表現する<sup>10)</sup>。

上記分類の中でスティグリッツは有価証券や外国為替のような金融商品の取引を含めていない。株式売買におけるインサイダー取引などは情報の非対称性の最たるものであろうが、株式市場は投機の場合であって取引（交換）の場ではないと考えれば含めるべきではないのかもしれない。

上記5つの場合に存在する情報の非対称性から“非”を取り除く試みがそれぞれの場で行われている。生命保険会社は自ら病院を運営するか契約病院網を整備して被保険者の健康状態を出来るだけ少ない費用で検査してリスクの高い保険の引き受けを拒否する等の対策を講ずる。自動車保険の場合は、過去の自動車事故統計に基づき、保険料をハイリスクの年少者には高く、ローリスクの妻帯者・家族持ちには低く設定する。北米のレンタカー会社は20歳以下のドライバーを顧客として受け付けない。労働者を募集する雇用者は、応募者の学歴を調査し、入社試験を行い応募者の被雇用者としての資質を判断しようとする。このようにして、健康診断結果、自動車事故統計、学歴、入社試験成績等々が情報の非対称性を取り除くためのバランスファクターとして利用されている。

(c) のケースは情報コストの問題である。新聞の折り込み広告等が正確な情報（ノイズの少ない情報）を提供していると考えれば、現実問題それほど深刻ではないであろう。競争的市場においては売り手側も相当真剣に価格情報を消費者に提供する努力を行うからである。

(d) と (e) は“レモン現象”として一括可能である。レモン問題は、消費者の個人的効用曲線が不十分な知識ないし情報の上に築かれているた

めに、購入した財から提供される効用が消費者個人の期待効用値と大きくかけ離れてしまう結果生ずる現象である。レモン現象は主として耐久消費財において発生する。この場合の情報非対称性は、消費者個人がより正確な商品知識なり技術情報を持つことにより解決されるわけだが、実際には無償修理ないし無償交換を含む品質保証というかたちで解決される場合が多い。しかし、この場合無償修理ないし無償交換とは価格変更の別称に過ぎない。完全競争の下では企業は市場価格以上の価格で売ることは出来ず、利潤極大化原理に基づき企業の販売価格は企業の限界費用に等しい点で均衡するわけだから、無償修理や無償交換に応じているゆとりは無いはずである。そのようなゆとりの存在は、逆に市場の競争不完全性（独占ないし独占的競争の存在）を示唆している。このように見ていくと、情報の非対称性と競争的一般均衡（competitive general equilibrium）は両立し得ないということになる。競争的一般均衡とは、連関する全ての産業間と消費者の間に相互補完的に存在する需給関係は、市場における競争を通じて一般的に均衡し、そのような一般均衡に向かって市場価格が形成され、一般均衡価格に基づき成立する需給の一般均衡は、資源の最適配分を実現するという命題である。競争的一般均衡の否定は、市場価格の恣意性、つまり価格はそれぞれ独占的競争企業が戦略ないし戦術的に決定するもので、理論的に純粋な意味での市場価格は存在しないということになり、ワルラス ジェヴォンズ メンガーに端を発し、ケインズ革命を乗り越えて、ヒックス サミュエルソンを経て完成されたといわれている新古典派総合（neoclassical synthesis）の理論体系は崩壊してしまうのであろうか。まさかそうではあるまい。1940年代の後半から1950年代にかけて限界生産力学説を巡る同じような論争があった。大西洋を挟んで10年以上にわたり続けられた論争は、限界生産力説を“非現実的”として葬り去ることはしなかった<sup>11)</sup>。

情報の非対称性と競争的一般均衡価格成立の incompatibility を論拠として新古典派総合を否定

する場合、代替的市場理論として登場するのがゲーム理論ということになるのであるが、集合論と確率論を総合的に組み合わせて展開されるゲーム理論は、数学的モデルの一種として全く理解の圏外というわけではないのだが、この理論を現実の経済に当てはめて考えるとき、筆者の不勉強も加わって、そこには「現実はカオスなり」という答えしか得られない。確かに現実のカオスなのかもしれない。その意味でゲーム理論は現実叙述性に優れているといえよう。しかし、そこからは、新古典派総合の理論的枠組みから独占禁止法やインサイダー取引を禁止する法律が生まれたごとく、生産的政策提言や法律の理論的基礎概念が誕生するとは思えないのである。科学の合目的性と倫理性を信ずる筆者としては、ゲーム理論を市場分析に応用することにはどうも合点が行かないというのが正直なところである。

レモン問題の無償交換、返品、そして無償修理による解決と完全競争との incompatibility を救済するための一つの可能な解釈は、無償交換、返品、無償修理が全体の取引に占める割合は実は無視できるほどに小さい、ということである。パソコンを仕事に常用するようになって以来筆者は、商品の内容がほとんどブラックボックスに近い機器を度々購入するようになった。情報の非対称性の最たるものである。いずれの機器にも期限付きの無償修理の保証がついている。しかし、いままでのところ筆者はそうした機器を修理に出したことはほとんど無い。競争的均衡状態における販売価格はその商品の限界費用に等しくなるわけだが、この場合の限界費用は、製造原価、一般管理費、販売費および適正マージンの合計であると考えてよいであろう。そして、無償修理に要する費用は販売費に含まれていると考えるのである。もし返品や無償修理の要求が頻発して販売費が膨大となり赤字採算となれば、その商品は製造中止となり市場から姿を消すことになるであろう。このように理解すれば、レモン問題を無償交換、返品、無償修理の保証により解決することと競争的一般均衡は compatible となるであろう。

上記(c)の消費者が負担する情報コスト問題は、IT革命がそれこそ革命的に解決しつつある。マルコ・ポーロ、クリストフ・コロンブス、フェルディナンド・マゼラン等々の冒険は、当時の通商情報コストがいかに高額であったかを物語っている。1519年9月20日マゼラン船団は5隻の編成でセビリアを出帆したが、3年1ヶ月にわたる世界一周航海を終えてセビリアのサン・ルーカル・デ・パラメダ港に帰還できた船は、生き残りの船員18名が乗船するビクトリア号1隻のみであった。帰還船に積まれていた丁子、香料、白檀の木を売却することにより航海費用を清算して余りあったというから、これら東洋の産物が当時のヨーロッパで如何に高額で取引されていたか想像に難くない。

筆者の家庭では現在、四国のさるメーカーが製造し、インターネットと宅配便を利用して小売されている「天然低温だし醤油」という、かつお等たんぱく質系、柚子等香り系のだしの入ったパック入り醤油を愛用している。この製品を使い始めて以来普通の醤油というものを買ったことが無い。たまたま筆者が訪問した友人宅のうち数軒で同じ商品が使われているのを目撃した。いずれの家でもインターネットでその存在を知り、「おいしそうだから」ということで注文したところ、期待通りであったのでリピート・オーダーを続けているのだという。昨年のチャイコフスキー・コンクールで日本勢は、ピアノとバイオリンの二部門同時入賞という快挙を果たした。バイオリン部門で一位なしの二位に入賞した川久保賜紀のコンクール実況録音がCDとして発売されたというニュースを山野楽器のホームページで見ると筆者はすぐに注文した。驚異的な日本人バイオリニスト誕生を目のあたりにする(耳のあたりにする)実況録音に筆者は繰り返し聞き入った。インターネットの発達で消費者情報の非対称性は大幅に改善されたといってよい。

非対称性との関連で取り上げられるもう一つの問題は不確実性(uncertainty)問題である。情報とは元来不確実性を除去するための手段として登

場する概念である。不確実性問題は動物に特有のもので植物には存在しない。植物は環境の変化に適應する試みはするが、非友好的環境の変化から能動的に逃れたり、より友好的な環境を求めて移動したりすることは無い。植物は環境の変化が自らの適應能力の限界を超えて非友好的となれば座して死を待つのみであるが、動物は危険を避けようと行動する。変化を察知することが危険回避の第一歩である。変化は友好的か非友好的かのいずれかである。二つの要素から一つを選択する確率の問題として情報の本質を捕まえた天才シャノン<sup>12)</sup>は、1950年に発表した論文の中で次のように書いている。

「日常的用法では情報(information)という言葉はメッセージの意味的内容を示唆している。コミュニケーション理論ではメッセージの意味は無関係である。大切なことはそのメッセージを一つの場所から他の場所に伝達する際に生ずる困難性を如何に解決するかである。この観点より、情報とは可能な複数のメッセージを選択する場合にのみ存在するといえるのである。もしメッセージが一つしかないのであれば情報は存在せず、コミュニケーションも必要なくなる。なぜならば、そのようなメッセージは受け取る場所に記録として保存しておけば済むからである。」<sup>12)</sup>

## 5. 昆虫と人間：学際的アプローチ

不確実性を減らしリスクを回避する能動的行為は、昆虫から人間に至るまで全ての動物に共通しているbehaviorである。社会的昆虫の生態を研究しているベルギーの昆虫学者Jean-Louis Deneubourg, Jacques Marie Pasteels等の研究成果<sup>13)</sup>を紹介しながらアラン・カーマンは「蟻, 合理性, そして補充」と題する論文を書いている<sup>14)</sup>。

よく管理された蟻の巣の近くに全く同様な(identical)蟻の食べ物の山を二つ作る。食料探索に出かけた蟻が最初にどちらの山を発見するかは50%の確率で決まる。二匹目、三匹目も同様の確率で食べ物の山を発見すると期待されるが、実

際には蟻は一方の山にのみ集中的に訪れ、他方の山は見向きもされない。時間の経過とともに他方の山も偶然に発見され、一度発見されるとそちらにも蟻は訪れるようになるが、発見後の集中は同じように観察される。原因は蟻同士のコミュニケーションにあると考えられている。一度発見された餌場には確実に餌が存在するという判断が蟻の行動の中にビルトインされているのである。“柳の下のどじょう”は人間から昆虫まで動物共通の判断基準ということになる。

アラン・カーマンが蟻の世界について論じたことと同様の現象をゲーリー・ベッカーは人間について観察している。ベッカーは、スタンフォード大学がある町として知られているカリフォルニアのパロアルト (Palo Alto) を夫人同伴で訪れた際に観察した、通りを挟んで向かい合わせに立つ2軒のシーフードレストランにおける集客力の違いについて興味深い報告を書いている<sup>15)</sup>。一軒のレストランは予約を一切受け付けず、行列が出来るほどの盛況であるのに対しその向かい側のレストランは昼食時でも空き席があるような状況で、両者が提供する食事の質にそれほど大きな差があるとは思えず、また混雑しているレストランの雰囲気は騒々しくて好ましくないにもかかわらず<sup>16)</sup>長期間同じような状況が続いているという。ベッカーはそうした現象に新古典派の価格理論を当てはめて分析を試みるのであるが上手く説明がつかない。要するに混雑しているレストランの方に長蛇の列を作っている客(消費者)は新古典派が想定しているような需要曲線をもっておらず、(アラン・カーマンが紹介した蟻の行動のように)、多くの客が群がっているレストランを選好している。Homo oeconomicusの合理性ではなく昆虫の本能がリスク回避の手段として働いていることになる。

消費者が価格に敏感に反応した具体例が今年(2002年)の8月新聞に報道された<sup>17)</sup>。マクドナルドは、ハンバーガー平日1個65円、週末1個135円という価格設定を2年間続けてきたが、これを2002年2月に中止して常時80円という設定に

変更した。週末価格を下げて平日価格を値上げしたのである。その結果売上が激減し、危機感を抱いた同社は8月5日常時80円を59円に値下げした。26.5%の大幅値下げである。値下げは功を奏し、全国3,900店における値下げ初日の売上高は前日比17.7%増加したという。価格の弾力性を計算すると0.668となり、1以下であるから値下げ売上量増加 収入増加にはならなかったが、消費者が価格の変化に敏感に反応したことは事実である。はたしてそうであろうか。消費者の意識の中で「80円なら買わない、59円なら買う」という思考プロセスが働いた結果、売上が伸びたのであろうか。マクドナルドハンバーガーの80円から59円への値下げは、話題性に富んだ出来事である。自分も話題の中心に入るという意識でマクドナルドを訪れた消費者が大半ではなかったのかと思われる。結局これも、蟻が最初に発見された餌場に群がるのと同じ herding ないし epidemic と呼ばれる現象なのではなかろうか。

価格は市場情報の中でも最も重要なものであるが、商品の内容を説明する広告も消費者に影響を及ぼす重要な市場情報の一つである。広告は消費者の needs に訴える技術的内容を説明する種類のものと、ひたすら消費者の情緒ないし感性に訴えるムード的なものとに大別される。いずれの場合も広告が消費者の購買動機を動かすためには消費者の認知形成 (cognition building) に成功する必要がある。消費者の認知形成プロセスは、消費者の意識の中に記憶をベースとする受容器のようなものが既に存在し、それぞれの受容器の中に情報が取り込まれることにより意味的関連性が認識されて認知が形成されるのであろう。受容器が用意されていない砂漠のような意識にいくら情報が与えられても認知は形成されないであろう。広告は消費者の購買意欲の動機づけが目的であるが、それとはまったく逆のメッセージが消費者に送られる場合もある。喫煙の警告メッセージである。カナダは、世界で最も強力な直接的であるといわれている警告メッセージを煙草の包装に書き込むことを法律で義務付けている。メッセージは写真入

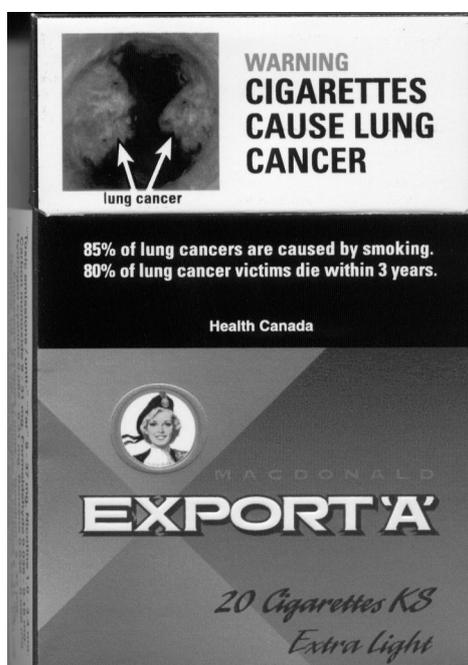


図 1

で（図 1 参照）次のような内容を喫煙者に伝える：「妊娠中の喫煙は胎児の成長を妨げます。未熟児は出産後十分に成長することが出来ず、幼児病にかかる率も高く、不具者になったり、あるいは死亡したりする危険が高まります」「喫煙は脳の動脈を詰まらせ、血流を悪くするので脳卒中の原因となります。脳卒中は不具や死亡の原因となります」「肺ガンの85%は喫煙が原因です。肺ガン患者の80%は3年以内に死亡します」

1995年に行われた調査によると、トロントのティーンエイジャーの83%はカナダの喫煙警告の内容を正確に記憶していたのに対し、シカゴのティーンエイジャーのわずか6%しかアメリカの喫煙警

告の内容を記憶していなかったという。ちなみに1991年のカナダの喫煙率（smoking prevalence rate）は男性31%、女性29%、1994年の日本の喫煙率は、男性59%、女性14.8%であった<sup>18)</sup>。これだけ直裁に煙草の害を訴えても3人に1人の男女が喫煙しているというべきなのか、強力な喫煙警告の効果で喫煙率は日本の半分になっているというべきなのか。

## 6. 結 論

市場における情報の非対称性が新古典派パラダイムに変革を迫るとすれば、それは二つの意味においてであろう。第一は、消費者が商品の内容を

正確に認知できないために商品に期待される効用と商品が現実に提供する効用との間に乖離が生じ、価格 = 限界効用の原理が成り立たなくなるという意味においてである。これがレモン問題であり、主として耐久消費財市場で発生する。第二は、リスク・ヘッジを目的とする保険等の取引において発生するリスクをヘッジする側とされる側との間に生ずる情報の非対称性という意味においてである。レモン問題は、無償交換ないし無償修理を含む品質保証により解決されるので、結局は価格問題に還元される。十分な情報を持ち、かつ認知能力が高い消費者は保証なしの低廉な商品をより少ないリスクで選択することが出来る。それが長期的であるか短期的であるかを問わず、情報は将来に関わる概念である。「一寸先は闇」という格言は risk と uncertainty を巧みに表現している。risk 回避の有力手段が「既知のパターンを踏襲する」方法である。この点に関しては59円のハンバーガーを求めてマクドナルドに殺到した消費者と仲間の一匹が最初に発見した餌場に群がる蟻とは共通した何かをもっている。あたかもプラナリアと人間に共通して circadian rhythm が存在するがごとく。

#### 参考文献

- 1) "it [economics] examines that part of individual and social action which is most closely connected with the attainment and with the use of the material requisites of wellbeing." Alfred Marshall, *Principles of Economics*, (8th edition, 1922, Macmillan), pp.1
- 2) 経済分析に心理学的手法を導入したKatona, Georgeは「消費者が合理的に行動しているかどうかを実態的に調査することから始めるべきである」と主張している。Katona, George, *Psychological Economics* (1975, Elsevier) pp.222. (本書はKatonaが1951年に出した *Psychological Analysis of Economic Behavior*, 1960年の *Powerful Consumer*, 及び1964年の *The Mass Consumption Society* をミシガン大学退任を機にまとめたもの。)
- 3) Hayek, F. A. Von, "Economics and Knowledge", *Economica*, February 1937, pp.38-39
- 4) Ross, Thomas W., "Prices, Product Qualities and Asymmetric Information: The Competitive Case", *Review of Economic Studies*, 1984, pp.197
- 5) アダム・スミス著・水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』(2001岩波書店) pp.91 ~ 103,
- 6) 前掲書pp.106
- 7) Ricardo, David, *The Principles of Political Economy and Taxation* (1911 Everyman's Library), Chapters 2 and 7 参照。優等地は劣等地よりも少ない投下労働量で劣等地と同量の収穫を生み出す。一方地代は、最後に開墾された最劣等地を基準に決まる。従って、優等地は劣等地に比べて余剰を生み出す。この余剰が地代となる、というのがリカードの差額地代論。異なる2国がそれぞれ相対的に労働生産性が異なる2財を生産しているとき、2国がそれぞれ相対的に高い労働生産性をもつ財に特化して、自由な貿易を通じて互いに不足分を融通すれば、仮に一方の賃金水準が他方より高くとも、2国が別々に2財を生産する場合よりも2国全体としての生産量は増加する。リカードは増加分を“貿易による利益”と定義した。2国をイギリスとポルトガル、2財を毛織物とぶどう酒とし、イギリスにおいては毛織物の生産性が相対的に高く、ポルトガルにおいてはぶどう酒の生産性が相対的に高いという数値例を用いて、イギリスが毛織物生産に特化し、ポルトガルがぶどう酒生産に特化して、両国が自由に2財を交換すれば、両国が生産できる2財の総量は、別々に2財を生産する場合よりも増加するという証明を行ったのが自由貿易論の元祖となった。スミスは貿易が発生する原因を二国間の実質賃金格差に求めた。スミスの理論では賃金の高い国が賃金の安い国から全てを輸入するという結論が導かれ不都合だが、リカードはその点を理論的に改良したとして高く評価された。
- 8) 岩井克人『貨幣論』(1998・筑摩書房・ちくま学芸文庫版) pp.31-2
- 9) Stiglitz, Joseph E., "Information and economic analysis: a perspective", *The Economic Journal*, (Conference Paper) 1984, Vol. 95 pp.23-4
- 10) Akerlof, George A., "THE MARKET FOR "LEMONS": QUALITY, UNCERTAINTY AND THE MARKET MECHANISM", *Quarterly Journal of Economics*, Vol.80, 1970.  
2001年のノーベル経済学賞 (the Bank of Sweden Prize in Economic Sciences in Memory of Alfred Nobel) はジョージ・アカロフ, マイケル・スペンス, ジョージ・スティグリッツの3名に授与された。受賞者の受賞記念講義が *American Economic Review*, June 2002に転載されたが、その

- 中でアカロフは1970年に提出した Lemon 論文は受理された後1年以上経過してようやく出版されたと述懐している。(Akerlof, George A., "Behavioral Macroeconomics and Macroeconomic Behavior", *American Economic Review*, June 2002, pp.413.)
- 11) この論争の簡単なレビューを筆者は日本橋女学館短期大学『紀要』第10号(1997年)の拙稿「貿易の理論に関する覚え書き」の第10項で行った。
- 12) Shannon, Claude E., "Communication Theory-Exposition of Fundamentals", *Claude Elwood Shannon Collected Papers* (1992 IEEE PRESS), pp.173
- 13) <http://citeseer.nj.nec.com/context/65224/0>というsiteにJ. M. Pasteels, J.-L. Deneubourg und S. Goss. Self-organization mechanisms in ant societies (1) Trail recruitment to newly discovered food sources. In J. M. Pasteels and J.-L. Deneubourg (eds.): From Individual to Collective Behavior in Social Insects, 155-176, 1987として紹介されている。
- 14) Kirman, Alan, "ANTS, RATIONALITY AND RECRUITMENT", *Quarterly Journal of Economics*, Vol.108, 1993, pp.137-156
- 15) Becker, Gary S., "A Note on Restaurant Pricing and Other Examples of Social Influences on Prices", *Journal of Political Economy*, 1991, vol.99, no.5 pp.1109-1116
- 16) この点に関してはベッカー教授と夫人とは意見を異にしたようである。夫人は混雑しているレストランのほうが雰囲気がよいと考え、教授は空席が目立つレストランの方が静かでよいと考えたというのである。
- 17) 『日本経済新聞』2002年8月7日および19日朝刊。
- 18) <http://www.cdc.gov/tobacco/who/canada.htm>

# The Neoclassical Paradigm and Information Asymmetry

Eiji FURUYAMA<sup>\*1</sup>

---

Synopsis

The neoclassical paradigm of market economy is based upon the assumptions that economic agents are rational seeking profit maximization and utility maximization and that perfect competition and perfect information prevail in the market. The critics of the paradigm often point out that such assumptions are unrealistic and theories based upon unrealistic assumptions are not able to describe the economic reality. This paper attempts to examine one of such criticisms, i.e., market information is imperfect in a sense that it is asymmetrically provided with the agents.

---

Key words

information asymmetry; lemon; herding; utility; consumer

---

\*1 Faculty of Human Cultural Sciences and Business Administrations, Nihonbashi Gakkan University

## 0 - 3ヶ月児をもつ母親のニーズの構造についての一考察

- 地域保健センターにおける育児支援を念頭に据えて -

柴原 宜幸\*1 橋本 栄里子\*2

産後初期の母親に対する「育児支援」を効果的に行うことを念頭に、母親の育児態度とニーズとの関連を探る目的で、質問紙調査を実施した。対象者は、都内S区在住の0 - 3ヶ月児をもつ母親152名である。うち初産婦は86名、経産婦は66名であった。

育児態度とニーズは、それぞれ25設問（すべて5件法の間隔尺度）から測定されているが、得られたデータの圧縮のため探索的因子分析を実施した。「育児態度項目」と「ニーズ項目」とで、それぞれ5因子、6因子が得られた。

これらの因子得点をもとに、初産婦と経産婦との比較を行った（t検定）。その結果、初産婦の方が経産婦に比して、育児に対して神経質かつ強迫的になっており、社会的な交流を求める傾向や外部からの育児に関連する情報を求める傾向が強いことがわかった。初産婦にとっては初めての育児であることが、大きく影響しているものと思われる。

さらに、育児態度とニーズとの関連を調べるために重回帰分析を行った。とりわけ興味深いのは、「育児解放ニーズ」が生ずるのは、初産婦においては、育児のポジティブな面が関連していたのに対して、経産婦においてはネガティブな面が関連していたことである。また、経産婦においては、育児に対してポジティブであることと「自己実現ニーズ」との間に関連がみられた。概して、初産婦には育児の喜びをもっと知ってもらおうという方向での支援が有効であり、経産婦には育児に対する精神的負荷を軽減し得るような支援が、1つの方向性ではないかと要約できるであろう。

..... キーワード .....

産後初期の母親 育児態度 育児ニーズ 育児支援

### 1. はじめに<sup>1)2)</sup>

「育児支援」ということが言われて久しい。いわゆる「育児支援」には、保健所（保健センター）や保育所が提供するサービス、民間がベースとなった「育児サークル」的なものがある（高野、1999）。あるいは電話相談やインターネット相談などもある。しかし、成木（1996）が指摘するよ

うに、育児支援の主たる課題としては、子どもの発達支援から母親の精神的支援へとの変化がみられる。すなわち、支援のターゲットは子どもではなく母親であり、しかも、一見したところ経済的にも社会環境的にも、ごく「ふつうの」母親に対する援助の必要性が問われていると考えられる。しかしながら、例えば、地域子育て支援センターにおける尽力にもかかわらず、母親の育児不安は充分には解消されていないという報告もある（神田・山本、2001）。

母親がおかれている状況が異なれば、支援の内容もそれに適合するようなものとならざるを得ないであろう。そのためには、母親自身が有するニーズに対して目を向けないわけにはいかない。こ

2002年12月1日受理

A Consideration of the structure of mother's needs while parenting baby younger than three months old: With the prospect of supporting child-care

\*1 Yoshiyuki SHIBAHARA

日本橋学館大学人文経営学部

\*2 Eriko HASHIMOTO

慶應義塾大学大学院医学研究科

れは「ソーシャル・マーケティング」の考え方であるが、今後の育児支援を考えるにあたっては、一般論に根ざした画一的なプログラムを用意するのではなく、その地域の特性を踏まえた上で、相対的により多くの者が享受し得るような、かつ限られた人的・物的資源を効率的に運用できるような支援プログラムが必要となってくるであろう。

## 2. 目 的

本研究は、産後間もない母親の精神衛生上の問題に直接に関わる、保健婦の活動に実質的に貢献できる情報を得ることを目的として行われた。対象となった地域は、東京都S区である。この地域では、産婦への保健サービスとして、新生児訪問指導や乳児検診（産後4ヶ月）が行われているのであるが、現場で母親と接する保健婦にとっては、この間に、母親がかなりの程度精神的に疲弊しているのではないかという危惧があった。そして保健婦の活動として、新たな育児支援活動を模索しているところであった。

そこで本論では、上述のような保健婦による認識が、保健婦個々人の単なる私見の域を超えて、S区における全般的な傾向として確認できるのか。また、そのような傾向の背後にある母親の育児環境はどのようなものなのか、あるいはそこからいかなる支援が求められているのか、について検討することを目的とした。なぜなら、母親が抱える問題を具体的な施策として下ろしてくるのには、地域がもつ特性の把握を抜きにしてはあり得ない。そのような観点から、S区在住の0 - 3ヶ月児をもつ母親を対象を絞り、求められている育児支援についての考察を進めていくことにする。

もちろん、限られた時空間における知見が、他の時空間的状况に何ら示唆を提供し得ないとはいえない。ここで得られた知見が、必ずしもS区特有のものとしてのみ機能するのではなく、より一般的なものとして、今後の「育児支援活動」に寄与し得る可能性も考えられる。よって本論では、具体的な方法論について模索するのではなく、ある程度の抽象性をもった、「支援の方向性」につ

いて言及することにする。

## 3. 方 法

### 3.1 グループ・インタビュー

質問紙票作成の前段階として、グループ・インタビューによる情報収集を行った。参加者は、母親学級OB会に出席した母親のうち、2ヶ月から6ヶ月児をもつ者から募った。その結果、2つのセッション(それぞれ5名・7名)が実施された。グループ・インタビューは、第2著者らが司会者(moderator)となって進められ、保健婦たちの手によってテープ起こしがなされ、第2著者の指導のもと、保健婦たちが中心となってKJ法による発言の分析が行われた。グループ・インタビューから得られた情報を要約したものは、橋本(2000)にまとめられている。

### 3.2 質問紙票

グループ・インタビューの結果をもとに、質問紙票を作成した<sup>3)</sup>。無記名式であり、回答に要する時間は約15分程度のものである。すべて母親が回答するよう指示がなされている。設問文の曖昧さや回答のしにくさ等、回答者からの表立った指摘はなかった。

質問紙票の構成としては、基本的属性(母親の年齢・子どもの月齢・子どもの性別・居住年数・家族構成・初産 - 経産の別・就労状況等)、自己効力感項目、母親のニーズ項目、母親の育児態度項目、保健サービスへの要望項目、である。本論で分析対象となるのは、初産 - 経産の別と、母親のニーズ項目25設問および母親の育児態度項目25設問である。

### 3.3 手続き

当該地域において、研究対象となる産後3ヶ月以内の母親428名のうち、保健福祉センターに出生しがきが返送されてきた220名に対して、郵送法による質問紙調査を実施した(標本抽出率51.4%)。

### 3.4 被調査者

220名の産婦のうち、152名から有効回答票が得られた（有効回答率69.1%）。一般に、郵送法による有効回答率は30%程度との指摘（平松，1998）もあるが、本研究では、非常に高い値が得られたと考えられよう。その原因に言及するのは本論の目的ではないが、保健福祉センター名での調査であり、母親のニーズに関する調査である点が影響しているのではないと思われる。すなわち、母子保健分野における行政的支援に関して、母親が当事者として大きな関心を寄せているばかりでなく、具体的な保健サービスの向上に対する期待の表れではないかと解釈し得る。

152名の内訳は、初産婦86名（56.6%：平均年齢＝30.8歳）、経産婦66名（43.4%：平均年齢＝33.0歳）であった。また、調査時点での母親の就労状況としては、初産婦・経産婦とも7割以上のもが専業主婦であり、2割強の者が産後休暇中であった。S区での居住年数は、初産婦では5年未満の者が66%、経産婦でも50%と、居住歴の比較的短い者が多かった。家族形態については、初産婦の90%、経産婦の85%が核家族であった。但し、これらの数値がS区全体の傾向を示しているかどうかについては同定できない。あくまでも、出生葉書を返送してきた者が母集団であることには留意する必要がある。つまり返送行為そのものに、すでに動機が介在していると考えられるからである。

## 4. 結果

### 4.1 単純集計

本論の分析対象となる設問はすべて、「5：非常に当てはまる～1：全く当てはまらない」の5件法によって得られた結果である。このコーディングを間隔尺度とみなし、平均値と標準偏差を算出したものが表1である。

ここで留意すべきは、天井効果<sup>4)</sup>がみられている設問がいくつか存在するという点である。表1において斜字で示されている。しかしながら、天井効果がみられていることそれ自体にも大きな

意味がある。概ね、自身の社会的交流や時間的ゆとりを欲しながらも、子どもの成長には気を配り、育児に対して肯定的である傾向をみることができる。

### 4.2 ニーズと育児態度の構造

ニーズ項目と育児態度項目、それぞれ25設問ずつについての回答が得られているが、情報の圧縮のため、それぞれについて因子分析を実施した。その際、天井効果がみられる設問が存在し、それらはデータ分布が歪んでいることを示しているが、本分析においては敢えて除外せずに因子分析に持ち込むことにした。しかし、共通性の低い設問<sup>5)</sup>については除外した。よって、ニーズ項目では25設問、育児態度項目では23設問がその対象となる。因子分析は、共通性の初期値をSMCとした主因子法を実行した。直交バリマックス回転後の因子負荷量を表2・表3に示した。これらの各因子については、次のように命名された。

#### ニーズ項目：

- 因子〔育児解放ニーズ〕1人で過ごす時間がほしいとか、たまには息抜きしたいなど、一時的にでも育児から解放されたいというニーズを表す。
- 因子〔ストレス発散ニーズ〕デパートで買い物をしたいとか、おしゃれを楽しみたいなど、何らかの形でストレスを発散したいというニーズを表す。
- 因子〔社会的交流ニーズ〕近所に友人が欲しいとか、育児仲間が欲しいといった、社会的な交流を求めるニーズを表す。
- 因子〔育児情報ニーズ〕発育状態をチェックして欲しいとか、発達や教育に関する情報が欲しいといった、育児情報を欲するニーズを表す。
- 因子〔自己実現ニーズ〕新しいことにチャレンジしたいとか、社会の中で評価されたいとか、母親役割だけに没することなく、社会の中で自分を表現したいという自己実現のニーズを表す。
- 因子〔産前回帰ニーズ〕出産以前の生活の生活に戻りたい、あるいは出産以前と変わらない生活がしたいなど、回帰願望的なニーズを表す。

表1 各設問における平均値と標準偏差 (太字は天井効果がみられたもの)

	設問	N	mean	SD
<u>ニーズ項目</u>	1) 自宅の近所に友人がほしい	152	4.16	0.95
	2) 継続的なおつきあいの育児仲間がほしい	152	4.15	0.98
	3) 立場の違う友人と会って世間のことが知りたい	152	3.74	1.10
	4) 他人よりも身内・夫に育児参加してほしい	152	4.09	1.03
	5) 身内・夫よりもプロの人のサポートがほしい	152	2.58	1.08
	6) 誰かに話を聞いてもらいたい	152	3.46	1.06
	7) 子供の発育状態をチェックしてほしい	152	3.95	1.08
	8) 早く出産以前の生活に戻りたい	151	2.91	1.16
	9) 育児中でも出産以前と変わらない生活がしたい	151	2.89	1.18
	10) 子育てから解放されて息抜きしたい	152	3.32	1.10
	11) 気軽に子供を預けてみたい	152	3.29	1.25
	12) 一人で過ごす時間がほしい	152	3.57	1.13
	13) 友人と一緒に過ごしたい	152	3.68	1.03
	14) 夫と一緒に過ごしたい	152	4.09	0.94
	15) 時にはゆっくり外食したい	152	4.38	0.86
	16) 便利な育児用品は試してらくをしたい	152	3.95	0.94
	17) 気に入った育児用品は買いそろえたい	151	3.78	1.08
	18) デパートで買い物したい	152	3.59	1.19
	19) ゆっくり眠りたい	152	4.34	0.92
	20) おしゃれを楽しみたい	152	4.01	1.00
	21) 子供づれでも旅行に行ってみみたい	152	4.51	0.84
	22) 子育て中も働いて社会の中で評価されたい	152	3.05	1.22
	23) きちんとした「よい母親」になりたい	152	3.62	0.99
	24) 子供のために発達や教育に関する情報収集したい	152	3.88	0.98
	25) 子育てしながら新しいことにもチャレンジしたい	152	3.93	1.03
<u>育児態度項目</u>	1) できるだけ子供のペースに合わせて生活している	151	4.13	0.82
	2) 子供が泣くと気になって他に何もできない	151	3.16	1.16
	3) 夜泣きに対処するのは「私だけ」である	151	3.32	1.32
	4) 子供を預けて外出する方だ	151	2.38	1.20
	5) 同じ月齢の子供と自分の子供とを比較することがある	151	2.87	1.03
	6) 子供といると心が安らぎ一緒にいたいと思う	151	4.25	0.75
	7) 子供の身体の発育状態は気にしている	151	4.09	0.97
	8) 子供の衛生環境 (汚れや雑菌等) が気になる	150	3.71	1.07
	9) 育児のことで他人に口出しされたくない	151	3.20	0.98
	10) 子供連れで外出したとき他人の視線が気になってしまう	151	2.64	1.08
	11) 社会に取り残されてしまうのではないかと焦りを感じる	151	2.37	1.21
	12) 育児をすることで毎日の生活に張りがあると感じる	151	3.45	0.94
	13) 自分がよい母親かどうか自信が持てない	151	2.86	0.93
	14) 子供が成長することは私の喜びだ	151	4.44	0.70
	15) 夫は育児の大変さを理解してくれている	151	4.13	1.05
	16) 子育ては自分自身の成長にもつながっている	151	4.54	0.73
	17) 最近の子供の社会問題は母親の責任だと思う	151	3.48	0.94
	18) 母親ならば子供の泣き方でその原因が分からなければと思う	151	3.03	0.97
	19) 母親はつねに子供の側にいてあげるべきだと思う	151	3.17	1.03
	20) 子供を可愛くないと思う瞬間は誰にでもあることだ	151	3.44	1.14
	21) 涙が止まらなかつたり落ち込んだりすることがある	151	2.72	1.24
	22) 子育てに余裕を持って対処できていると思う	151	3.25	0.92
	23) 自分の子供はやっぱ特別に可愛いと感じる	151	4.59	0.66
	24) 出産以前も子供とはよく接した方だ	151	2.96	1.41
	25) 子育ては地域社会全体で行われるものだと思う	151	3.70	0.92

表2 ニーズ項目における因子分析の結果

設 問 内 容							共通性
12) 1人で過ごす時間	.707	.086	-.025	.004	.180	.071	.545
10) 息抜き	.672	.070	.153	-.066	.018	.366	.618
11) 気軽に子供を預ける	.637	.023	-.036	.030	.316	.107	.519
15) ゆっくり夕食	.504	.388	.052	.239	-.105	-.027	.476
13) 友人と一緒に過ごす	.404	.160	.237	.180	.351	.047	.403
18) デパートで買い物	.063	.665	.208	.074	-.087	.158	.528
17) 育児用品を買い揃える	-.057	.613	.214	.212	.098	-.115	.492
16) 便利な育児用品	.337	.606	.181	.163	-.027	-.083	.547
20) おしゃれを楽しむ	.080	.581	.005	.136	.110	.295	.461
19) ゆっくり眠る	.169	.302	-.043	.229	.022	.160	.200
01) 近所に友人	.010	.237	.817	.109	.076	.035	.743
02) 継続的な育児仲間	-.036	.104	.795	.094	.142	-.099	.683
06) 誰かに話を聞いてもらう	.298	.042	.473	.249	-.178	.174	.438
03) 世間のことに対する知識	.235	.030	.357	.118	.344	.050	.318
04) 身内・夫の育児参加	-.001	.111	.332	.155	-.217	.076	.199
07) 発育状態のチェック	.124	.066	.243	.622	-.126	.071	.486
24) 発達や教育に関する情報収集	-.145	.231	.103	.508	.118	.174	.388
23) 「良い母親」	-.085	.180	.055	.474	.145	.190	.325
14) 夫と一緒に過ごす	.165	.241	.002	.400	.084	.050	.255
21) 旅行に行く	.034	.254	.132	.385	.065	-.051	.238
05) プロの人のサポート	.202	-.208	.172	.359	-.022	.137	.261
25) 新しいことにチャレンジ	.155	-.000	.078	.066	.735	.005	.574
22) 社会の中で評価	.085	.039	-.073	.038	.648	.073	.441
08) 出産以前の生活	.119	.049	.031	.135	.011	.784	.651
09) 出産以前と変わらない生活	.218	.124	.028	.230	.102	.688	.600
因子負荷量の2乗和	2.281	2.159	2.102	1.746	1.553	1.550	
因子の寄与率(%)	9.124	8.636	8.409	6.984	6.210	6.201	
累積寄与率(%)	9.124	17.760	26.169	33.153	39.363	45.564	

育児態度項目：

- 因子 〔育児充実的態度〕育児は自分自身の成長につながるとか、子どもの成長を自身の喜びとするなど、育児に充実感をもった態度を表す。
- 因子 〔強迫的態度〕母親はいつも子どもの側にいてあげるべきだとか、泣き方で原因が分からなければといった、ある種強迫的観念にとらわれている態度を表す。
- 因子 〔神経質的態度〕衛生環境が気になったり、発育状態が気になったりといった、育児に対していささか神経質になっている態度を表す。
- 因子 〔育児適応的態度〕育児不安の態度の反対である。育児に対して余裕を持って対処できている態度を表す。
- 因子 〔抱え込み的態度〕夜泣きに対処するのは自分だけであり、育児に対して口出しされたくないといった、育児役割を抱え込んでしまっ

ている態度を表す。

育児態度因子の抽出にあたっては、柴原・橋本(2002)との間に若干の相違がみられるが、投入する変数の違いによるものである。しかしながら、その解釈には大きな相違がないものと考えられる。

4.3 初産婦と経産婦との違い

因子分析によって得られたニーズ因子と育児態度因子について、初産婦・経産婦別に因子得点を求め、初産婦と経産婦との違いをみるために平均値の差の検定(t検定)を行った(表4)。有意差がみられた因子は、「社会的交流ニーズ」「育児

表3 育児態度項目における因子分析の結果

設 問						共通性
16) 子育ては自分自身の成長	.583	.176	-.029	.092	-.037	0.381
12) 育児が生活の張り	.569	.114	-.025	.126	.029	0.353
14) 子供の成長は喜び	.523	.326	.238	.112	.096	0.458
15) 夫は育児の大変さを理解	.389	.115	-.024	.054	-.328	0.276
24) 出産以前に子供とよく接した	.386	.008	-.051	.085	-.105	0.170
23) 自分の子供はかわいい	.315	-.011	.256	.075	.181	0.203
11) 社会に取り残される焦り	-.270	.139	-.028	-.171	.228	0.175
19) 子供の側にいてあげるべき	.231	.618	.028	-.029	.217	0.484
18) 泣き方でその原因が分かる	.115	.562	.131	-.032	.041	0.349
17) 社会問題は母親の責任	.157	.446	.078	-.057	-.025	0.234
01) 子供のペースで生活	.079	.400	.254	-.057	.194	0.272
25) 子育ては地域社会全体で	.385	-.394	-.145	.038	-.008	0.326
08) 衛生環境が気になる	-.043	.268	.728	.031	.126	0.620
07) 発育状態を気にする	.013	.058	.658	-.091	.005	0.444
06) 一緒にいたい	.382	.160	.429	.355	-.017	0.482
02) 泣くと気になる	-.159	.334	.384	-.225	.314	0.433
20) 可愛くない瞬間は誰にもある	.120	-.339	-.381	-.296	.179	0.394
13) よい母親の自信がない	-.160	.175	-.112	-.611	-.012	0.442
22) 子育てに余裕をもって対処	.302	.042	-.149	.605	.039	0.483
21) 落ち込んだりする	-.062	.051	.042	-.557	.042	0.320
03) 夜泣きに対処は「私だけ」	-.072	.265	-.094	-.034	.462	0.299
09) 他人に口出しされたくない	-.019	.041	.171	.022	.459	0.243
04) 預けて外出	.090	-.225	-.224	.131	.231	0.179
因子負荷量の2乗和	1.977	1.882	1.800	1.434	0.930	
因子の寄与率(%)	8.595	8.180	7.828	6.236	4.043	
累積寄与率(%)	8.595	16.775	24.603	30.838	34.881	

情報ニーズ」「強迫的態度」「神経質的態度」の4因子であり、いずれも初産婦の方が経産婦よりも有意に高い因子得点を示していた。すなわち、初産婦の方が相対的に、育児仲間を欲し、育児情報をより多く求め、母親の「あるべき姿観」に対して敏感に反応し、育児にまつわる事象に対して過敏に気を配っているといった傾向をみてとることができよう。

#### 4.4 ニーズと育児態度との関連

しかしながら、育児態度とニーズとは独立的に扱えるものではなく、ニーズが発生するにはそれなりの状況があろう。そしてそれは、客観的な状況というよりはむしろ、母親個人が有する「状況の認知」の仕方や、「母親観」「育児観」「子ども観」などに規定されている部分が大きいと考

えられる。そしてそのような観念は、育児経験に大きく影響されるものである(柏木・若松,1994)。よって、初産・経産別にニーズと育児態度との関連をみるために、因子得点をもとに重回帰分析を行った。分析に際しては、育児態度が先行要因としてニーズを発生させるとの考えから、また、各ニーズ因子間の相関が有意ではないためそれぞれを独立の因子とみなし、ニーズの各因子を目的変数、育児態度の5因子を予測変数とし、全変数を投入した。

重回帰分析において、初産婦と経産婦を比較した場合、「育児態度」が「ニーズ」を誘発するという流れにおいて、若干異なる結果が得られた(表5)。初産婦においては、育児に対して充実感を得られない場合、育児から解放されたい、あるいは出産以前のような生活がしたいというニーズ

表4 初産婦と経産婦との因子得点における差の検定

因子	初産婦			経産婦			t値(df)
	N	mean	SD	N	mean	SD	
育児解放ニーズ	86	-.098	.892	66	.128	.883	1.555 (150)
ストレス発散ニーズ	86	.078	.797	66	-.102	.968	1.260 (150)
社会的交流ニーズ	86	.154	.869	66	-.201	.923	2.427 (150) *
育児情報ニーズ	86	.336	.674	66	-.438	.794	6.501 (150) ***
自己実現ニーズ	86	-.034	.907	66	.044	.800	0.556 (150)
回帰ニーズ	86	.056	.864	66	-.073	.871	0.904 (150)
育児充実の態度	86	.013	.863	66	-.017	.822	0.213 (150)
強迫的態度	86	.165	.822	66	-.215	.783	2.883 (150) **
神経質的態度	86	.296	.759	66	-.386	.810	5.339 (150) ***
育児適応的態度	86	-.052	.846	66	.067	.756	0.902 (150)
抱え込みの態度	86	.021	.712	66	-.028	.765	0.400 (150)

\* : p<.05 \*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

表5 ニーズ因子と育児態度因子との重回帰析の結果

目的変数	予測変数 ( )					R <sup>2</sup>
	育児充実的	強迫的	神経質的	育児適応的	抱え込み的	
初産婦 育児解放ニーズ	-.314**	-.155	-.151	-.151	.113	.207**
初産婦 ストレス発散ニーズ	-.192	.119	.236*	.030	.079	.115
初産婦 社会的交流ニーズ	.130	-.038	-.012	-.054	-.056	.023
初産婦 育児情報ニーズ	.097	.242*	.257*	-.161	.024	.175**
初産婦 自己実現ニーズ	-.073	-.077	.001	.044	.037	.015
初産婦 産前回帰ニーズ	-.219*	.067	-.000	-.181	.167	.121
経産婦 育児解放ニーズ	.178	-.217*	-.203	-.471***	.266*	.345***
経産婦 ストレス発散ニーズ	.043	.108	-.072	.121	.130	.049
経産婦 社会的交流ニーズ	.040	.188	.003	-.158	.157	.094
経産婦 育児情報ニーズ	.237	.270*	.141	-.106	-.081	.154
経産婦 自己実現ニーズ	.355**	-.028	-.136	-.037	.192	.173*
経産婦 産前回帰ニーズ	-.428***	-.008	.072	-.238*	-.088	.314***

\* : p<.05 \*\* : p<.01 \*\*\* : p<.001

が強くなる。また、育児に対して強迫的・神経質的に取り組む姿勢が育児情報をより強く求め、神経質的な育児態度がストレス発散ニーズを高める、という傾向にある。

一方の経産婦においては、育児に対して強迫的ではない方が、また母親に責務がかかり育児不安に陥っている状況が、育児からの解放ニーズを高めている。強迫的な育児態度は、育児情報を求めることとも関連している。また、育児に充実感を持ち得ず不安を抱えている場合、出産以前の生活への回帰ニーズが高まる。その一方で、育児に対して充実感を得ている方が、社会の中での自分を

表現したいという自己実現ニーズが強いことが伺える。

## 5. 考 察

ある特定の地域に対する調査ではあるが、産後初期の母親がどのような育児に対する考えをもち、どのような育児環境下で生活をし、どのようなニーズを有しているか、実態調査的には、単純集計の結果をみただけでも、その輪郭は捉えられるものと思われる。

しかしながら、初産婦と経産婦とではその育児態度のいくつかの違いがみられた。因子得点をも

とにした t 検定の結果有意であったものは、「神経質的態度」と「強迫的態度」であり、いずれも初産婦の方が高かった。また、ニーズにおいても「社会的交流ニーズ」と「育児情報ニーズ」において、初産婦の方が有意に高いことが示された。これらは、初産婦が初めての育児であることに起因しているものと思われる。本研究の対象者の9割が核家族であったこと、とりわけこの時期の子どもの発達状況が目に見えにくいことなどを鑑みると、非常に納得のいく結果が得られているものと思われる。一方の経産婦においては、育児経験をもとした知識、あるいはいい意味での適当さを身に付けている面もあろうが、上の子どもとの関わりもあり、現実問題として乳児に没頭してられないことも考えられる。

なお、初産婦と経産婦との平均年齢の違いは有意である ( $p < .001$ ) が、当該地域での居住年数には、両群に有意差はなかった。よって、社会的交流ニーズの差が居住年数の差を反映しているとは判断できない。ここでの「社会的交流」とは、育児仲間とは限らないものの、やはり育児にまつわる話題が通じる交流を意味しているのであろう。そのために、育児経験を有する母親には既存の交流網があると考えられる。しかし、経産婦といえども、このニーズが決して低いわけではない。この因子を構成する設問に対する回答には、天井効果がみられているのである。母親同士の交流も、上の子どものときに形成した関係が疎遠となりがちで、新たな交流網を築いていかなければならない面もあろう(橋本・柴原, 2002)。

母親個々が有するニーズには、当然のことながら、その母親自身が抱える状況が大きく関与している。育児支援として、その多くに対処することはある意味で重要なことではあるが現実的ではない。行政的な方略としては、母親のニーズを最大公約数的に括ることから着手することが要求される。しかしニーズそのものに応答的に関わるのは、対症療法的な側面もある。ニーズに応えらるとともに、そのニーズを発生させている育児態度にも配慮がなされるのが肝要であろうと思われる。

そこで本研究では、育児態度とニーズとの関連をみることによって、母親の特性によるニーズの違いを探ることとした。まず初産婦では、育児に充実感を感じているほど、育児解放ニーズや産前産後回帰ニーズは低いものとなっており、育児におけるポジティブな面(自分自身の成長でもあり、生活の張りである)を母親が感じ取ることができるような支援が必要であることが示された。また、より多くの育児情報を欲する母親は、強迫的・神経質的な育児態度で子どもと向き合っている傾向にあり、育児情報の提供の仕方には十分な留意が必要であろうと思われる。上記のような母親は、外部からの情報に対して、柔軟にそれを受け取り、臨機応変に処理することが苦手であろうと考えられるからである。しかし、本研究からは明らかにできないが、これまで入手してきた育児情報によって、このような強迫的・神経質的な育児態度が形成されている面も考えられる。そして現実の育児生活とのギャップが、さらなる情報を求めるといふ循環にも留意する必要がある。

次に経産婦であるが、初産婦と異なり、育児解放ニーズが育児のネガティブな側面(育児不安・抱え込み的態度)と関連している。このことは、経産婦であるが故の状況、すなわち上の子どもの育児とかけ離れやすくなるを得ない乳児の世話とが、精神的・肉体的負担となっているものと思われる。後述するが、本研究対象はほとんどが核家族であり、日中、複数の子どもの世話が母親にかかっているのである。しかしその一方で、強迫的態度は育児解放ニーズに負の影響を与えている。つまり、ある固定化した「母親であれば…べき像」をもつ母親は、育児から解放されたいという回避的なニーズではなく、逆にもっと育児情報を手に入れたいという接近的なニーズをもつようである。このことは初産婦の場合にも当てはまる。よって初産婦の場合と同様、与えられる情報が硬直化したものであれば、母親の強迫的態度をますます強化することにつながりかねない。そのような状況は、明らかに悪循環と称して差し支えないであろう。

また経産婦の場合、育児に対して充実感をもつということが、産前回帰ニーズを弱め、自己実現ニーズを高めることと関連している。育児経験を経ることによって「自己が強くなり」「視野が広がり」(柏木・若松, 1994), 子どもの成長とともに楽しみつつ、より大きな社会的な文脈での自分自身の可能性を模索していきたいということであろう。育児だけが生きがいではなく、育児も自分らしさも追及する現代の母親(大日向, 1988)の一端を示していると思われる。しかし、このことはこの時期の初産婦には当てはまらない。「自己実現ニーズ」の強さ自体には初産婦と経産婦との間で有意差がみられなかったのであるが、初産婦の場合、産後の経過日数が少ないこともあり、育児に埋没している現況からは、社会的参加は漠然とした希望の域を出ないものなのかも知れない。

本研究は、産後初期の母親がもつニーズを把握するとともに、その背後にあると思われる育児態度をも把握し、その関連について検討することを目的になされた。ここで筆者らが得た知見としては、概括的には、初産婦には育児の喜びをもっと知ってもらおうという方向であり、経産婦には育児の否定的側面を軽減する方向を支援するのが、1つの方向性ではないか、と要約できるであろう。しかしそれをどのように具現化させていくかは、限られた人的・物的資源の中での多くの試みとその評価との、円環的な作業とならざるを得ない。また本母集団が、都内S区という特定の対象であることは、非常に重要なことである。例えば、筆者らが東京近県のY市において同様のグループインタビューを行った結果からは、S区とは異なるニーズが抽出できているのである(橋本・柴原, 2002)。

また本論文では、母親の就労状況による違いや家族構成による違い、経産婦の場合の上の子どもの数や年齢差などについては言及されていない。もちろん、このような要因が母親のもつニーズや育児態度と関連がないということではない。むしろかなりの程度影響を及ぼし得る要因であろう。しかしながら、本研究で得られた標本においては、

ほとんどの者が専業主婦であり、また核家族であった。そのため、直接これらの要因を予測変数として扱えなかったことによる分析の不備は免れない。ただ、保健センターへの出生葉書を投函した者が本調査の実質的な母集団であることを鑑みると、有職の母親にとっては新生児訪問は煩わしいものであったり、拡大家族の母親にとっては、育児に関わる情報のリソースがすでに得られていることを意味しているのかも知れない。保健所(保健センター)を想定した支援活動のあり方としては、この点の検討は重ねて議論されるべきものであろう。

加えて指摘しておきたいことは、このような調査結果を踏まえて、S区の保健福祉センターでは、新たな育児支援事業が試験的に実施されたことである。略述すれば、乳児の検診に訪れた経「産」婦と母親学級に参加した初「妊」婦との相互交流である。もちろん、そのような事業の評価は長期的な観点からなされる必要があるろうし、このことの詳細は本論の目的から逸脱するため、橋本(2001)を参照していただくとして、ここでは、当該住民のニーズを把握することが「育児支援」を効率的に実施することの第一歩であることを指摘しておきたい。

#### 引用文献

- 1) 橋本栄里子.“ ソーシャル・マーケティング分析アプローチ”. 厚生科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)分担研究報告書・地域保健活動の類型化と展開方法の適用に関する研究, 平成11年度報告書.(2000). pp.51-78.
- 2) 橋本栄里子.“ ソーシャル・マーケティング分析アプローチ(全体的実践報告~昨年度補足分~)”. 厚生科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)分担研究報告書・地域保健活動の類型化と展開方法の適用に関する研究, 平成12年度報告書.(2001). pp.87-102.
- 3) 橋本栄里子・柴原宜幸.“ フォーカス・グループインタビュー法をどのように活用したか”. 保健婦雑誌, 58(1).(2002). pp.22-30.
- 4) 平松貞実.“ 世論調査で社会が読めるか”. 東京, 新曜社, 1998.
- 5) 神田直子・山本理絵.“ 乳幼児を持つ親の, 地域子育て支援センター事業に対する意識に関する

- 調査：子育て支援事業参加者と非参加者の比較から”。保育学研究, 39 ( 2 ). ( 2001 ). pp.80-86 .
- 6) 柏木恵子・若松素子.“「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み”。発達心理学研究, 5 ( 1 ), ( 1994 ). pp.72-83 .
- 7) 成木弘子.“公的な保健サービス機関での育児支援：保健所や市町村での活動”。現代のエスプリ, 342 . ( 1996 ). pp.182-186 .
- 8) 大日向雅美.“母性の研究”。東京, 川島書店, 1988 .
- 9) 柴原宜幸・橋本栄里子.“産後初期の母親の心理 ( 3 ) : 育児態度とニーズとの関連”。第66回日本心理学会発表論文集 . ( 2002 ). p.1032 .
- 10) 高野陽.“子育てと社会”。財団法人女性労働協会.“育児サポート”。東京, 財団法人女性労働協会, 1999 . pp.283-288 .
- 11) 田中敏.“実践心理データ解析”。東京, 新曜社, 1996 .

## 注

- 1) 本論は, 柴原・橋本 ( 2002 ) を再分析・再検討し, 加筆・修正を行ったものである。
- 2) 本研究は, 厚生科学研究費から平成10年度~12年度に助成を受けた「地域保健活動の類型化と展開方法の適用に関する研究」(主任研究者: 岩永俊博) の分担研究の一部である。
- 3) 世田谷区保健福祉センターの田中良明氏をはじめとする職員の方々, および渋谷区保健所の前田秀雄氏, 日赤看護大学・成木弘子助教授には, 質問紙票の作成に関して貴重なコメントをいただいた。この場を借りて深謝申し上げる。
- 4) ここでの天井効果の定義は,  $5 < \text{mean} + S D$  (田中, 1996) である。
- 5) 因子の決定に際して0.4くらいの因子負荷量を想定したために, 0.16を臨界値とした。育児態度項目の5) と10) が該当する。

# A Consideration of the structure of mother's needs while parenting baby younger than three months old

With the prospect of supporting child-care

Yoshiyuki SHIBAHARA<sup>\*1</sup> Eriko HASHIMOTO<sup>\*2</sup>

---

Synopsis

This paper focuses on the relationship between the mothers' child-care attitudes and their needs while parenting, for improvement of supporting child-care at the early stage after giving child. We conducted a questionnaire survey on 152 mothers in Tokyo metropolitan area who had baby younger than three months old. 86 mothers were primiparous and 66 were multiparous. And the questionnaire contains 25 items about the attitudes and 25 about the needs. All questions require answering with 5-level interval scales.

In this study, the exploratory factor analysis reveals 5 factors from the items of the attitudes and 6 from those of the needs. Then t-test for comparing the factor scores of the primiparous with those of the multiparous shows that the primiparous become more nervous and more compulsive than the multiparous, and the primiparous tend to want social friendships and to rely on outside information from such human relations which helps them care baby.

Furthermore the multiple regression analysis is conducted on both data of the primiparous and of the multiparous, for analyzing the relationship between the attitudes and the needs. The outstanding result from the analysis shows that the primiparous' "desires for disembarassment from child care" is explained with positive aspects of child-care, but that of the multiparous is explained with negative aspects. Also the multiparous' search for self- fulfillment is related with their positive attitude for child-care.

---

Key words

mother at the early stage after childbirth; child-care attitude;  
needs while parenting; support to child-care

---

\*1 Faculty of Human Cultural Sciences and Business Administrations, Nihonbashi Gakkan University

\*2 Graduate School of Medicine, Keio University

## 馬車と宮殿

### － 17世紀のピッティ宮諸計画案における馬車の影響 －

金山 弘昌<sup>\*1</sup>

16世紀後半のヨーロッパ諸宮廷において、ある新しい流行が広まった。馬車の使用である。同世紀末までに馬車は貴族階級の主要な移動手段となり、さらには宮廷儀礼において重要な役割を果たすようになった。馬車の急速な普及は建築や都市計画にも影響を与えた。それまでは騎馬のみを前提としていたパラッツォ（都市型邸館）において、馬車庫や馬車の動線の確保が必要となったのである。

この点について、本論考では、17世紀イタリアのパラッツォの建築計画における馬車の使用の影響を、フィレンツェのピッティ宮の事例の検討を通して考察する。

トスカーナ大公の宮殿である同宮は、当初ルネサンスのパラッツォとして建設された後、16世紀後半、いまだ馬車が決定的に普及する以前に増築改修された。それ故、翌17世紀においては、馬車のための諸設備の増築の必要が明白かつ緊急の課題となった。

まず1610年までにボーボリ庭園に至る馬車の「通路」が設けられた。さらに同宮改修のための多くの未実施の計画案の中にも、馬車関連の施設の提案が見出される。1641年には、大公の建築家アルフォンソ・パリージが、大公の弟ジョヴァンニ・カルロ公の意見に基づき、ロジリア（開廊）形式の馬車庫を新設の側翼に設けることを提案した。また宮廷のグアルダローバ職で技師のディアンチント・マリア・マルミが1660年代と70年代に提案した各種計画の中にも、馬車庫や多数の馬車の使用に適した広場の整備、中庭からボーボリ庭園に至る新しい馬車道などが見出される。

さらに大公の「首席侍従」のパオロ・ファルコニエーリも、1681年にピッティ宮の全面改修を提案した際、馬車関連施設の不備を同宮のもっとも重大な欠点の一つと考えた。ファルコニエーリは特に馬車の動線システムの再構築に配慮し、デコールム（適正さ）の原理を遵守しつつ、大公やその一族の馬車動線を「雑役」用のそれと明確に区別した。

このように、たとえ大半の提案が構想段階に留まったとはいえ、17世紀の大公の宮廷の建築家や廷臣たちが、馬車の問題に対して常に関心を払っていたことは明らかなのである。

..... キーワード .....

馬車(16-18世紀) ピッティ宮(イタリア、フィレンツェ) 建築(イタリア、フィレンツェ、16-18世紀)  
トスカーナ(イタリア)の宮廷と宮廷人 パオロ・ファルコニエーリ(1634-1704)

### 1. 序

16世紀後半のヨーロッパ諸宮廷は、ある新しい風俗の流行に直面した。馬車の使用である。急速

に普及した馬車は、やがて同世紀の末、上流階級のそれまでの主な移動手段であった騎馬に取って代わったのである。この変化は建築にも少なからぬ影響をもたらし、とりわけ宮殿や貴族の館においては、馬車用の設備が必要となった。

本論考は、馬車が宮殿建築に与えた多大な影響について、とりわけ17世紀のピッティ宮をめぐる諸計画案における馬車関連施設の検討を通して確

2002年9月30日受理

Le carrozze ed una reggia: l'influenza dell'uso del cocchio nei progetti secenteschi per Palazzo Pitti

\*1 Hiromasa KANAYAMA

日本橋学館大学人文経営学部

認する。

15世紀半ばに建設が開始されたフィレンツェのピッティ宮(パラッツォ・ピッティ)は、16世紀半ば以降、19世紀までメディチ、ロレーヌ両家の歴代トスカーナ大公の宮殿となり、その間度重なる増築改修の対象となった。なかでも17世紀には、宮廷の規模の拡大と宮廷生活の大きな変容を反映して、もっとも大規模な増築がおこなわれ、また数多くの改修の計画が提案された。

1681年、時の大公コジモ3世の芸術担当の側近であった宮廷人パオロ・ファルコニエーリ Paolo Falconieri (1634-1704) が大規模な改修を提案する。彼は計画の記述の中でピッティ宮の問題点を数多く指摘、その中で馬車に関する施設の不備を挙げている。

「ピッティ宮は内外に数多くの欠点と不便を抱えている。(中略)外部の不便としては、君主の宮殿には多くの馬車が往来するにも関わらず、馬車の有蓋車庫が不備であることが挙げられる。内部については、公子が馬車とともに中庭におられ、馬車に乗って庭園〔註：ポーポリではなく、中庭と隣接するマッティアス公の専用庭園 giardino segreto〕を通過して上の居室に向かわれるときに、宮殿の外部に出、高貴ならざる、あるいは長い路をお通りにならなければならないことが挙げられる」<sup>1)</sup>

後にファルコニエーリの提案を出版した友人の美術史家フィリッポ・バルディヌッチ Filippo Baldinucci (1624-96) は、草稿の余白に上記の批判に対する次の反論を記した。

「これはアンマナーティを責めるべき問題ではない。なぜなら当時は馬車はたいして用いられていなかったのだし、また騎馬用であればモーセの泉の裏に昇降路がある。察するに、当時はこちらの方が必要とされていたのだ」<sup>2)</sup>

さらにバルディヌッチの手を経て出版された記述では、ピッティ宮の欠点についてのファルコニエーリの直截な批判は和らげられ、あたかも設計者プルネレスキヤ増築をおこなったアンマナーティを弁護するかのようになり、以下の意見が述べられ

ている。

「それに加えて当時〔註：15世紀の創建時〕は君主が住む必要はなく、それは後の時代になって生じた要請であった。また今日のように、諸君主の宮殿をぐるりと取り巻く膨大な数の馬車が、そのためのたいそうな準備 gran provvedimenti を無理強いすることもなかった」<sup>3)</sup>

つまりバルディヌッチによれば、馬車への配慮が必要になったのは「近代」の新しい状況ということになる。実際、イタリアにおける馬車の導入こそ16世紀初頭であったが、その本格的普及はようやく同世紀末の現象であった。ピッティ宮が君主の宮殿として整備された1550年代から70年代という時期は、馬車普及の過渡期に相当し、それ故に在来の移動手段であった騎馬が考慮された一方、馬車への配慮に欠いていたわけである。かくして17世紀にはその問題の解決が急務となったのである。

宮殿建築の計画における馬車への配慮は、単に実際の施設の問題に留まらない。17世紀の宮廷において、馬車は単なる物理的な移動手段に留まらず、宮廷活動の要である儀礼において重要な役割を演じていた。従って馬車関連の施設の整備は、王侯の居室や儀礼的動線の整備に匹敵する価値を与えられていたのである。

このような重要なテーマではあるが、17世紀の宮殿と馬車の関連についての研究は Waddy による先駆的かつ基本的研究を除き非常に限られている<sup>4)</sup>。とりわけピッティ宮については若干の言及があるだけである<sup>5)</sup>。このように同宮での実際の馬車の使用状況についてもまだ未解明の部分が多いとはいえ、同時代の諸計画を文献史料や図像史料を通して検討することで、当時の宮廷人たちが思い描く馬車と宮殿の理想的な関係について窺い知ることができよう。

## 2. 17世紀イタリア宮廷社会における馬車と関連諸施設

論を進める前に、まず17世紀イタリアにおける馬車をめぐる状況について、先行研究を基に概略を確認したい<sup>6)</sup>。

優れた道路網を擁したローマの衰退後、中世の西欧における馬車 *carro* の利用は限定的であった。車軸の上に直接車体を載せた中世の馬車の乗り心地は悪く、その用途は純粋な儀礼用か、輸送手段としての荷馬車に限られていた。中世の上流階級は、騎士制度を背景にして、日常と儀礼の両面においてむしろ騎馬をおもな移動手段としていた。馬車が上流階級の移動手段として評価されるようになるのは、ようやく16世紀以降である。近代的な馬車は、おそらく15世紀のハンガリーで誕生したとされる。それは車体を車軸と分離して懸架装置で支え、乗り心地を改善した軽量の四輪馬車であった。この新しい馬車がやがて他の西欧各国に導入されたのである。伊語では *cocchio*（ハンガリーの地名 *Kocs* にちなむ）あるいは *carrozza* と呼ばれる、この種の馬車がイタリアに導入されたのは1509年以前とされる<sup>7)</sup>。日記作者 *Lapini* の証言によれば、フィレンツェ最初の馬車の登場は1534年のことである<sup>8)</sup>。当初はおもに婦人の乗り物であったが、やがて16世紀末以降、王侯貴族や高位聖職者などの乗り物として急速に普及し始める。例えば最初に導入されたフェッラーラでは、すでに1543年に60台を数え、ローマでは1594年の時点でもはや883台もの馬車が記録されている<sup>9)</sup>。

17世紀、馬車はさらに改良され普及の度も増す。例えばフィレンツェでの状況は、同時代の *Rinuccini* の記述によると次のようであった<sup>10)</sup>。17世紀初頭の同地では馬車はまだ一般化しておらず、いまだ所有していない貴族も多かった。それまでの貴族の移動手段は、男女ともに、騎馬か口バ、あるいは徒歩であった。しかし馬車は徐々に普及し、やがて各自が馬車を持つまでになり、騎馬は廃れる。馬車自体も改良され、とりわけバネの導入で快適さが増す。また17世紀半ばには一時豪華な装飾のある馬車が流行した（これはローマの馬車の影響と考えられる）。しかし1672年にはパリから *poltroncine* と呼ばれる新型（一般に *berlina* と呼ばれる軽量のタイプで、後の馬車の主流となる）が導入され、快適さ故に普及する。また馬車の普及とともに、有料の公共輸送手段とし

て、まず *lettiga* と呼ばれる輿、次いでやはりパリから導入された *calesse* (*calessino*) と呼ばれる二輪馬車が普及、特に後者は1667年の時点で千台近くに達したという。年代により牽引する馬の頭数も変化し、17世紀初頭には大公妃の馬車は二頭立てで、6名か8名の廷臣の騎馬行列を従えていたが、大公フェルディナンド2世時代には、六頭立てになり、代わりに騎馬行列を廃した<sup>11)</sup>。もちろん馬車の流行に対しては反発もあり、フィレンツェでも1622年に禁止令が提案されたが、結局実施は見送られた<sup>12)</sup>。

17世紀の宮廷社会において、馬車は王侯や宮廷人たちの物理的な移動手段としてのみならず、また象徴や儀礼の手段としても機能していた。

まず馬車は使用者の権力の象徴であった。例えば1641年にローマを訪れたイギリス人ジョン・イーヴリンは、メディチ枢機卿（カルロ・デ・メディチであろう）の馬車が銀製であったと報告している<sup>13)</sup>。また使用者の階級に応じて布地などの装飾素材の品質や色彩、馬の頭数などによって差異化が図られる場合もあり、フィレンツェでも通常の四頭立てに対し「もっとも豊かな者たちは六頭立て」であった<sup>14)</sup>。

馬車はまた祝祭時には豪華な装置として用いられた。これは近代的な馬車の普及以前、既に中世の *carretta* を用いて行われていた慣習であり、王侯の戴冠式や入市式、外交使節の赴任時、その他の祝祭の際に馬車を権威を誇示する装置とするものである。このためには豪華な専用の馬車が制作された（図1）。例えば1629年のパルマ公オドアルド・ファルネーゼとトスカーナ大公コジモ2世の娘マルゲリータ・デ・メディチの婚礼に際しては、5万スクードの大金と2年の制作期間を費やし、実に2万5千オンチャ（約750キロ）の銀を用いた馬車が準備された<sup>15)</sup>。また1637年のトスカーナ大公フェルディナンド2世とウルビーノ公女ヴィットリア・デッラ・ローヴェレの婚礼に際して、新公妃の「凱旋車 *carro di trionfo*」は「内装は赤のピロード、外装は金糸やビーズの刺繍で、円柱や銀の装飾、宝石をちりばめた大公殿下の紋

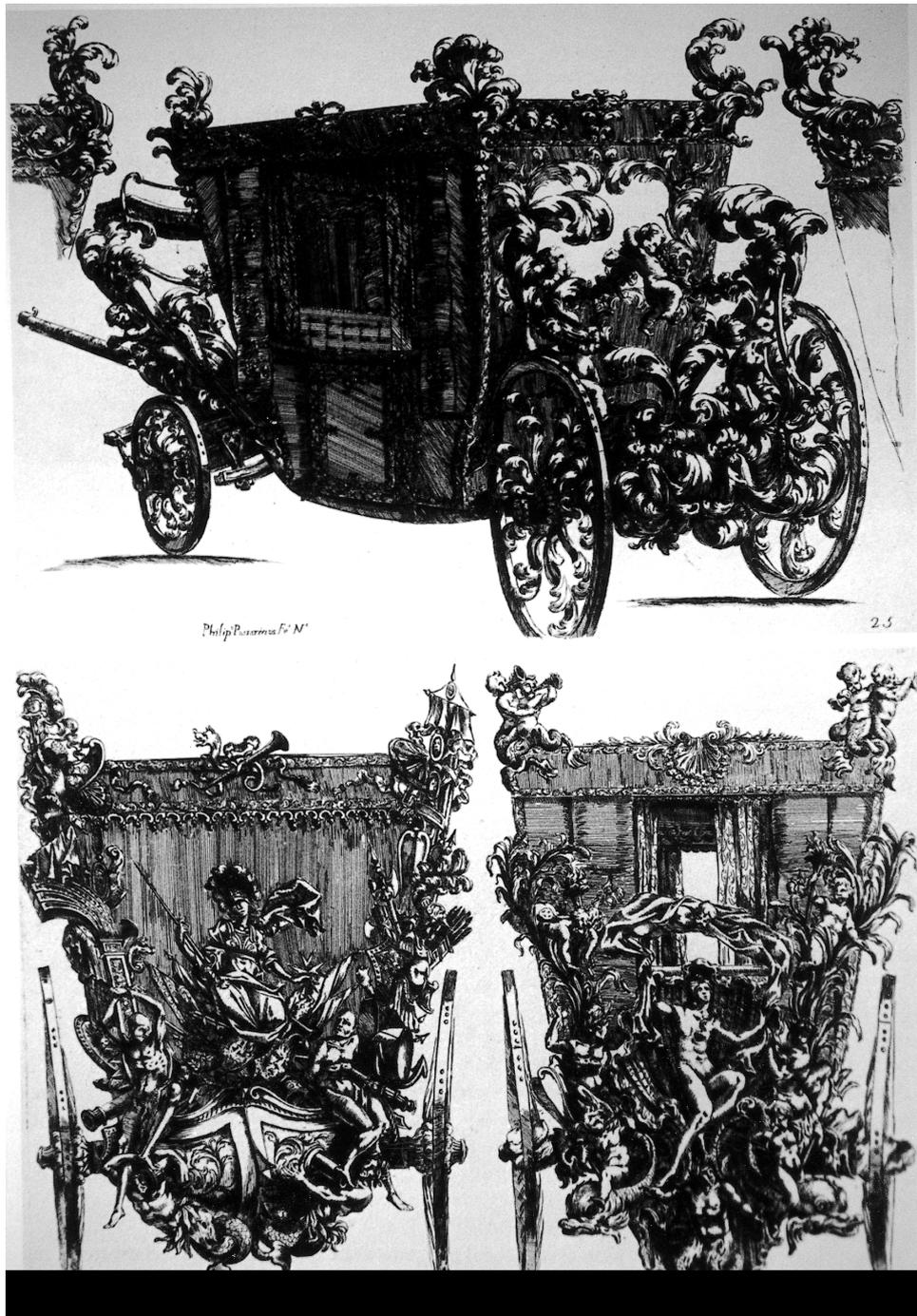


図1 馬車, F. Passarini, Nuove inventioni d'ornamenti...(Roma 1698)より

章で飾られた馬車」であった<sup>16)</sup>。また意匠設計には一流の芸術家が起用され、ベルニーニやチーロ・フェッリが担当した例も知られる<sup>17)</sup>。

馬車の普及につれ、その象徴としての機能を、馬車自体の豪華さだけでなく、台数によって強調する傾向も顕著となる。ローマでは、1647年の新任フランス大使の教皇拝謁に際して、大使一行の5台の馬車に202台の馬車が随行した<sup>18)</sup>。またフ

イレンツェでは、1661年の皇太子の婚礼を祝う行事の一つとして、ラルガ通り（今日のカヴール通り）を貴婦人たちを載せた多くの馬車が行進した<sup>19)</sup>。

馬車はまた、宮廷儀礼においても重要な位置づけをされていた。初期近代の宮廷儀礼、とりわけ外交儀礼では、言葉や仕草だけでなく空間も活用されており、例えば客人をどこまで迎えに出、もしくはどこまで見送るかなどが、客人の身分や主

客の関係に応じて、いわゆるプロトコル（儀典）により厳密に取り決められていた<sup>20</sup>。空間を距離に応じてヒエラルキー化するこの習慣は、それにもっとも適して発達した続き部屋形式の居室、いわゆる appartamento を対象とするだけでなく、階段室、そしてさらには賓客の乗り物である馬車をもその範囲に含んでいた。例えば1644年頃のローマ駐在トスカーナ大使館のプロトコルには、次のような規定が見られる。「トスカーナ大使邸において、枢機卿は皆階段の下で出迎えを受け、また馬車まで見送られる」<sup>21</sup>つまり馬車は宮殿の建築そのもの同様に、儀礼的な空間のヒエラルキーの中に確固として位置づけられていたのである。

以上のように、馬車は17世紀の宮廷に不可欠の道具であった。当然ながらパラッツォと呼ばれる宮殿建築に関しても、馬車に適切な施設の整備が必要となる。当時の馬車はかなり繊細な工芸品であり、しかも大変に高価なため、保存と維持のため rimessa と呼ばれる車庫が必要とされた。例えば当時出版された、ローマの枢機卿に仕える執事のための指南書の中に、次の一節がある。すなわち、御者 cocchiere は主人が降車した後、「馬と馬車を可能な限り損害を被らない場所に避難させねばならない。とりわけ冬は雨に備えて有蓋のところに收容するよう ritirarsi al coperto 配慮すべきであり、また同様に夏は日向から日陰に避難せねばならない。いずれも非常に大きなダメージを与えるからである」<sup>22</sup>

建築物としての馬車庫（図2）は、馬車が通行可能な大きさの扉口と收容可能な広さの内部空間を備える必要がある<sup>23</sup>。しかしパラッツォ本体に設けられる必要はなく、別棟の例も多かった。馬車庫はまた厩舎 stalla の近くに設けられることが多かったが、17世紀の後半になると、時として悪臭を放つ厩舎から馬車庫を完全に分離する場合も見られるようになる。

さらに儀礼時の多数の馬車の使用は、その集合待機や方向転換のための広場を必要とした。例えば17世紀半ばのローマでおこなわれたサンタ・マリア・デッラ・パーチェ聖堂前の広場やコロンナ

広場などの整備拡張は、決して美観のみを目的としていたわけではなく、むしろ馬車のための環境整備が本来の目的であった<sup>24</sup>。また Waddy は、当時のローマでは、馬車に適した広場や路の有無が貴族や枢機卿たちが館を選ぶ際の基準のひとつとなっていたと指摘している<sup>25</sup>。

また大規模なパラッツォの場合、敷地内部での馬車の動線の整備が必要となった。具体的には、街路側と庭園側のアクセス、祝祭時に多数の馬車を駐車可能な大きな広場、馬車の乗り入れに適した規模と形式のヴェスティブルム（玄関間）やポルティコ（柱廊玄関）などである。例えば17世紀の新たなパラッツォの模範となったローマのパラッツォ・バルベリーニの場合、Waddy により、特異な半円形部をもつポルティコが馬車の収納や方向転換の容易さを目的にしたものと指摘されている<sup>26</sup>。

以上の一般的傾向を理解した上で、次章では、フィレンツェのピッティ宮の事例を検討したい。

### 3．ピッティ宮における数々の改修と計画

トスカーナ大公の宮殿ピッティ宮の場合、馬車の普及という新たな状況への初期の対応策は、既に1610年までに採られている（図3）。同年9月、宮殿のティネッロ tinello（廷臣用厨房兼食堂）に面した中庭（通称 Cortile del Diaccio）に排水溝を設ける工事が行われた際、中庭を抜け道とする馬車の重量に耐えるため、排水溝に堅固な覆いが設けられたのである<sup>27</sup>。前述のように、16世紀末の段階では、大公ら王侯のためのポーポリ庭園への動線として、騎馬用のランプ（傾斜路）が中庭の

モーセの泉の脇に用意されていたが、馬車の普及が新たな応急措置を必要とさせたのである。この通路 passo は宮殿正面向かって右側、主要扉口から数えて三番目のアーチを入り口とする。これは本来はアンマナーティによる増築時に厨房用に設けられた扉口である。ここを抜けた馬車はポーポリ庭園側に出、やはり1610年頃にモーセの泉裏に整備された馬車用ランプにより庭園上部



図2 馬車庫，パラッツォ・メディチ・リッカルディ，17世紀末

に行くことができた<sup>28</sup>）。しかし廷臣用厨房や主要階段の裏といった場所を通るこの路は、ファルコネーリが前述の文章で「高貴ならざる」と批判したものに他ならない。

また1661年の皇太子コジモの婚礼祝祭に際して、このティネッコ脇の通路が多数の馬車の通行に適さないことから、新たに宮殿東側を迂回する主要な馬車道が整備された<sup>29</sup>）。現存するこの道は *strada* あるいは *stradone* と呼ばれ、まず宮殿東端からグロッタ・グランデの方へと延び、次いで大

きくカーヴしてポーポリ庭園に登るランプとなっている。この路がおそらくファルコネーリの批判する「長い」路である。

また大公の一族の馬車のための車庫 *rimesse* が存在したはずであるが、記録が無く、おそらく宮殿西側の厩舎の一部が充てられたと推測される。

結局のところ、18世紀にメディチ家が断絶するまで、ピッティ宮の馬車関連施設は以上のものに留まった。しかし計画の段階では、17世紀を通じて数々の構想が提案されている。ピッティ宮は宮

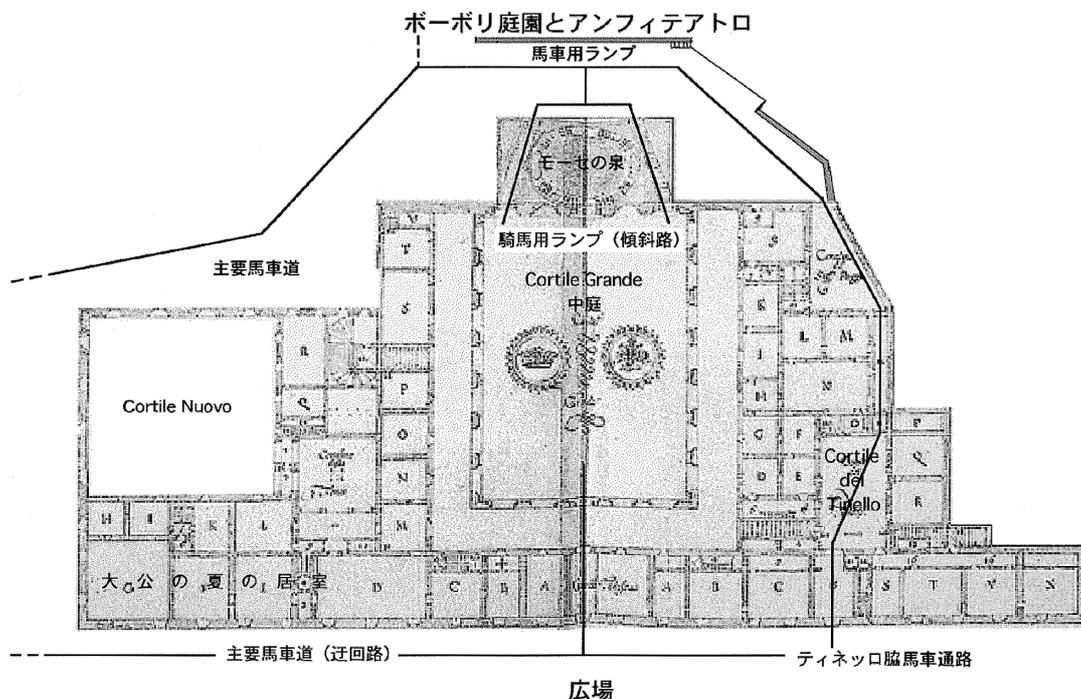


図3 ピッティ宮の馬車・騎馬用動線（1661年）

廷建築家ジュリオ・パリージが1616年に提案した計画に基づき、彼と息子アルフォンソ Alfonso Parigi (1606-56) により、1620年代と30年代、次いで40年代に大規模に拡張された。しかし宮殿両側面に主翼と直角に設けられる側翼や広場の整備は結局実施されず、それらについての見直しがしばしば提案された。その中で新たに注目された問題の一つが馬車だったのである。

まず1641年、アルフォンソ・パリージは、大公フェルディナンド2世に提出した9月12日付の報告書の中で、次のように述べている。

「大公殿下の宮殿の端部〔註：宮殿側翼〕完成のための模型制作を殿下が私にお命じ下さいましたので、構想の草案を少しばかりまとめ、またそれを建築模型にいたしました。これはジョヴァンニ・カルロ公殿下〔註：大公の弟〕から賜りましたご意見とご構想に基づいておりますが、私も大変優れた構想であり、捨て置かざるべきものかと存じます。〔中略〕そしてこれらの端部には、大公殿下にお仕えする廷臣たちの馬車の収容場、あるいはそれらを屋根のある所に格納するための場所を設ける必要があるかと存じます」<sup>30)</sup>

宮廷に伺候する貴族や廷臣たちのための馬車庫の整備が、パリージを介するかたちで、大公の弟の一人から提案されたわけである。宮殿の側翼については既に1616年のジュリオ・パリージの構想の段階で、宮廷の各種工房と資材庫という実際の諸施設のために一部を使用することが計画されていたのだが、普及の度を増す馬車に対応すべく、新たに馬車庫が盛り込まれたのである。

17世紀後半には、より本格的な提案がなされる。例えば宮廷のガルドローバ部局（宮殿内の居室とその調度備品類の維持管理をおもに担当する）の廷臣で建築や工芸デザインをも職務としたディアチント・マリア・マルミ Diacinto Maria Marmi (c. 1625-1702) は、1660年代と70年代に馬車に関する多くの施設を提案している。ここではその中から幾つかについて検討したい。

ひとつは2点の素描により知られる構想で、宮殿西側の側翼に関するものである（図4）<sup>31)</sup>。この構想はおそらく1661年の婚礼に備えたものか、あるいはその教訓を反映して提案されたもので、通常の宮廷活動では異例の広い面積を持つガルドローバ（貴重品庫）の増設を主目的としたもの

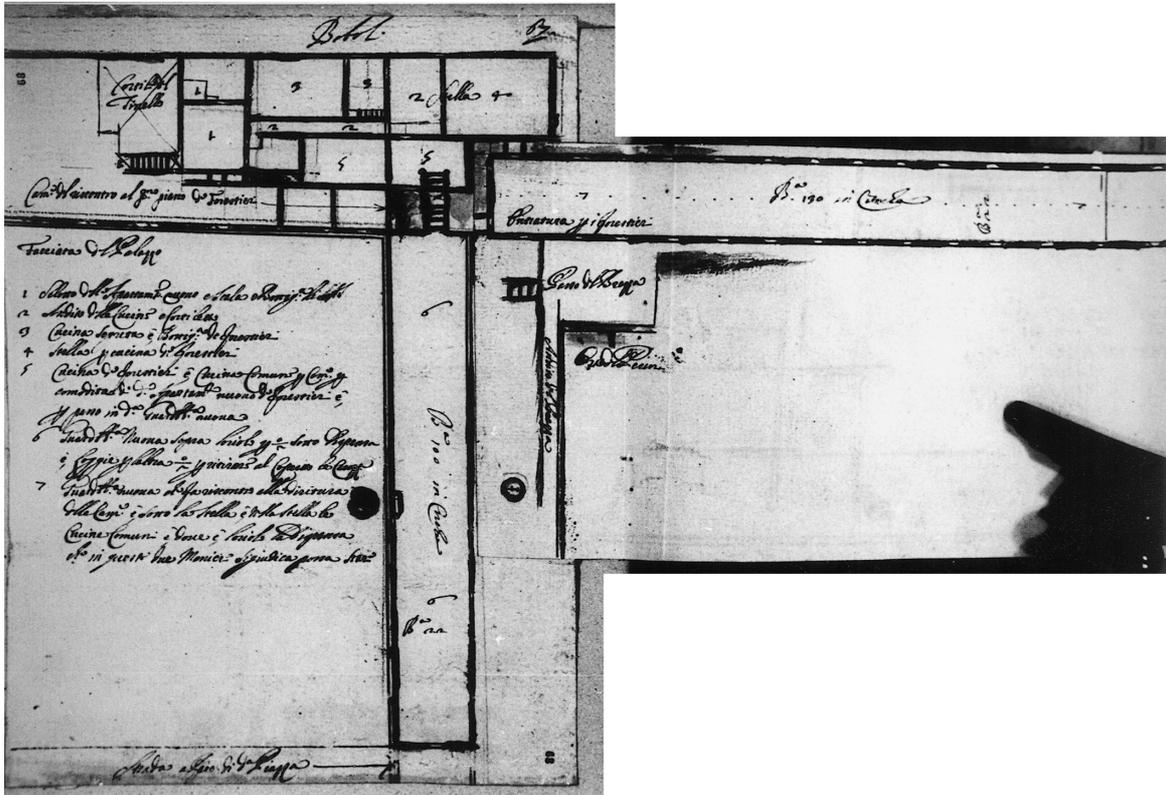


図4 マルミによる側翼計画 (BNCF, Magl. II. I. 381, c. 68r)

である。この構想では、宮殿主翼の延長線上に一棟、さらに主翼と直交するもう一棟を新設し、それらの内部に巨大なグアルダローバを設けている。この計画自体も興味深いだが、ここではこの構想において馬車への配慮がなされていることが重要である。図面に付記された説明文によると、主翼と直交する棟の地階は半分が食品貯蔵室 *dispensa*、そして残り半分がロτζィア（開廊）形式の馬車庫に充てられているのである<sup>32)</sup>。計画された側翼は、図面では長さが100ブラッチャ（約58.3m）とされ、18世紀末に建設された現在の「ロンド」と呼ばれる側翼と同じである。この構想は、大公家の婚礼祝祭など特別の活動を想定したものと考えられるが、側翼に馬車庫を設ける点では、前述のアルフォンソ・パリージの提案を継承している。

マルミはコジモ3世時代の1673年にもピッティ宮の全面的改修を提案している。この計画は画家パンドルフォ・レスキによる完成予想図（図5）を始めとする数点の図像史料により知られるが、

ここにも馬車と関連する部分が複数見出される<sup>33)</sup>。景観図では、宮殿前の広場にテラスが設けられており、その下がロτζィアとなっている。広場を上下二段のテラス状に整備し、段差にロτζィアを設けて工房や倉庫に充てる構想は既にジュリオ・パリージの時代に見られるが、マルミ案では同様の整備が馬車の便宜を兼ねている。ピッティ宮前の広場は、今日見られるように、面積は広いもののかなりの急勾配であり、安定性に欠ける当時の馬車には不適當である。マルミはそれを勘案し、中央の傾斜した広場に放射状に敷かれた3本の舗装された馬車道を設けるとともに、宮殿前にテラスを設けて馬車道とし、さらに宮殿両側面には正方形の大きなテラスを設けて馬車の待機場に充てている。実際画中には30台以上の馬車が描かれているが、それらの車列は左右のテラスから発している<sup>34)</sup>。

さらにレスキの景観図では、左側のテラスの下のロτζィアから2台の馬車が出ようとしている状況が描かれており、この部分が馬車庫に充てられ



図5 レスキ，《ピッティ宮の架空景観図》（マルミの計画に基づく）

たと推測させる。また計画案の平面を示すウフィツィ素描版画室所蔵の図面（GDSU5272A）では、東側の側翼の背後に湾曲した施設が見られるが、これは既存の主要馬車道の位置にあたることから、これをロツジア形式の有蓋馬車道に改修したものと推定される。

またマルミは、宮殿に付属するアンフィテアトロと呼ばれる野外劇場の改修も提案しており、この中でも宮殿とアンフィテアトロ、ひいては庭園とを結ぶ馬車の動線整備を扱っている。例えば図面のひとつ（GDSU5159A r）で注目されるのは中庭からアンフィテアトロに至る馬車道で、高低差を考慮し、つづら折りのランプで構成された登坂路が計画されている<sup>35</sup>）。

マルミの提案に続き、前述のように、コジモ3世の側近ファルコニエーリも1681年に大規模な改修計画を提案した。1点の景観図を除き図面も模型も現存しないものの、バルディヌッチによる詳細な記述が公刊されており、さらにおそらくファルコニエーリ自身の意見を記した草稿も残されている<sup>36</sup>）。

ファルコニエーリは、大公の「首席侍従 Primo Gentiluomo di Camera」という、マルミより高位

の宮廷人であり、各種アカデミーに所属する一流の知識人でもあった。彼はさらにローマとフィレンツェの双方の宮廷社会に暮らし、大公とともにヨーロッパ各国の宮廷を訪問した経験も持っていた。当時の宮廷社会の普遍的理想を共有し得たファルコニエーリもまた、既に冒頭で紹介したように、解決すべき問題のひとつとして馬車関連の施設を重視していた。

ファルコニエーリの提案はマルミ案と年代的に近く、馬車に関する構想も基本的には一致している。ファルコニエーリが問題にしたのは、冒頭に挙げたように、廷臣用馬車庫と馬車の動線の不備である。

馬車庫については、宮殿東側に新設する側翼の基礎部に設ける構想で、アルフォンソ・パリージ以来の諸案を踏襲している<sup>37</sup>）。側翼の正確な規模は不明であるが、通りに達するまでという記述から、おそらく現在の側翼とほぼ同規模と考えられる。ファルコニエーリはおそらくこの大きな棟の地階全てを馬車庫のスペースに充てており、同様の側翼の半分を馬車庫にしたマルミの1660年代の提案と比べて大幅な拡大である。

一方動線については、ファルコニエーリは本格

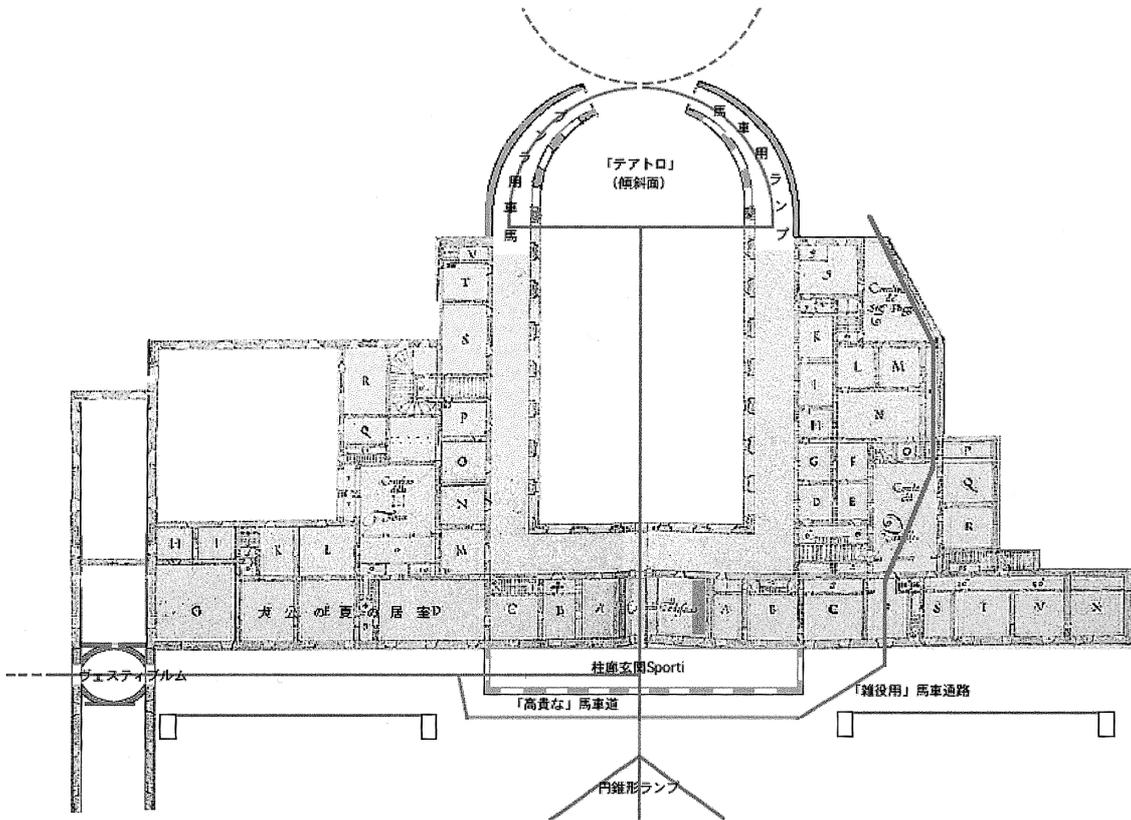


図6 ファルコニエーリ案の馬車動線復元想像図

的な整備を提案した(図6)。バルディヌッチの言葉によるとそれは以下のようなものであった。

「高貴な建築家は、宮殿正面に接する広場の上部を、中央部にのみ大きな円錐を残すようなかたちで平坦に均した。この円錐は、平坦面から斜面へと続き、馬車はこれを通して宮殿の扉口のレベルまで登坂する。そしてそこからは二つの翼あるいはテラスへと続く。馬車はこれらを通して円錐からファサードに沿って左右へ分岐し、[註：左に行くとき]円柱で装飾された楕円形のヴェスティブルム(玄関間)へと行き着く。そこからは壮大な柱廊がボーボリの大庭園まで続いている。一方右側からは、宮殿の雑役 servizio basso の部門のために運ぶ荷物や他のもの全てを容易に運び入れることができる」<sup>38)</sup>

つまりファルコニエーリもマルミ同様、宮殿前広場の傾斜の問題を解決するため、ランプとテラスを組み合わせて馬車の動線を確保し、さらに宮殿東側の主要馬車道の本格的な整備改修を図っている。ファルコニエーリは、この動線の一環とし

て、大公の夏の居室がある宮殿東端と新設する側翼の交点に、馬車を乗り入れることの出来る楕円形のヴェスティブルムを計画した。バルディヌッチの言葉によるとこれは「今日では得られない利便性」をもたらす施設で、「前述のように円柱で装飾されており、大公殿下が一階にお住まいの時に馬車でお入りになることができる。またこの出入り口には、短い距離とはいえ、殿下は居室からいかなる不躰な荒天にも一切お体を晒さずにご到着なさることができる」というものである<sup>39)</sup>。さらにこのヴェスティブルムは、その周囲に放射状に配された扉口や階段を通じて、二階の冬の居室やパラッツォ・ヴェッキオに通じる専用の通廊(いわゆる「ヴァザーリの回廊」)に連絡しており、事実上大公専用の動線網の「ハブ」の役割を担っていた<sup>40)</sup>。そしてこのヴェスティブルムを抜ければ、庭園への主要馬車道が延びている。

宮殿東側の主要動線の他に、ファルコニエーリは、マルミ同様、中庭から庭園に直接通じる馬車道の整備も提案した。冒頭の引用でも示されてい

るように、既存の「高貴ならざる、あるいは長い」動線に替わる新たな馬車路は、拡張された中庭を区切る、左右相称で円弧をなす二つのロτζジアの中に設けられたランプであった<sup>41)</sup>。

ファルコニエーリの動線計画には、合理的な体系性のみならず、「デコールム」あるいは適正論といわれる、当時の宮廷社会で重視された倫理的かつ美的な原理への配慮が顕著である。既存のピッティ宮にもティネッ口脇通路と宮殿東端を迂回する主要道の2本の馬車道があったわけだが、ファルコニエーリはこれらを、とりわけ大公ら王侯の使用には「高貴さ」を欠くと考え、とりわけティネッ口脇の通路を厨房その他宮殿や庭園の維持管理にあたる「雑役」用の動線と位置づけた。前掲の記述にあるように、旧来の主要扉口を挟んで、ファサード向かって左が「高貴な」主要動線、右が「雑役」用動線という具合に、視覚上も整然と階級分離が図られている。そのため庭園への抜け道を中庭に新設し、東側の動線には大公の使用に相応しいヴェスティブルムを計画した。引用文にもあるように、このヴェスティブルムには「円柱」を用いて相応の装飾が予定されていたのである。また先に紹介した馬車庫についても、ファルコニエーリは図書室の下の階に設けており、デコールム上「高貴な」ものとして扱っている。これらの点から、高位の宮廷人であるファルコニエーリが、宮廷生活における馬車の儀礼的役割をパリージヤマルミ以上に深く理解しており、それが最大限の効果を発揮可能な環境を目指していたことが理解される。

#### 4．結び：馬車と宮殿の理想的関係

本論考で採り上げたピッティ宮の計画案の多くは、職業的な建築家ではない「宮廷人」たちによる提案である。従ってこれら計画案は当時のフィレンツェの宮廷社会の一種の鏡像ともいえる。近代の「自律性の神話」に拘泥するのではなく、これらの「ディレッタント」による提案もまた建築史にとり重要な史料であるといえよう。そしてこれらの計画案の検討により明らかなことは、17

世紀を通じて、宮廷人たちは量も意義も増す馬車の使用という習慣に配慮し、宮殿建築においてもそれにいかに対応させるかを常に重視していたという事実である。

またこれらの計画案は、あくまで理論的段階とはいえ、馬車に起因するさまざまな要請に対する体系的な対応策が既に構想されていたことを示す。とりわけファルコニエーリの計画は、次の世紀を先取りするかのような、合理性と「デコールム」の原理に貫かれた整然たる構想といえる。それは馬車のための物理的環境の整備に留まらず、さらに階級分離の原理を導入することで、馬車の儀礼的象徴的側面の補完をも図ったのである。

メディチ家統治の末期、宮廷の建築活動は目立って低調となる。なによりも大公国の財政難、若干は君主の性格に起因するこの状況下、計画案の大半が未実施のまま葬り去られる。馬車に関して、ついに1737年のメディチ家断絶まで本格的な関連施設整備が着手されることはなかった。理想は理想のままに留め置かれ、多少の不都合は応急措置により解決されたのであった。

もっとも馬車の課題は、次のロレーヌ家の宮廷において再び注目されることになる。18世紀の宮廷において、馬車の重要性はさらに高まっていたのである。そして宮廷の大規模な建築活動がようやく再開された1760年代、建築家イニャツィオ・ペッレグリーニは、宮殿東側の側翼の計画案において、劇場や礼拝堂とともに、厩舎と馬車庫の設置を提案する<sup>42)</sup>。世代を隔てつつも、前世紀にマルミヤファルコニエーリが提案した馬車と宮殿の関係の理想的モデルは、18世紀後半の宮廷においてもいまだアクチュアリティと有効性を失っていなかったのである。

#### 略語一覧

ASF	Archivio di Stato di Firenze
BMF	Biblioteca Moreniana Firenze
BNCF	Biblioteca Nazionale Centrale Firenze
GDSU	Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi
Magl.	Magliabechiano
M. Med.	Miscellanea Medicea
Med. Princ.	Mediceo del Principato

Palat.	Palatino
SFF. M	Fabbriche medichee
SFF. G	Fabbriche Granducali
c.	carta
f.	filza
cc. nn.	carte non numerate

## 注

- 1 ) "Il Palazzo de Pitti ha dimolti errori, e molti incomodi esterni, et interni [...] P[er] L'incomodi esteriori, non esservi coperto p[er] le carrozze, al Palazzo d[i] un Principe sovrano, dove ne debbono concorrere in gran numero. P[er] L'interni, se il Principe è con la Carrozza nel Cortile, e che voglia con la medesima andare alle sue stanze di sopra p[er] il giardino bisogna, che ne esca fuori, e vi vada p[er] via ignobile, o lunga." BMF, Mss. Moreniani 200II, vol. I, c. 130v. 註36) 参照。
- 2 ) "Non è da incolpazione l'Ammannato, perché in quel tempo non usavano gran cosa le Carrozze, e per i cavalli vi è la salita dietro alla fonte del Mose, la quale dimostra, che penso a quello, che bisognava allora." BMF, Mss. Moreniani 200II, vol. I, c.130v.
- 3 ) Baldinucci, Filippo. Notizie dei professori del disegno... . Firenze, 1681-1728. F. Ranalli, ed., Firenze, 1845-1847 ( ed. anast. Firenze, 1974-75 ) , II, p. 413.
- 4 ) Waddy, Patricia. Seventeenth-Century Roman Palaces. Use and the Art of Plan. Cambridge ( Mass. ) & London, 1990, p. 61-66. また16世紀の馬車庫については以下。Frommel, C. L. Der römische Palastbau der Hochrenaissance. Tübingen, 1973, I, p. 88.
- 5 ) 庭園のアンフィテアトロへの馬車動線については以下に論及がある。Marchi, Piero. "Il giardino di Boboli e il suo anfiteatro". La Città effimera e l'universo artificiale del giardino. M. Fagiolo, ed., Roma, 1980, p. 162-182.
- 6 ) 馬車の歴史に関する概説書は以下。Tarr, Laszlo. The History of the Carriage. New York, 1969. ( ラスロー・タール. 馬車の歴史. 野中邦子訳. 平凡社, 1991. ) Belloni, Luigi. La Carrozza nella storia della locomozione. Torino, 1901. ed. anast. Padova 1983. Pronti, S., ed. Le carrozze. La raccolta di Palazzo Farnese a Piacenza. Milano, 1998. イタリアにおける馬車の普及については以下。Gozzadini, Giovanni. Dell'origine e dell'uso dei cocchi e di due veronesi in particolare. Bologna, 1864. 工芸作品としての17世紀の馬車については以下。Fusconi, Giulia. Disegni decorativi del barocco romano. Roma, 1986.
- 7 ) Gozzadini, 1864, p. 20-22.
- 8 ) Lapini, Agostino. Diario Fiorentino ... . Firenze, 1900, p. 98-99.
- 9 ) Gozzadini, 1864, p. 23. Lotz, Wolfgang. "Gli 883 cocchi della Roma del 1594". Studi offerta a G. Incisa della Rocchetta ( Miscellanea della Società Romana di Storia Patria, XXII ) . Roma, 1976, p. 247-266.
- 10 ) Rinuccini, Tommaso. Le usanze fiorentine del secolo XVII descritte dal Cav. Tommaso Rinuccini ... Firenze, 1863, p. 11-12.
- 11 ) Rinuccini, 1863, p. 30.
- 12 ) Lastri, Marco. L'osservatore fiorentino sugli edifizii della sua patria. 3. ed, Firenze, 1821 ( 1. ed., Firenze, 1797 ) , V, p. 100-101.
- 13 ) Evelyn, John. The Diary of John Evelyn ... . London, 1879, p. 101.
- 14 ) Rinuccini, 1863, p. 11.
- 15 ) Gozzadini, 1864, p. 43-49.
- 16 ) Descrizione delle feste fatte in Firenze... . Firenze, 1637, p. 13.
- 17 ) Fusconi, 1986, p. 18-21.
- 18 ) Gigli, Giacinto. Diario di Roma. M. Barberito, ed., Roma, 1994, II, p. 504-505.
- 19 ) Segni, Alessandro. Memorie delle feste fatte in Firenze per le Reali Nozze ... . Firenze, 1662, p. 104.
- 20 ) Roosen, William. "Early Modern Diplomatic Ceremonial: A Systems Approach". Journal of Modern History. Vol. 52, No. 3, 1980, p. 452-475. Waddy, 1990, p. 3-13.
- 21 ) ASF, Med. Princ., f. 2658, cc. nn. Waddy, 1990, Appendix I, p. 325.
- 22 ) Liberati, Francesco. Il perfetto maestro di casa ... . Roma, 1672 ( 1. ed., Roma, 1658 ) , p. 133.
- 23 ) 馬車庫の建築的特徴については以下。Waddy, 1990, p. 62-65.
- 24 ) De Amicis, A. R. "Palazzo Gambirasi e Piazza della Pace: Storia edilizia di un connubio difficile". Palladio. anno XIII, n. 25, 2000, p. 19. Krautheimer, Richard. "Alexander VII and Piazza Colonna", Römisches Jahrbuch für Kunstgeschichte. 20, 1983, p. 193-208.
- 25 ) Waddy, 1990, p. 62.
- 26 ) Waddy, 1990, p. 208.
- 27 ) ASF, SFF. M, f. 155, c. 17. Marchi, 1980, p. 174, 181 ( n. 40 ) .
- 28 ) Marchi, Piero. "Il sistema teatrale nello spazio di Boboli all'inizio del Seicento". Boboli 90. Firenze, 1991, I, p. 354.
- 29 ) ASF. SFF. M., f. 115, c. 95. Marchi, 1980, p. 174, 181 ( n 41 ) . ASF, SFF. G., f. 1933, n. 736. Zangheri, Luigi. "Il Maxiautoma dell'Atlante e Ferdinando Tacca", Psicon. III, 1976, n. 6, p. 121, n. 4.

- 30) "Avendomi V. A. S. comandato di fare il Modello per finire le testate della Piazza del real Palazzo di V. A. S. [h]o fatto un poco d'abbozzo di pensiero e messolo in Modello sopra un parere e concetto datomi dal Ser.<sup>mo</sup> Pri.<sup>e</sup> Gio. Carlo il quale a me par tanto buono che non si possi tralasciare [...], et e che a quelle testate sia necessario il far un ridotto o luogo da ritirarsi al Coperto le carrozze de Cortigiani servitori di V. A. S. [...], "ASF, M. Med. , f. 39, inserto 3, c. 5
- 31) BNCF, Magl. II. I. 381, c. 68r. GDSU5068A.
- 32) "6 Guardrb.<sup>a</sup> Nuova sopra l'orologio per 1/2 sotto Dispensa e, loggie per l'altra 1/2 per ritirare al coperto le carrozze." BNCF, Magl. II. I. 381, c. 68r.
- 33) Pandolfo Reschi , ピッティ宮拡張計画案 , 1675-80年頃 , 画布・油彩 , 146 × 278cm , 個人蔵 . Gaburri, F. M. N. Vite di pittori, BNCF, Palat. E. B. 9. 5, IV, c. 2055. Baldinuci, F. S. " Vite di artisti ... ". Zibaldone baldinucciano. B. Santi, ed., Firenze, 1981, II, p. 266-267 ( 1. ed. 1725-30 ) . Firenze e la sua immagine, M. Chiarini et. al., ed., Firenze, 1994, cat. 59. GDSU5272A. GDSU5298A v.
- 34) フランチェスコ・サヴェリオ・バルディヌッチによれば , レスキの景観図はサン・ジョヴァン
- ニの祭日の祝典に出発する宮廷の一行を想定しているという。F. S. Baldinucci, 1981, II, p. 267.
- 35) マルミのアンフィテアトロ計画案については以下の拙論を参照。金山弘昌 . “ ポーポリ庭園の「アンフィテアトロ」 ” . 紀要 ( 日本橋学館大学 ) . 第 1 号 , 2002 , p. 47-63.
- 36) Gaspar Van Wittel , 《ピッティ宮の架空景観図》 , 画布・油彩 , 67 × 124cm , 個人蔵 . Baldinucci, 1845-1847, II, p. 405-425. BMF, Mss. Moreni 200II, vol. I, "La Memoria per l'intelligenza del Modello del Palazzo de Pitti 1681", c. 129-149. またファルコニエーリ案については以下の拙論を参照。金山弘昌 . “ パオロ・ファルコニエーリと1681年のピッティ宮改修計画案 ” . 美術史. 147 ( Vol. 49, No. 1 ) , 1999, p. 96-108.
- 37) Baldinucci, 1845-1847, II, p. 411, 418.
- 38) Baldinucci, 1845-1847, II, p. 411.
- 39) Baldinucci, 1845-1847, II, p. 417.
- 40) Baldinucci, 1845-1847, II, p. 417-418.
- 41) Baldinucci, 1845-1847, II, p. 414.
- 42) Chiarelli, Renzo. "Anticipazione su Ignazio Pellegrini architetto". Rivista d'arte. XXXI, 1956, p. 157-186.

## Le carrozze ed una reggia:

l'influenza dell'uso del cocchio nei progetti secenteschi per Palazzo Pitti

Hiromasa KANAYAMA<sup>\*1</sup>

————— Synopsis —————

Nella seconda metà del Cinquecento nelle corti europee si diffuse una nuova moda: l'uso delle carrozze. Fino alla fine del secolo la carrozza diventò il principale mezzo di locomozione dei nobili e inoltre ebbe un importante ruolo nel rituale della corte. La rapida diffusione delle carrozze influì anche sull'architettura e sull'urbanistica. A quel tempo, era necessario aggiungere le rimesse e la linea di flusso per le carrozze nei palazzi per i quali prima era stato previsto solo l'uso dei cavalli.

A questo proposito si desidera analizzare l'influenza dell'uso delle carrozze nella progettazione dei palazzi secenteschi italiani, esaminando il caso fiorentino di Palazzo Pitti.

Questa reggia dei granduchi di Toscana fu originariamente costruita come palazzo rinascimentale e poi trasformata nella seconda metà del Cinquecento, ma prima della decisiva diffusione delle carrozze. Per questo, nel secolo seguente, la necessità di aggiungere le varie attrezzature per le carrozze era molto evidente ed urgente.

Fino al 1610 erano già fatti il "passo" per le carrozze che va al giardino di Boboli. Inoltre, nei vari progetti non realizzati per la trasformazione del palazzo, si osservano le proposte delle attrezzature per le carrozze. Già nel 1641 Alfonso Parigi, architetto del granduca, propose le rimesse ricavate nelle loggie della nuova ala aggiunta al palazzo, basato sull'opinione del principe Giovanni Carlo, un fratello del granduca. Anche Diacinto Maria Marmi, "Guardaroba" ed ingegnere del granduca, negli anni '60 e '70, propose vari progetti che includono le grandi rimesse delle carrozze, la sistemazione della piazza palatina adattandola ad ospitare un gran numero di carrozze, e la nuova linea di flusso che conduce le carrozze dal cortile al giardino di Boboli.

Inoltre Paolo Falconieri, "Primo Gentiluomo di Camera" del granduca, quando propose il suo progetto dell'intera trasformazione della reggia nel 1681, considerò che la insufficienza delle attrezzature per le carrozze fosse uno dei più gravi difetti del palazzo granducale. Falconieri si occupò particolarmente della risistemazione delle linee di flusso delle carrozze; infatti egli osservando il principio del decorum, divise chiaramente la linea per le carrozze del granduca e dei principi da quella per il "servizio basso".

Risulta quindi evidente che gli architetti ed i cortegiani della corte secentesca del granduca rivolsero sempre una certa attenzione al problema delle carrozze, benché la maggior parte delle loro proposte fossero destinate a rimanere a livello di progetto.

————— Key words —————

Carriage—Coach—16th-18th centuries. Palazzo Pitti(Florence, Italy).

Architecture—Italy—Florence—16th-18th centuries. Tuscany(Italy)—Court and courtiers.

Paolo Falconieri, Architect, 1634-1704—architectural design.

\*1 Faculty of Human Cultural Sciences and Business Administrations, Nihonbashi Gakkan University

# 高所順応トレーニングおよび高峰登山の 大腿部軟部組織に及ぼす影響

高橋 早苗<sup>\*1</sup> 浅野 勝己<sup>\*2</sup>  
高橋 英幸<sup>\*3</sup> 岡崎 和伸<sup>\*4</sup>

低圧低酸素下での持久性トレーニングおよび高峰登山の大腿部軟部組織に及ぼす影響を明らかにするために、平均年齢31歳の男性登山家6名について調査した。高所順応トレーニングは、モナーク社製自転車エルゴメータを使用し、運動時間は30分間、回転数は60rpmとし、運動強度はVTレベルより開始しRPEが13～15になるように行った。また、トレーニングは60m<sup>3</sup>の低圧シュミレータを使用し、4,000m～7,000m相当高度で週1回のペースで11週に渡り、高峰登山に出発する直前まで実施した。

大腿部横断面積を測定するために核磁気共鳴映像法 (Magnetic Resonance Imaging: MRI) を用い、大転子 - 外側顆間結節間50%部位を撮像した。脂肪断面積は高峰登山後に減少が認められたが、筋断面積においては有意な変化が認められなかった。それは、高所順応トレーニングおよび高峰登山の双方が低酸素下での運動により組織中の脂肪分解を促進させたことが示唆された。

..... キーワード .....

高所順応トレーニング 高峰登山 低圧低酸素 核磁気共鳴映像法

## 1. はじめに

今日まで高峰登山時にみられる体重減少について、多くの研究<sup>2,4,6,8,9</sup>) がなされてきた。この体重減少は、体水分量の減少、体脂肪量の減少、あるいは除脂肪組織量の減少などが考えられる。先行研究の中で、筋萎縮<sup>3,5,7,9,10</sup>) をあげる報告は数多い。しかしながら筋萎縮の原因が、低圧低酸素による直接要因である<sup>11</sup>) のか、摂食量低減や消化不良を介した間接的要因によるのか<sup>2,4</sup>)

未だ解明されていない。本研究は形態計測、MRIを用いて、高所順応トレーニングの前後および高峰登山後における周囲形態、大腿部軟部組織の変化を比較検討することとした。

## 2. 方 法

### 2.1 被検者

被検者は、栃木県山岳連盟ムスターグ・アタ登山隊1998に所属する男性登山家6名(年齢; 31歳, 身長; 172.9cm, 体重; 65.1kg)であった。被検者のうち2名は、7,000m級の高峰登山経験者であり、1名は5,000m級の登山経験者、残る3名は国内3,000級の登山経験を有していた。(表1)

### 2.2 高所順応トレーニング

高所順応トレーニングは筑波大学環境制御装置を使用し、室温20℃, 相対湿度60%の環境下において自転車エルゴメータでのペダリング運動を行

2002年9月30日受理

Effect of Simulated Altitude Training and Climbing on Soft parts Tissue of Thigh

\*1 Sanae TAKAHASHI  
日本橋学館大学人文経営学部(非常勤)

\*2 Katsumi ASANO  
筑波大学体育科学系

\*3 Hideyuki TAKAHASHI  
国立スポーツ科学センター

\*4 Kazunobu OKAZAKI  
信州大学大学院博士課程

表1 男性被検者の身体特性, 海外登山歴および登山を除く運動習慣

被検者 (n=6)	年齢 (Yrs.)	身長 (cm)	体重 (kg)	海外登山歴 トータル数(回)	運動習慣 種目および回数(回/週)
Y.I	46	180.0	73.1	4	ジョギング(2)
M.K	31	180.0	62.0	1	ジョギング(3)
S.K	31	168.0	61.5	0	特になし(0)
F.S	27	162.5	59.3	0	カヌー(0)
T.Y	26	177.0	64.8	0	水泳(1)
H.S	25	170.0	69.8	1	クライミング(1)
Mean	31	172.9	65.1	1	1.2
± S.D.	7.8	7.2	5.3	1.5	1.2

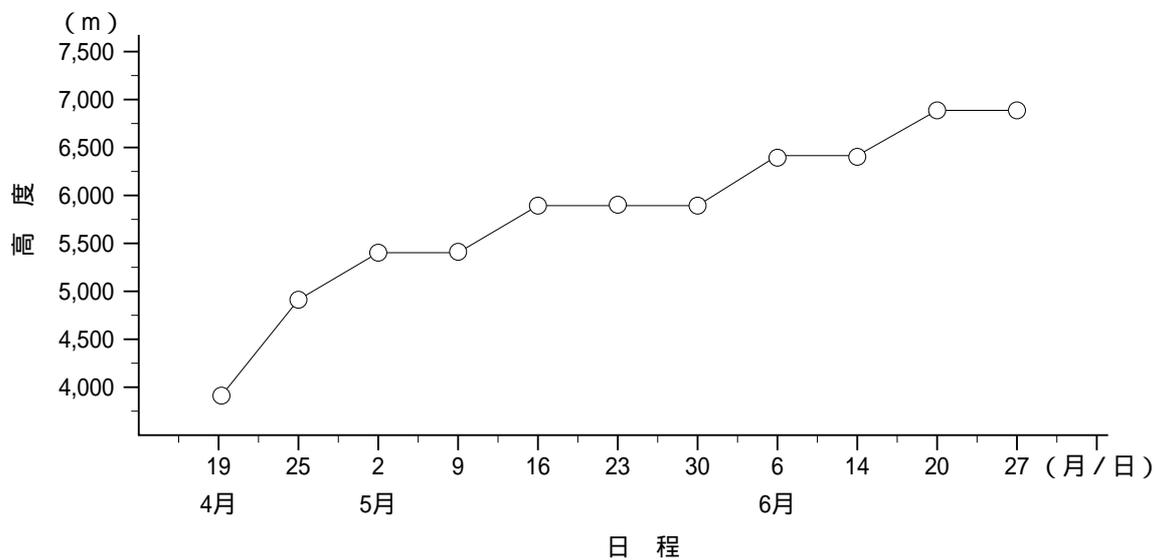


図1 高所順応トレーニングの日程と実施高度

うものとした。運動時間は30分間、回転数は60rpmとした。運動強度は、トレーニングに先だって行った漸増負荷最大運動テストのVTレベルより開始し、HR、SpO<sub>2</sub>を考慮しRPEが13~15になるように適宜負荷調節を行った。トレーニング実施期間は、1998年4月から7月までの約3ヶ月であり、週1回の頻度で計11回実施した。トレーニング高度は、被検者の順応状態を考慮し、4,000m(462 Torr)~7,000m(308 Torr)相当高度に設定した。(図1)

### 2.3 高峰登山

今回被検者がアタックしたムスターグ・アタ峰は、中国西部、新疆ウイグル自治区に位置し、北峰7,184m、南峰7,546mの双峰山である。遠征期間は、1998年7月28~8月31日までであり、被検者

6名全員が登頂を果たした。

### 2.4 実施期間

実施期日は、高所順応トレーニング前(4月12日: pre T)、高所順応トレーニング後(7月5日: post T)、高峰登山後(9月5日: post C)の3回行った。なお、形態計測については、登山直後(8月31日: post M)成田空港においても測定を行った。

### 2.5 実験項目および方法

#### 2.5.1 形態計測

形態計測は常圧下にて行い、計測項目は体重、体脂肪率、胸囲、胴囲および左右の大腿囲、下腿囲、上腕囲、前腕囲とした。

## 2.5.2 漸増負荷最大運動テスト

漸増負荷最大運動テストは、環境制御装置を使用し、4,000m相当高度において自転車エルゴメータでのペダリング運動を行うものとした。室温20℃、相対湿度60%、回転数は60rpmとした。安静2分、空漕ぎ3分の後、15Wより開始し1分毎に15Wずつ漸増させるものとした。運動中は、1分毎にHR、SpO<sub>2</sub>、RPEを測定した。また、呼吸代謝測定装置により連続的にガス交換諸量を測定し、V - Sloop法<sup>1)</sup>をもってVTを算出した。

## 2.5.3 大腿部軟部組織の変化

MRIを用い、右大腿部大転子 - 外側顆間結節間の大転子より遠位50%部位における横断画像を撮像した。この横断画像を転写板上にてトレースし、スキャナを用いてコンピュータに取り込み、全横断面積、各筋断面積、骨断面積を測定した。各筋断面積の合計値を筋断面積とし、全横断面積から筋断面積および骨断面積を引いた値を脂肪断面積とした。

## 2.6 統計処理

各測定項目における統計処理は、平均値±標準偏差で示した。また、一元配置分散分析を行い、有意水準5%未満であるときFisher'sPLSDを用いてpre T、post T、post M、post C間の比較を行った。

# 3. 結果

## 3.1 形態計測

### 3.1.1 体重

pre T、post T、post M およびpost Cの体重は、それぞれ65.1±5.3kg、64.3±4.4kg、63.8kg±3.8kg、64.5±3.8kgであった。post Mに減少傾向がみられたが、いずれの群も有意差を示さなかった。(表2)

### 3.1.2 皮下脂肪厚法による体脂肪率

pre Tにおいて12.7±1.3%であった。post Tはやや減少傾向がみられ、11.5±1.6%であり、post Mは、10.4±0.6%であり、pre Tに比べ有意な減少(P<0.01)がみられた。post Cでは12.3±1.5%であり、pre Tとほぼ同等の値まで回復がみられ、post Mと比較し、有意な増加(P<0.05)がみら

れた。(表2)

## 3.1.3 生体インピーダンス法による体脂肪率

生体インピーダンス法による体脂肪率は、皮下脂肪厚法より平均値で約3~5%高く、pre Tにおいて18.0±3.5%であり、post T時は15.8±3.3%であった。また、post M時は14.3±3.7%であり、post Cでは15.2±3.0%であった。pre Tからpost T、post Mと徐々に減少傾向がみられ、特にpre Tとpost Mの比較では、平均値で3.7%の減少傾向が認められた。しかしながら、いずれの比較においても有意差は認められなかった。(表2)

## 3.1.4 周囲形態の計測

周囲形態の変化については、胸囲、胴囲、左右の大腿囲、下腿囲、上腕囲、前腕囲ともに有意な変化は認められなかったが、post Mでは、pre T、post T、post Cと比較し、いずれの項目においても減少傾向がみられた。(表3)

## 3.2 大腿部軟部組織の変化

### 3.2.1 全横断面積

大腿部の大転子より50%部位におけるpre T値は176.2±13.5cm<sup>2</sup>であり、post Tでは175.0±11.2cm<sup>2</sup>とほぼ同等の値を示した。また、post Cでは169.6±6.1cm<sup>2</sup>とやや低値であったが、有意差はみられなかった。(図2、表4)

### 3.2.2 筋断面積

pre Tとpost T、post Cの平均値に変化はみられず、それぞれ123.4±11.7、125.4±7.8、126.7±7.5cm<sup>2</sup>であった。(図2、表4)

### 3.2.3 脂肪断面積

脂肪断面積の平均値はpre T、post T、post Cの順に高く、値はそれぞれ46.8±6.4、43.8±7.6、37.0±7.3cm<sup>2</sup>であった。特にpost Cで顕著に低値を示し、pre Tとの比較において有意差(P<0.05)が得られた。(図2、表4)

### 3.2.4 骨断面積

pre T、post T、post Cの平均値はほぼ同等であり、それぞれ6.0±0.7、5.9±0.7、5.9±0.7cm<sup>2</sup>であった。(図2、表4)

表2 pre T, post T, post M, post C における体重および体脂肪率の変化

被検者	体重 (kg)				体脂肪率 (%) インピーダンス法				体脂肪率 (%) 皮下脂肪厚法			
	pre T	post T	post M	post C	pre T	post T	post M	post C	pre T	post T	post M	post C
Y.I	73.1	70.2	69.0	69.6	22.0	19.2	15.2	18.0	13.9	11.6	10.2	12.3
M.K	62.0	62.6	65.7	65.3	17.4	16.4	17.8	16.3	12.1	10.4	10.7	12.5
S.K	61.5	59.1	60.4	61.6	14.6	12.4	8.1	12.1	11.4	11.1	10.4	11.6
F.S	59.3	60.4	58.9	59.4	19.0	19.1	14.5	17.2	14.4	14.6	11.6	15.1
T.Y	64.8	64.9	62.1	63.5	13.6	11.4	12.4	10.8	11.4	10.9	10.0	11.8
H.S	69.8	68.4	66.7	67.6	21.4	16.4	17.8	16.6	13.2	10.4	9.7	10.7
Mean	65.1	64.3	63.8	64.5	18.0	15.8	14.3	15.2	12.7	11.5	10.4	12.3
± S.D.	5.3	4.4	3.9	3.8	3.5	3.3	3.7	3.0	1.3	1.6	0.6	1.5

## : P &lt; 0.01, pre T vs post M

\* : P &lt; 0.05, post M vs post C

表3 pre T, post T, post M, post C における周囲形態の変化

	pre T	post T	post M	post C
胸 囲 (cm)	90.4 ± 4.1	90.2 ± 3.2	88.7 ± 3.0	90.7 ± 3.6
胴 囲 (cm)	76.1 ± 3.0	74.8 ± 1.7	74.6 ± 1.8	75.1 ± 1.5
右大腿囲 (cm)	52.6 ± 2.2	52.8 ± 2.2	52.0 ± 1.1	52.9 ± 1.2
左大腿囲 (cm)	52.2 ± 1.9	52.3 ± 1.7	51.5 ± 0.6	52.5 ± 1.0
右下腿囲 (cm)	37.0 ± 1.5	36.6 ± 1.3	36.2 ± 1.3	36.3 ± 1.0
左下腿囲 (cm)	36.6 ± 1.4	36.4 ± 1.1	36.2 ± 1.1	36.2 ± 1.0
右上腕囲 (cm)	28.3 ± 3.0	28.0 ± 2.8	26.8 ± 2.1	27.6 ± 2.6
左上腕囲 (cm)	27.4 ± 2.4	27.3 ± 2.2	26.4 ± 1.7	27.5 ± 2.2
右前腕囲 (cm)	26.6 ± 1.0	26.3 ± 1.1	25.9 ± 0.8	26.3 ± 0.8
左前腕囲 (cm)	26.2 ± 1.0	25.9 ± 1.1	25.5 ± 1.0	25.7 ± 0.9

表4 大腿部50%部位における骨格筋の組織的变化

被検者 Unit	全横断面積 (cm <sup>2</sup> )			筋断面積 (cm <sup>2</sup> )			脂肪断面積 (cm <sup>2</sup> )			骨断面積 (cm <sup>2</sup> )		
	pre T	post T	post C	pre T	post T	post C	pre T	post T	post C	pre T	post T	post C
Y.I	188.9	181.6	173.6	130.9	128.9	130.4	51.2	46.0	36.5	6.75	6.65	6.67
M.K	155.9	157.3	163.8	108.4	117.2	122.9	41.4	34.0	34.8	6.07	6.12	6.10
S.K	172.0	167.8	170.2	123.3	122.5	128.1	43.7	40.6	37.1	5.03	4.73	5.07
F.S	173.8	182.2	173.8	111.8	119.8	117.7	56.9	57.1	51.0	5.14	5.26	5.06
T.Y	172.8	173.3	160.5	126.1	124.9	122.3	40.3	42.3	31.8	6.42	6.08	6.33
H.S	193.5	187.8	175.7	139.7	138.9	138.9	47.5	42.6	30.6	6.36	6.30	6.18
Mean	176.2	175.0	169.6	123.4	125.4	126.7	46.8	43.8	37.0	6.0	5.9	5.9
± S.D.	13.5	11.2	6.1	11.7	7.8	7.5	6.4	7.6	7.3	0.7	0.7	0.7

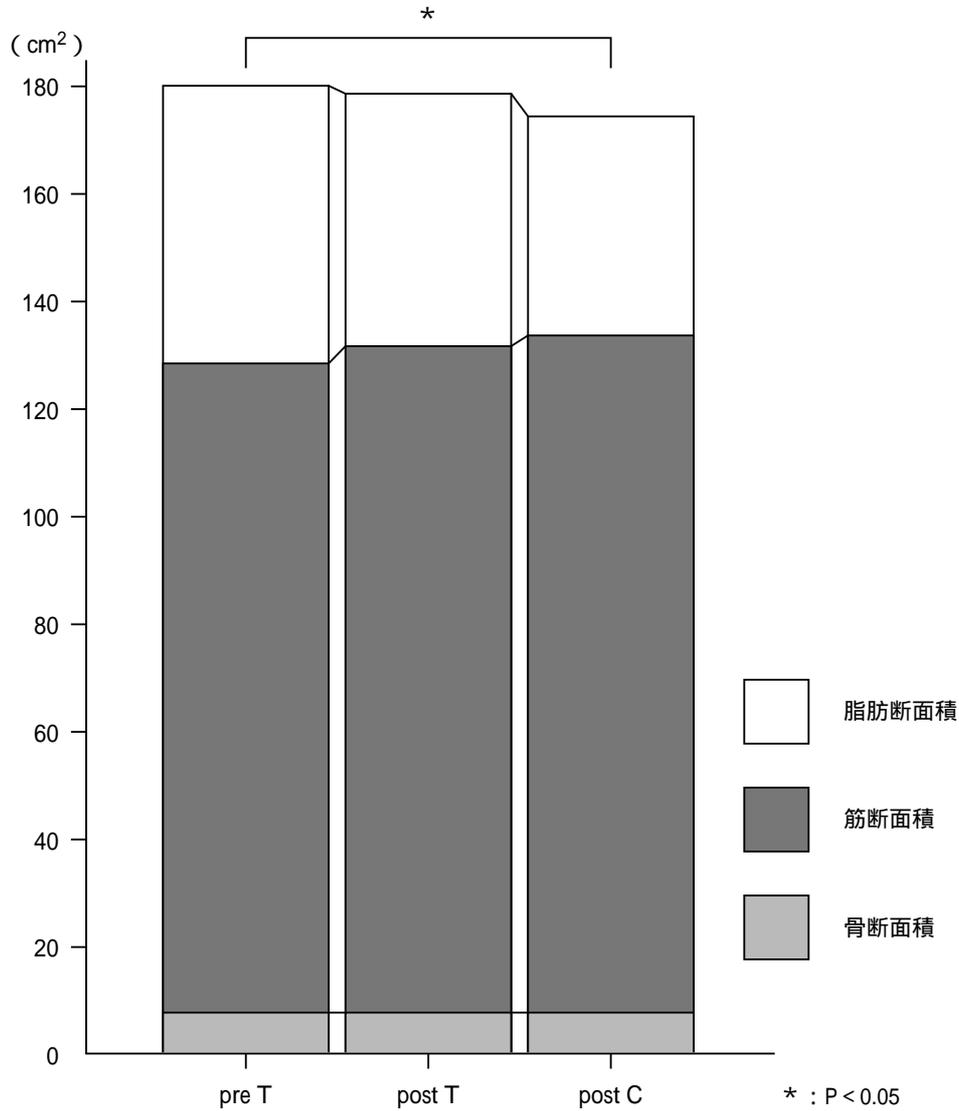


図2 pre T, post T, post Cにおける右大腿部50%部位の組成変化

#### 4. 考 察

本研究におけるpre T, post T, post M, post Cの体重平均値(表2)は、帰国直後成田空港において測定したpost Mにやや減少傾向がみられるものの有意差はなかった。この結果は周囲形態の変化(表3)と対応している。大腿部50%部位におけるMRIの結果(図2, 表4)は、体重の変化と対応し、大腿部軟部組織の変化を明確にした。すなわち、高所順応トレーニング前後で有意な変化はみられないが、脂肪断面積において減少傾向がみられた。また、登山前後の全横断面積は、post Cにやや減少傾向がみられた。筋断面積は、

ほぼ同等であった。脂肪断面積は、pre Tとpost Cの比較において有意に減少した。一方骨断面積は、明らかな変化を示さなかった。インピーダンス法による体脂肪率(表2)は、体重の変化と対応し高所順応トレーニングの前後、登山後と順を追って減少傾向を示した。インピーダンス法による変化は、体重の減少分が体脂肪量の減少を示すことを補足する結果であった。以上の結果より週1回の高所順応トレーニングは、大腿部軟部組織に影響を及ぼさなかった。また体重、周囲形態、大腿部筋断面積に有意な変化がみられなかったことから、本研究においてあきらかな筋萎縮は認められなかった。さらに、脂肪断面積は、高所順応

トレーニング前に比し登山後に有意な減少を示したことは、高所順応トレーニングの影響と、高所においてエネルギー消費量の増加を補償するために脂質代謝が亢進したことの相乗作用と考えられる。また先行研究での体重減少は、筋萎縮によるとする報告<sup>3,5,9)</sup>が多くみられるが、本研究において体重が減少した者は、体脂肪量の減少によることが示唆された。

## 5 . 結 論

### 5 .1 筋断面積

本研究においては、有意な筋萎縮は認められなかった。

### 5 .2 脂肪断面積

高所順応トレーニングによる脂肪断面積の減少傾向がみられ、高峰登山後には高所順応トレーニング前に比較し脂肪断面積の有意な減少が認められたことから、体重減少の原因は体脂肪量の減少によることが示唆された。

### 参考文献

- 1 ) Beaver, W.L., Wasserman, K., and Whipp, B.J. "A new method for detecting anaerobic Threshold by gas exchange." J. Appl. Physiol., 60, ( 1986 ) p. 2020-2027
- 2 ) Bigard A.X., Brunet A., Guezennec C.Y. and Monod H.

- "Skeletal muscle change after endurance training at high altitude." J. Appl. Physiol., 71, ( 1991 ) p. 2114-2121
- 3 ) Blume, F. D. "Metabolic and endocrine changes at altitude. In: High Altitude and Man, edited by J.B. West and S. Lahiri. Bethesda, M.D." Am. Physiol., Soc., ( 1984 ) p37-45
  - 4 ) Boyer S. J., Blume F. D. "Weight loss and changes in body composition at high altitude." J. Appl. Physiol., 57, ( 1984 ) p. 1580-1585
  - 5 ) Cerretelli P. and P.E. di Prampero "Aerobic and anaerobic metabolism during exercise at altitude. In: High Altitude Deterioration." J. Rivolior, P. Science, 19, S. Karger, ( 1985 ) p1-19
  - 6 ) Consolazio, C.F. et al "Metabolic aspects of acute exposure ( 4,300 meters ) in adequately nourished humans." Am. J. Clin. Nutr. 25 ( 1972 ) p23
  - 7 ) 遠藤洋志・浅野勝己。「高所順応トレーニングおよび高所登山の有気的作業能に及ぼす影響」筑波大学体育研究科研究論文集・第18巻,( 1996 ) p269 274
  - 8 ) Jain, S. G. et al "Body fluid compartments in humans during acute high altitude exposure." Aviation, Space and Environment Medicine, 51 ( 1980 ) p234
  - 9 ) 菊地和夫・佐藤方彦・藤原睦弘。「ムスターグ・アタ峰登山隊員に対する高所順応トレーニングについて」登山医学・12p59 66
  - 10 ) Pugh, L.G.C.E. "Physiological and Medical aspects of the Himalayan Scientific and Mountaineering Expedition, 1960-61." Br. Med., J. 2(1963) p621-627
  - 11 ) Rose, M. S. et al. "Operation Everest I" Nutrition and body composition. J. Appl. Physiol. 65 ( 1988 ) p2545-2551

## Effect of Simulated Altitude Training and Climbing on Soft parts Tissue of Thigh

Sanae TAKAHASHI<sup>\*1</sup>Katsumi ASANO<sup>\*2</sup>Hideyuki TAKAHASHI<sup>\*3</sup>Kazunobu OKAZAKI<sup>\*4</sup>

---

### Synopsis

Effects of endurance training under hypobaric hypoxia and climbing on soft parts tissue of thigh were investigated in 6 male climbers aged 31 years old in average. For simulated altitude training, a submaximal pedaling on Monark ergometer (60rpm) for 30min. at ventilatory threshold (RPE:13-15) was performed for 11 weeks with once per week at 4,000m ~ 7,000m in hypobaric simulator (60m<sup>3</sup>) before departure for climbing. For the cross-sectional area measurement of thigh, magnetic resonance imaging(MRI) was used for 50% region between the trochanter major and the lateral intercondylar tuberculum. The cross-sectional area of leg muscles did not show any significant changes, however, the cross-sectional area of fat was significantly reduced after the mountain climbing. It might be suggested that simulated altitude training and climbing caused the enhancement of lipolysis in tissues by hypoxia and exercise.

---

### Key word

Simulated Altitude Training, Climbing, Hypobaric Hypoxia, MRI

---

\*1 Faculty of Human Cultural Sciences and Business Administrations, Nihonbashi Gakkan University. Part-time Teacher

\*2 Health and Sport Sci., Univ. of Tsukuba

\*3 Japan Institute of Sports Sciences

\*4 Graduate School of Shinshu Univ. Doctoral course

## 本学学生の末梢循環動態と骨密度の傾向

小山 貴<sup>\*1</sup>

..... キーワード .....

加速度脈波 (acceleration pulse waveform) BMI (body mass index)

骨密度 (bone mass density)

### 緒言

#### (1) 末梢循環動態

脳血管障害や虚血性心疾患との関係から、最近では動脈硬化予防についての知識が普及し、一般成人の関心も強くなっている。しかし、血圧や心電図等の通常の検診項目では抹消循環系の血流状態は反映されないため、末梢循環についての一般の関心は高いとはいえない。とくに若者の場合は、加齢による身体変化などは遠い将来のこととして、まったく意に介していない傾向がうかがわれる。

循環系全体をみると、動脈系は大動脈から中程度の太さの動脈に分岐し、細動脈から毛細血管に移行し、各組織や活動筋への酸素供給を行っている。(毛細血管は赤血球がようやく通過できるほどの太さで、1本の長さは0.25~1mm程度であるが、ヒトの全身の毛細血管の全長は96,000kmに達する<sup>2)</sup>と推定されている)血流はさらに毛細血管から細静脈に還流して心臓に戻る。末梢循環が停滞し、動脈壁細胞への酸素供給が不足した状態が長期間継続すると、動脈壁の平滑筋細胞が異常増殖を起こしたり、動脈硬化に起因するさまざまな疾病の原因となることも知られている。以前、本学の短大時代に女子学生の末梢瞬間動態の傾向を調査したことがあるため、今回は男女学生につ

いて、末梢循環動態の状況および喫煙習慣との関係の一端を調査した。

#### (2) 骨密度

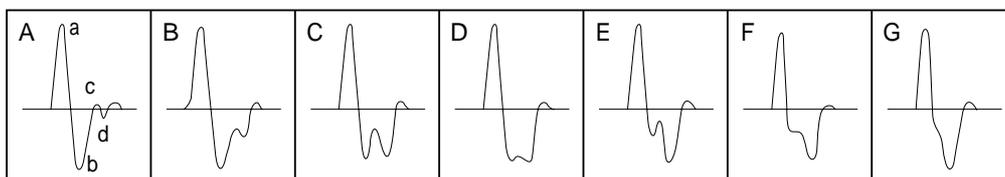
骨は身体の重要な支持組織であると同時にカルシウム貯蔵庫としても機能していることは一般的知識として定着している。しかし、骨の内部構造や骨代謝によって骨の再構築 (remodeling) が絶えず行われていること、および骨密度 (骨量・骨塩量) は、発育期から大学1年生頃にかけてピークに達し、その後は加齢および、女性では閉経後にかけて低下をたどり、成人期から骨密度を上げることは極めて困難であること等については、ほとんどの学生は知識がない。一方、世相の影響により女子では痩せ型願望が最近一層強くなっている。本学短大当時よりの統計では、入学時のBMI (Body Mass Index) が20未満の者の占める割合は93年から増加傾向が表れ、98年には入学者全体の約3割を占めるにいたり、これとともに踵骨骨密度も低下傾向がうかがわれた。骨密度が当該年齢の平均よりかなり下回っていても、自覚はまったくないため、低骨密度者が現在の生活習慣を今後長く継続した場合は、早期に介護を必要とする状態になりかねない。そこで [健康運動科学] 授業において、骨代謝とこれに影響を与える諸要素について説明するとともに、男女被検者を無作為的に抽出して測定した結果を報告する。

2002年8月8日受理

Tendency of Students' Peripheral Circulation and Bone Mass Density

\*1 Takashi KOYAMA

日本橋学館大学人文経営学部



加速度脈波には4つの変曲点があり、第1番目の波高に対する各波高の距離を求めてインデックスとし、A～Gの波形に分類されている。

- A：通常元気な若者に見られる波形で、血液循環良好な状態
- B：血液循環が不十分になっていく過程の中で見られるが、まだ良好な状態
- C：血液循環が不十分になってきた状態を示し、とくに20歳代でこの波形を示す場合は、若干注意が必要
- D, E, F, G：血液循環がかなり悪い状態を示し、脳血管疾患、虚血性心疾患、乳腺腫瘍、子宮筋腫、卵巣腫瘍等の既往症や現在罹患の人に多く見られる

図1 波形による血液循環の分類 (ミサワホーム総合研究所資料より)

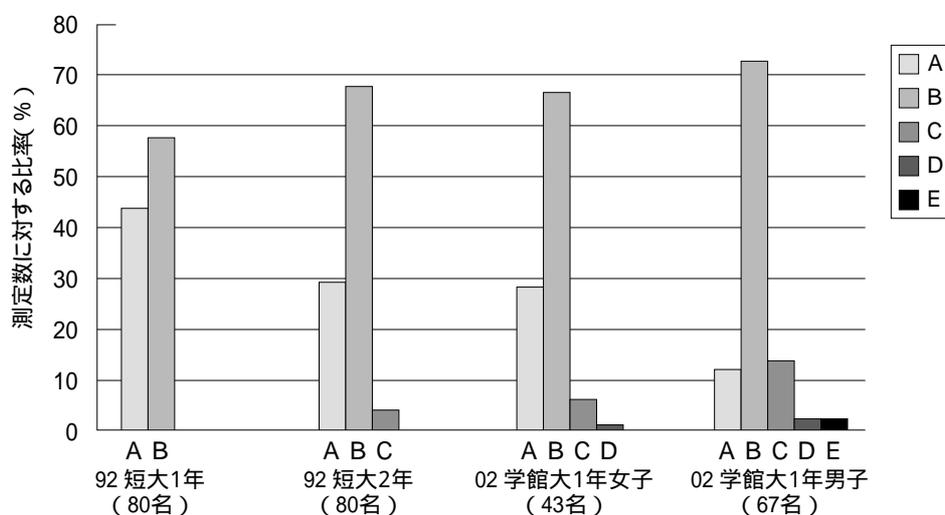


図2 92年女学館短大および02年学館大1年生の抹消循環動態

## 1. 末梢循環動態

### 1.1 測定方法

末梢循環については、動脈の compliance、血液成分、血液の粘性、静脈還流程度など多くの要素が影響し、研究現場では高度な測定が行われているが、今回は短大時代に導入した「加速度脈波測定装置：ミサワホーム「プリケアグラフ」」を使用し、波形による分類を行った。被検者は1年各クラスから無作為に抽出した110名（男：67，女：43名）である。測定は、安静椅座位の状態です右手第1指先端を装置に入れて行った。

### 1.2 結果と考察

血液循環の状態を評価する方法として、以前は手指の爪甲毛細血管血液含有量の変化を、「指尖容積脈波」としてとらえていたが、その後は波形観察を容易にするため、原波形を2次微分して加速度脈波として観察するようになっている。もちろんこの加速度脈波だけで微小循環動態をすべて説明することは妥当でないが、細静脈の収縮力が低下すると血液が静脈に停滞し、加速度脈波に現われることは確認されている<sup>8,17)</sup>。

本学が短大当時（1992年）、1，2年生の学年別に各80名を無作為的に抽出して、安静時の加速度脈波を測定したところ、2年生では1年生に比

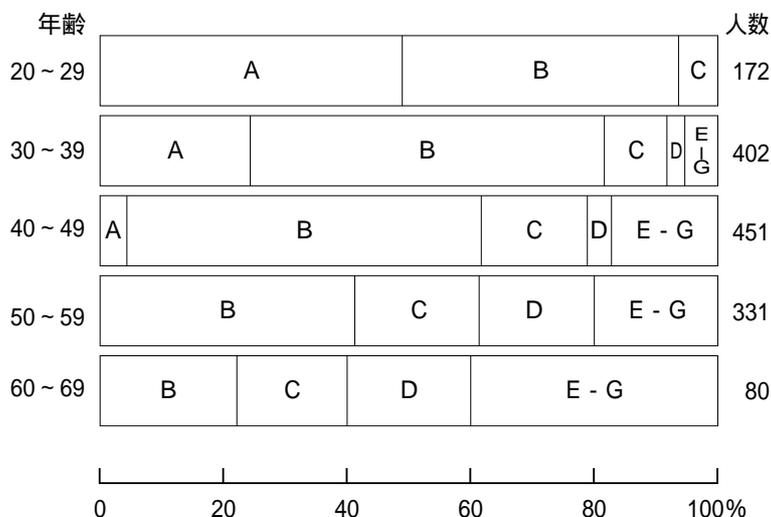


図3 加齢にともなう波形分布の変化（ミサワ資料より引用）

較して A 波形を示す者が有意に減少する反面，B 波形が増加し，さらに1年では見られなかったC 波形を示す者が少数ながら出現するという結果を得ている。そこで今回は1年生男女（男：67名，女：43名）について同様な測定を実施した。[ 図3 ] その結果，女子における A . B . C 波形の割合は，92年当時の2年生女子と同様な傾向を示したものの，D 波形を示す者も出現し，さらに男子では，もっとも血液循環が良好な A 波形は極端に少なく，中高年者並みの E 波形を示す者も存在するという傾向がみられた。今回はとくに測定の際に喫煙習慣の有無と喫煙量を確認したが，A 波形を示した者で喫煙習慣のある者は2%，B では12%，C では88%，D，E 波形を示した者では全員が喫煙習慣をもつことが判明した。

加速度脈波についての先行研究<sup>8)</sup>によると，末梢循環には細動脈の収縮機能のほか，細静脈の径の変化にともなう血流速度も反映するといわれている。すなわち，静脈の収縮力が低下し血液が過度に細静脈に滞留すると静脈還流が停滞し，また，身体トレーニングによって波形が改善された場合は，細静脈の径が細くなっていることが確認されている。しかし，今回の測定で C 以下の波形を示した学生が，加齢による血管壁の器質的变化を起しているとは考えにくく，むしろ細動脈および毛細血管が喫煙の影響によって収縮し，これが

血流停滞に大きく影響しているものと推察される。（1日約20本の喫煙習慣のある55歳，61歳，67歳男性について [ 朝から一度も喫煙せずに午後測定 ] では3人いずれもC波形を示したが，その後1本喫煙の5分後の測定では1人がD，2人がE 波形を示した）これらの結果から，本来ならば動脈のコンプライアンスが良好なはずの若者でも，断続的な喫煙の間には末梢循環が不十分な状態になっていることがうかがわれる。

若者では大部分が A . B 波形を示すことは当然としても，40歳以後は各波形のばらつきが大きくなる。[ 図3 ] これは，適度な身体トレーニングや適度な食事，休養等を含めた生活習慣を持つ人と，そうでない人の差を反映しているものと考えられる。C 波形以下の学生の場合は，本来若い血管も未成年期より度重なる喫煙によって血流が不十分になっているといえよう。この状態が今後中年期にかけて継続するならば，循環器系の疾患や悪性腫瘍発症の誘因となりうる。一般に喫煙習慣を断ち切ることは困難であるが，生理的内容を含む授業科目等で喫煙習慣の影響を啓発することも望まれる。この効果は直ちに現れるものではないにしても，将来のある時期において何割かの者は，学生時代の授業で記憶した知識が呼び起こされて禁煙する可能性も期待できよう。

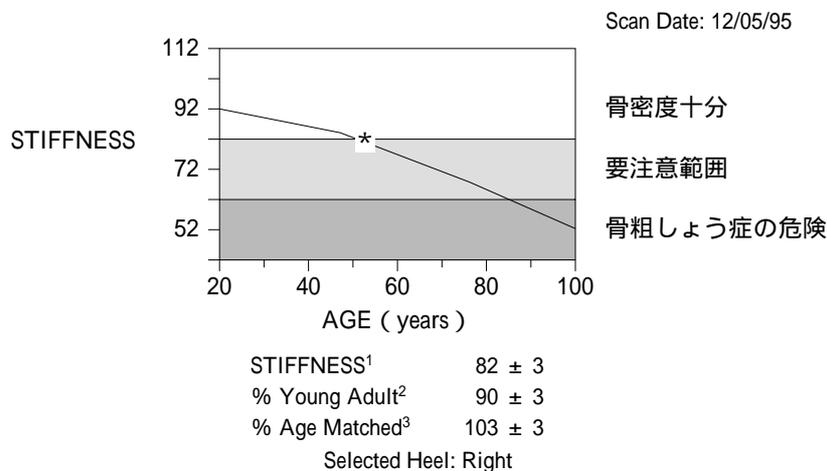


図4 - 1 超音波骨密度測定装置による50歳女性の踵骨測定結果表示例



図4 - 2 59歳男性測定例

## 2. 本学学生の骨密度

### 2.1 測定方法

USA LUNAR 社製超音波骨密度測定装置 [ Achilles A - 1000 ] を使用して踵骨を測定した。専門医療機関における精密検査では、X線を使ったDXA法により必要に応じて脊椎、橈骨、上腕骨、大腿骨等の各部位を測定するが、超音波法は人体に影響がないこと、機器使用にあたって特定の資格が不要なこと、および脊椎と踵骨の骨量には相関が高いこと等から、通常のスクリーニングに利用されている。

被検者：大学生では骨の発育が完了して peak bone mass の時期にあり、学年間の有意差は考え

られないため、2000, 01, 02年度入学生から無作為に抽出した男子72名、女子47名について測定した。

### 2.2 結果と考察

骨密度には遺伝・人種・栄養・運動・体重等多くの因子が影響するが、中でも人種素因は大きいとされている。(黒色人種、白人、東洋人では平均値と加齢による低下状況はかなり異なる)なお、本装置による測定誤差は±3%とされ、±1SD範囲を平均範囲としている。[図4-1・2]は本装置による20歳日本人健常者男女の平均値とその後の平均的低下傾向、および中年男女の測定例を示したものである。[図5][図6]には本学学

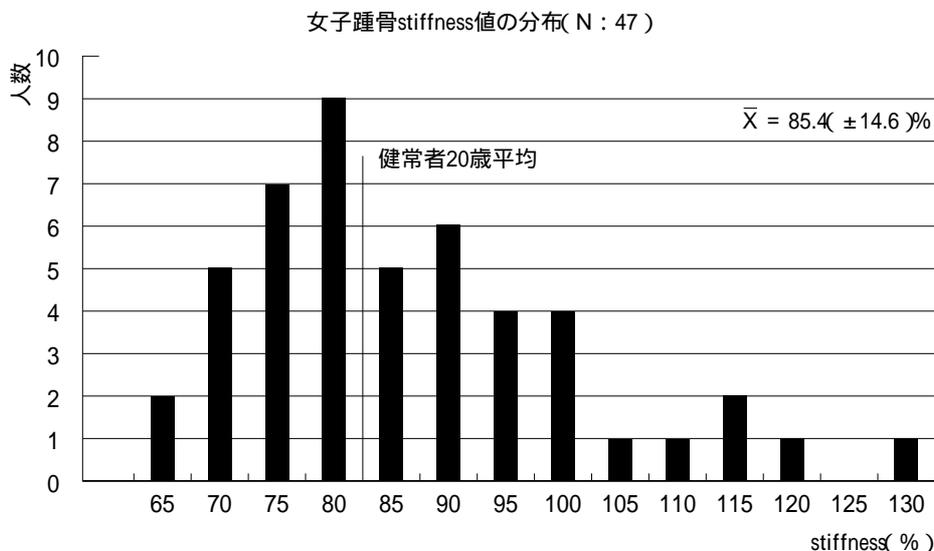


図5 本学女子学生の踵骨骨密度分布

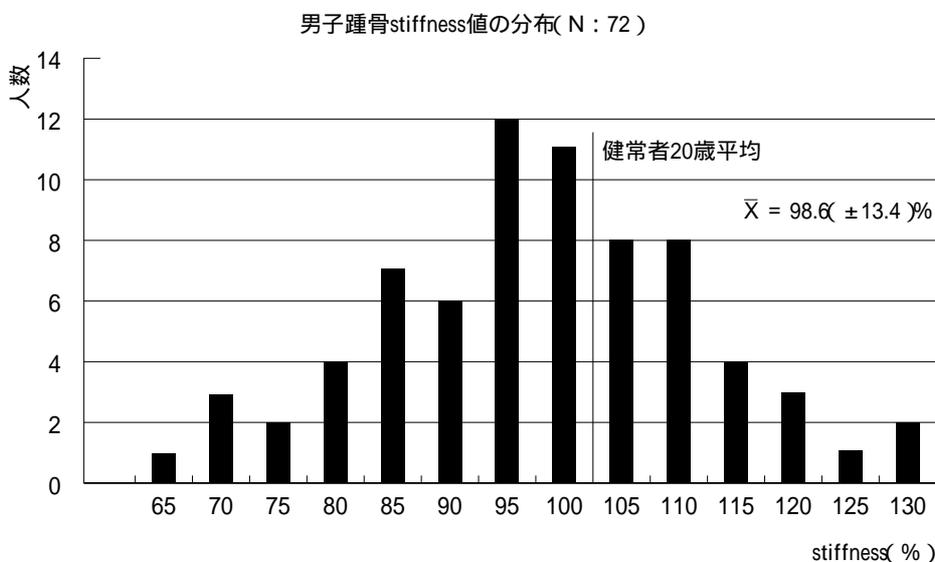


図6 本学男子学生の踵骨骨密度分布

生の骨密度分布状況を示した。個人差が大きいことは当然としても、男子女子とも平均値は日本人20歳の平均より下まわっている。この現象は本学学生に特異的に現われているものではなく、最近の若者に多くみられる傾向と考えたい。その理由として、この装置が開発された当時とは世相がかなり変化し、男女とも痩せ型志向が当時より強くなったことが考えられる。骨密度に影響する要素の1つとして低体重があげられるが、小中学時代からの減量により踵骨にかかる重量負荷が少なくなっていることも原因の一つと推察されるほか、

体重減量のみを目指すあまり栄養摂取が十分でないこと、および食事習慣の多様化にともなって、カルシウム摂取量も減少していること等も原因として考えられる。やせ体形志向をを裏付ける事実として、BMI が20未満学生の割合増加があげられる。本学体育では87年の短大開設以来、入学生のBMIを算出しているが、この統計結果<sup>6)</sup>によると、87~92年にはBMIが20未満の痩せ型学生の割合は数%で推移していた。これは生まれつき痩せ型の者がいるということを示すもので当然なことである。ところが、93~97年には $p < 0.001$

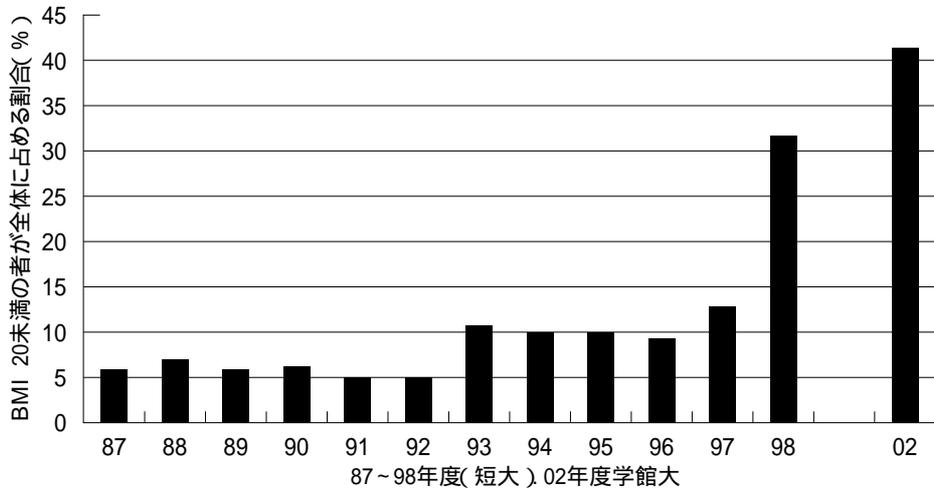


図7 87年短大設立時より02年女子入学生のBMI：20未満の割合推移

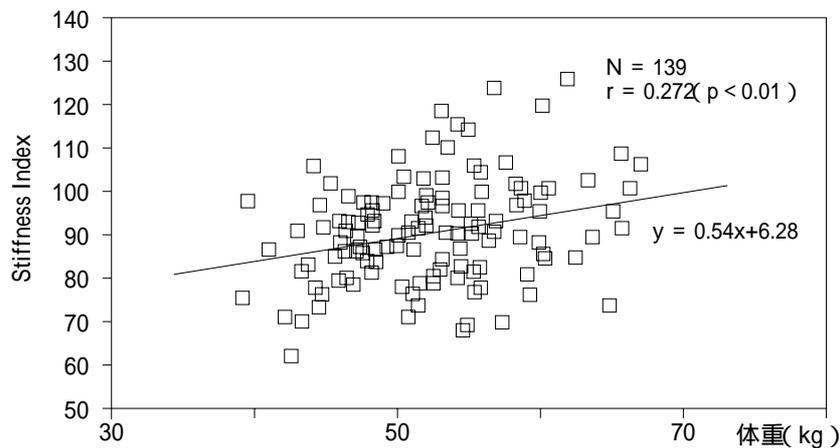


図8 体重と踵骨stiffnessの関係 (1995本学短大1年生)

の有意水準で10%に上昇し、98年に至って突如33%に急増し、骨密度被検者学生の骨密度平均も、それ以前とは有意に減少した。今回(02年)は、それをさらに上回り、入学生女子の40%以上が痩せ型という状況である。[図7]

また、骨密度が - 1 SD 以下の学生の約70%が、小学校給食での牛乳を飲まなかった、家庭においても「太るから」ということで、骨が peak bone mass に達するまでの期間に乳製品の摂取量が少なかったことがうかがわれる。さらに、ダイエットの結果、身長に対して体重が十分に増加していないことも原因の一つと考えられる。男子については本学での過去の測定結果はないが、最近の傾向として女子同様、痩せ型志向が以前より増加していること、および「好きなものだけ食べる」と

いう最近の傾向も影響して、20歳平均以下の者が95年当時より増加しているものと推察される。

一般に、骨 = カルシウムという感覚が定着しているが、骨代謝および骨密度に影響する因子は多様で、遺伝、ホルモン分泌、栄養摂取量、体重、運動の種類と量、日光被曝量等があげられる。Kraillら1993<sup>9)</sup>は統計的に検討の結果、遺伝的因子が骨塩量に影響する割合は46~62%としている。体重との関係については先行研究により有意な相関が認められているが、本学短大当時の検討結果<sup>5, 6)</sup>でも有意な相関が認められている。[図8]

また広田<sup>3)</sup>は女性について、ダイエットと開始年齢と低骨密度者の割合について検討し、小学校時代にダイエットを開始した場合は、顕著に骨密度低下者が多いことも示唆している。[図9]

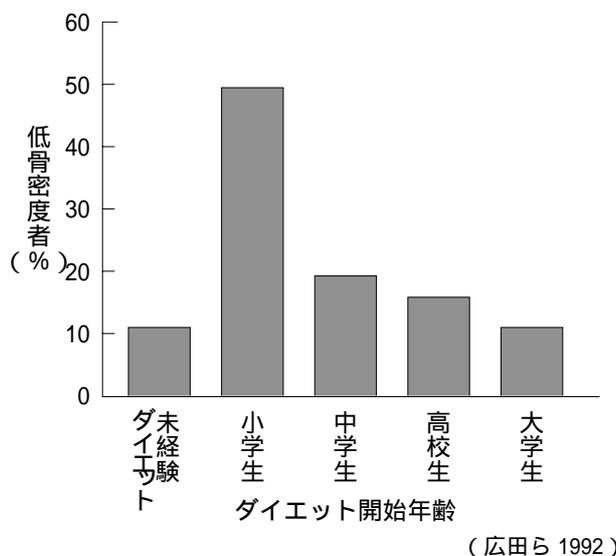


図9 ダイエット開始年齢と低骨密度者の割合

骨密度に影響する諸要素のうち、最近では「骨代謝に関しては基礎、臨床、いずれのレベルの観察でもカルシウム摂取量、日光被曝量よりも運動負荷量の多寡の方が与える影響が大きい」<sup>11)</sup>とされるようになった。今回の測定でも男女とも + 1 SD を超える者の中には、中学～高校にかけて、サッカー、陸上短距離、バスケットボールをしていた学生が多く含まれている。19世紀より Wolff の法則として「骨格の内部構造は伝達される荷重や歪みの影響を強く受けて適応する」ことが知られている。骨への力学的ストレスによる歪みが電位を生じ、それが骨形成・吸収に影響するといわれているが、最近では骨細胞に圧の感知機構があるらしいことがわかってきた<sup>11)</sup>。最近の研究報告と本学短大時代の検討記録<sup>6)</sup>を照合すると

1. 骨密度が正常なランナーでは、一過性の運動刺激によって骨形成優位状態になるが、低骨密度のランナーでは運動後の血中 PTH の上昇によって、骨吸収が亢進する。
  - ・元陸上ランナー経験者でも、高骨密度の者と平均以下の者が存在した。
2. 成人女性の筋力トレーニングでは、一般に筋力上昇とともに骨量が上昇するが、荷重があまり大きいと低下することがある。効果は各人の閾値に関係するのではないか。

- ・体格が小柄で低骨密度の1人は、荷重を負荷したスクワット・トレーニングの継続とともに踵骨骨密度が低下した。
- 3. 筋力トレーニングを継続に行っている者では、骨形成マーカーが有意に高値である。
  - ・鉄板焼き器具を運搬するアルバイトを継続した学生は、2年間の在学中に有意に踵骨骨密度が上昇した。
- 4. 持久性トレーニングを継続する者では、血中 PTH が低く、低骨代謝回転である。
  - ・中～高にかけて長距離選手だった女子2名の踵骨は、- 1 SD 以下の骨密度を示した。

2.3 授業(健康運動科学)での必要指導事項  
健康運動科学の講義指導に先立つ調査によって、入学生の骨代謝についての知識は極めて乏しいことが判明している。まず、骨の内部構造についての知識はなく、骨は生きているという認識はほとんどない。当然ながら骨の自覚症状はないため、骨粗しょう症という言葉は知っていても、あくまで他人事と考えている。骨代謝については年々新しい知見が報告されている。そのため、骨についての解剖的・基本的知識の理解 骨吸収・骨形成のメカニズムを理解させる 骨代謝のサイクル期間は2～3か月であり、体重のように

簡単に上下しないこと。20歳以前に最大骨密度に達し、以後は加齢とともに低下していく。したがって、若い時に最大骨量を上げておくことが必要。(将来の自分の子育て時に知識を生かすこと)

体重減少のみを目的とした減食は一層骨密度を低下させる。骨にかかる適度な荷重は骨密度上昇に有効である。(ダイエットによって筋肉量を減らさないこと)等を良く理解させることが必要である。以前に書かれた教科書の記述のみでは不十分であるため、今後は新しい知見を紹介しつつ、少なくとも骨に関心がある学生については骨密度を測定して、適切な助言を行うことが望まれる。

#### 参考文献

- 1) 岩垣丞恒：“運動と骨代謝の変動”運動とエネルギーの科学 東京 杏林書院 1996 P149-162
- 2) 狩野 豊：“毛細血管”新運動生理学 東京 真興交易医書出版 2001. P129-135
- 3) 骨粗鬆症健診マニュアル検討委員会：“若い女性における骨粗鬆症予防のための健診・指導マニュアル” 東京 中央法規出版 1996. 72p
- 4) 骨粗鬆症財団：“骨粗鬆症と寝たきり予防のための効果的運動療法の研究開発事業報告書” 1996
- 5) 小山貴：“本学学生の体力・身体組成・末梢循環動態”日本橋女学館短期大学 紀要第6号 1993
- 6) 小山貴：“女子学生の骨密度改善を目的とした教育 - 将来の骨粗鬆症予防への基礎対策”私学振興財団特色ある教育研究報告書 1995
- 7) 小山貴：“身体運動によるエネルギー消費を強調した 女子学生に対する健康教育”私学振興財団特色ある教育研究報告書 1998
- 8) ミサワホーム総合研究所：“加速度脈波”MISAWA HOMES INSTITUTE OF RESERCH & DEVELOPMENT TECHNICAL REPORT Vol.22 1992
- 9) 松本俊夫：“分子骨代謝学と骨粗鬆症”東京メディカルレビュー社 1996 405p
- 10) 松本俊夫：“骨粗鬆症 - 分子メカニズムから病態・診療・治療まで - ”メディカル用語ライブラリー 東京 羊土社 1995 150p
- 11) 向井直樹：“骨代謝”新運動生理学 東京 真興交易医書出版 2001. p160-167
- 12) 中野昭一：“運動と骨代謝の変動”運動とエネルギーの科学 東京 杏林書院 1996 p149-162
- 13) 日本エアロビックフィットネス協会：骨粗鬆症予防のための効果的運動療法の研究開発事業報告書 1992
- 14) 沢井史穂：“運動習慣と骨密度” 体育の科学 Vol.42 . 1992 p851-856
- 15) 田和俊也：“大学スポーツ選手の骨格・骨密度の規定因子 - エストロゲン受容体遺伝子多型との関連 - ”臨床スポーツ医学 No.7 1998 p733-740
- 16) 東京女子医大神経内科・中央検査部：中年・高齢における加速度脈波 1987 第7回加速度脈波研究会
- 17) 山崎元：“骨密度測定の方法 - 測定部位による相違・部位の選択”臨床スポーツ医学 No.7 1998 709-717
- 18) 山崎元, 辻秀一：“骨におよぼすメカニカルストレスの変化”体力科学 Vol. 46 . No.1 FEB 1997

## 情報倫理と情報心理に関する一考察

茶園 利昭\*1

..... キーワード .....

情報心理 (psychology on web sites) 情報倫理 (information ethics)

インターネットの心理 (psychology of the Internet)

### 1. はじめに

「情報ネットワーク社会」化は想像以上の速さで進展してきた。その結果、さまざまな光と影の面が生じてきた。

健全な情報ネットワーク社会を築くためには、「技術」と「規制」そして「倫理」の面からのアプローチが欠かせない。すなわち、

伝統的な情報技術による強化：暗号化，電子署名，電子認証，電子透かしなどの通信技術，ファイアーウォール<sup>注1</sup>やフィルタリング<sup>注2</sup>，IDとパスワード，など

公権力による規制<sup>注3</sup>：個人情報保護法，インターネット法，警視庁による「ハイテク犯罪対策センター」などの設置，サイバーパトロール，など

情報倫理：健全なネットワーク社会を築くために守らなければならないこと，犯罪加害者・被害者にならないために要求されること，などを個人が自覚し，自律できるようにすること

である。

わたしたちは長い時間をかけて，従来のオールド・メディアによるコミュニケーション（すなわち対面による対話，電話などでの通話，新聞や書

籍など文字情報によるコミュニケーション）との付き合い方を学んできた。そういう付き合いの中で，情報の真偽を見抜く方法や，誤った情報を流さないための仕組みなどを作り上げてきた。

しかし，「闇の中から忽然と姿を現し，わたしたちの生活に飛び込んできた」（Wallace, 1999）インターネットには双方向性がある点で，（上から下への）一方向の情報伝達でしかなかったオールド・メディアとは決定的に異なっている。この双方向性のおかげで，eメールやチャット，あるいは掲示板で，多くの人に自分の意見を述べ返事をもらうことが極めて容易にできるようになった。そしてこの利便性ゆえに，インターネットはメディアの主役にのし上ろうとしている。

それにしても，人はディスプレイ上に表示される情報に過大な信頼を置きすぎているだろうか。従来のメディアには，たとえば「校閲係」などの，情報の真偽・軽重を判断するスクリーニング機能があったが，ネット上には真偽不明の膨大な情報が無秩序に流れている。「21世紀は情報の時代，インターネットの時代」と言われているが，その利便性の影の部分を見れば空恐ろしい状況にある。にもかかわらず，人はなぜネット上の情報を安易に信じるのだろうか。また，「車に乗ると人格が変わる」人がいるように，ネット上では，今までの人と人，あるいは文書などでの文字メディアでのやりとりとは明らかに異なる行動をとる人がいるのはなぜだろうか。

2002年9月20日受理

A Study of "Information Ethics and Psychology on Web Sites"

\*1 Toshiaki CHAZONO

日本橋学館大学人文経営学部

## 2. 「情報心理」研究<sup>注4)</sup>

筆者は、どうすれば「情報被害者」や「情報加害者」にならないか、よきネチズンとなるにはどうしたらよいか、を「情報倫理教育」の立場から研究してきた。(茶園, 1999, 2000, 2001, 2002)

しかし、「物を盗ってはいけない」「人を傷つけてはいけない」ことを誰もがよく知っているにもかかわらず、窃盗や傷害事件がなくならないように、いくら情報倫理教育を行っても、オンラインに特有の心理状態があり、インターネットユーザーは知らず知らずにその心理状態<sup>注5)</sup>に陥る危険性があることを理解しないかぎり、ネット事件や犯罪がなくならないだろう。

インターネットを利用する上で、次項に述べるようないくつかの問題点があるが、じつはそれとは別に「インターネットの世界では、人は奇妙な行動をとったりふつうとは異なる人間関係を築いたりすることがある」(Wallace, 1999)ことが知られている。「正常な人」がほんのささいなことで普段とは異なる行動、しかもきわめて目立つ行動をとることが、人間行動に関する研究から明らかになっているが、なぜインターネットという最近登場した場でそれが目立つのだろうか<sup>注6, 7)</sup>。

このネットユーザーの心理を巧みに利用する者がいて、インターネットの影の部分では、プライバシー侵害、悪徳・悪質商法、インターネット取引トラブル、著作権問題、セキュリティ、オークション被害、電話料金請求、ネット詐欺、児童ポルノ、迷惑メール、等々が刻々と姿を変えながら待ち受けており、だれもが情報被害者(そしてときには加害者)になりうる。「なぜ怪しげなサイトに興味を持つのか?」、「なぜネット上では、今までの人と人、あるいは文書などでの文字メディアでのやりとりとは明らかに異なる行動をとる人がいるのか」など、ネット利用時のユーザーの心理状態にまで一歩踏み込んだ考察が「情報倫理」研究で求められるのではないかと<sup>注8)</sup>。

また、われわれはインターネットという、瞬時に地球規模でコミュニケーションできる全く新し

い手段を手に入れたが、人はなぜそうまでしてコミュニケーションを図りたいのだろうか。コミュニケーションの機会や対象が広がり、個(1)がグローバル(Internet)に繋がれば繋がるほど、自己を意識せざるを得ない状況が生まれているのかもしれない<sup>注9)</sup>。

本小論は、「情報倫理と情報心理」という観点から考察を試みた。

## 3. インターネット利用の問題点

インターネットが職場や家庭に導入されることで生じる、従来のオールド・メディアの時にはなかった、さまざまな問題が議論されてきた。

### 3.1 コンピュータの導入と健康

コンピュータに従事する人の健康問題は古くから取り上げられ、心理的問題として「テクノ依存症」と「テクノ不安症」が指摘された<sup>注10)</sup>。(Brod, 1984)

テクノ依存がもたらすようなコンピュータと人間との関わりについては効果的な対策はとられてこなかった。1980年代にコンピュータがパソコンとして職場から家庭に侵入すると、「長時間コンピュータゲームに夢中」になって健康を損ねる、あるいは家庭内での対話がなくなるなどの社会現象が起きてきた。

さらに、1990年代に入りコンピュータのネットワーク化が進み、1995年末のウィンドウズ'95の販売でパソコンの普及が一気に進んだために、家庭や学校、職場でのインターネット利用が猛烈な速度で進展し、健康問題は全国民的な課題となった。

### 3.2 インターネット・パラドックス

このような状況を受けて、1998年にアメリカで、インターネットを利用することによって対人関係が阻害されるという「インターネット・パラドックス」という考え方が発表された<sup>注11)</sup>。

その後、いくつか同様の調査が行われ、

インターネットを利用することで、遠くに住

んでいるために疎遠になりかけていた親戚や友人との関係が親密になる

インターネットでのコミュニケーションの相手は、インターネット上で新しく知り合う相手であることはまれであり、既存の人間関係とのやり取りが多く、関係が深まる

等のインターネットが持つ「プラス」面が指摘された。島井・出口（2001）は女子大学の1年生を対象にして、インターネット利用の程度が心理社会的な健康状態に及ぼす影響を調査し「WWWにより多くアクセスすると社交性が低下する」というインターネット・パラドックスに一致した傾向を得ている<sup>注12</sup>。

### 3.3 インターネット中毒

「ネット中毒」や「インターネット・ジャンキー」とも呼ばれている<sup>注13</sup>。「ネットに夢中になっちゃって」とか「はまっちゃって」と冗談で言う人がいるが、真正正銘インターネットに嵌ってしまい、すべてのことをオンライン上で済ませようとする。学校にも行かなくなり、子育ても放り出し、仕事もサボったり休んだりするようになる<sup>注14</sup>。オンラインでの擬似恋愛やサイバーセックスなど、リアルな生活（時間）のなかにバーチャルの生活（時間）が侵入してくる<sup>注15</sup>。

ヤングは著書「インターネット中毒」（Young, 1998）の中で、インターネット中毒になるとはどのようなことか、何がそうさせるのか、過度のインターネット利用が引き起こす諸問題、そしてインターネット中毒にどう取り組むかを400名以上のオンライン中毒者やその家族へのインタビューとともにまとめている<sup>注16</sup>。

## 4. インターネットの特徴と心理

インターネットは従来の通信メディアと異なり、それ自体は目的や役割をもたず、利用者がそれぞれの目的をもっている、誰にも帰属せず用途に対して開いている、という画期的なメディアであるが、さらに、地球規模、高速度、パーソナル、デジタル、などの特徴をもつメ

ディアでもある。情報をデジタル化することで、われわれは「誰もが、いつでも、どこでも、どこへでも、いくらでも、何でも」発信できるメディアを手に入れた。このような特徴が利用者心理に大きく作用し、インターネットは爆発的に普及した。

### 4.1 匿名性

インターネットには「匿名性」があり、これが従来にない自由な行動を可能にしているといえる。西村によれば（岸田・西村，2000.3），「遊びの基本的構造は同調（チューニング）であり、遊びにおいて同調がなりたつための条件は匿名であり、匿名だからこそ遊びは成立する。インターネット（電子メディア）では顔を合わせることすらない匿名性であるぶんだけ、遊びが発生しやすいメディアである」という。

### 4.2 密室性と親密性

インターネットはいつでもどこでも相手にダイレクトにコンタクトが取れるために親密性と密室性があり、今までにない自由な関係を持つことができる。携帯電話に代表されるモバイル・コミュニケーションの発達にはさらに拍車をかけている<sup>注17</sup>。また、都合が悪くなればいつでもコンタクトを遮断できるために、つぎからつぎへと手軽な人間関係を求め歩くことを可能にしている。

### 4.3 文字情報

通常、人と話すとき、相手の外見（容貌、仕草などの行動）や、風評、場の雰囲気、音声（言葉づかいや声色）など、さまざまな情報を取込みながら総合的に判断している。おなじ言葉づかいでも、場の雰囲気でニュアンスがまったく異なることはよく経験することである。しかしながら、パソコン通信やインターネットでは文字が主な伝達手段であるために、書かれている文字（情報）だけで判断しなければならず、受け取る側は自分に都合の良いように解釈しがちである。そこで、文章そのものだけでは誤解を与えられる時に、感情を表現し、語調を和らげるために顔文字

(スマイリー・フェイス/エモティコン)注18)や、言語表現を和らげるための「ソフナー」を文章に混ぜる工夫がされている注19)。

#### 4.4 即時性と広域性

メールの利用に慣れてくると、その利便性ゆえに従来の郵便注20)では物足りなくなってくる。ことに掲示板では、早く返事や意見を書かないと会話から取り残されてしまうという焦りから、文章や言葉づかいを十分に吟味しないままに書いてしまいがちとなり、時には思わぬ誤解を招く。匿名性ゆえに、激しい人身攻撃や、中傷表現となる場合がある注21)。

### 5. 情報倫理の視点から見たインターネット世界の問題点と情報心理

インターネットには前項で述べた特徴があり、インターネットの世界ではそれらが絡み合った特有の問題がある。

ウォレスはインターネット世界の特徴として「オンライン・ペルソナ (online persona)」、「オンラインにおける仮面 (online masks and masquerades)」、「サイバー空間の集団力学 (group dynamics in cyberspace)」、「集団間の葛藤と協力 (intergroup conflicts and cooperation)」、「フレーミングと争い (flaming and fighting)」をあげている。(Wallace, 1999) これらは、2chなどの非同期型注22) ディスカッションフォーラムやチャット、MUD注23) などのような集団的ネットワークでは特に顕著に見られる傾向である。以下、「情報倫理」の視点と併せて見ていく。

#### 5.1 オンライン・ペルソナ

オンライン・ペルソナとはインターネットの環境 (WWW, eメール, ディスカッション・フォーラム, チャット, など) の中で形成される個人の印象のことである。ペルソナとは、社会的な肩書きや身分、あるいは父親・母親のような外側への「仮面」のことで、わたしたちは常にこのペルソナに相応しい言動をとることが期待されてい

る。それは外界とうまく適応していくために重要なことである注24)が、しかし、時には重荷になることもある。

私たちは社会生活のなかで、ながい年月をかけて自身のペルソナを確立してきている。そのペルソナを変えることは時には大きな危険すら伴いかねない。しかし、ネットワークの中では、まったく別人格を演じることができ、そのとき自身が選んだペルソナを「オンライン・ペルソナ」という注25)。ウォレスは「インターネットの心理学」のなかで、インターネット空間に特有の人間行動や、オンライン上での個人 (オンライン・ペルソナ) の暖かい印象や冷たい印象がどのように形成されるか、性や年齢の与える影響などにつき詳細に検討している。

ところで、判断材料となるべきオンライン・ペルソナの基本情報 (たとえば性別や年齢、職業、地位、家庭環境、趣味、等々) が偽りであることは決して珍しいことではない。実際と大きく異なるオンライン・ペルソナをもったとき、人は日ごろの倫理的抑制が外れて、性差別や攻撃的発言などさまざまな問題を引き起こし易くなるのではないだろうか注26)。ネット上では、人は「オンライン・ペルソナ」を持っていて、それがリアルな世界での人格と異なっているかもしれないと覚悟してかかることが大切である。

#### 5.2 オンラインにおける仮面

インターネットの世界では、現実のフレームと役割演技のフレームとの間の境界 (壁) があいまいで、両者は互いに浸透しあっている。そのため、誰もが簡単に仮面をかぶって役割演技をすることができるが、根本的な問題は、「インターネット社会のルールを実世界のルールと同じであると考えるか、それとも、まったく異なるルールであると考えるかである。全員がある役割を演じ、そのことを全員が了解していれば問題は起きない。しかし、現実自己とまったく異なるペルソナを演じている人が自分だけだったら」(Wallace, 1999) トラブルとなる可能性があるだろう。

誰もが「変身願望」を持っている。このこと自体は必ずしも悪い事ではないし、それなりの意義もあるが、インターネットの匿名性は「変身」や「仮面をつける」ことを極めて容易にした。ヤングによれば (Young, 1998)「オンライン上で別人になりすまし、自分と違う人間になるという考えが、多くのユーザーを魅了し、インターネットを長時間使う原因になっている。インターネット中毒者の中にはハンドル名をいくつも持ち、そのときの気分や願望でオンライン上の性格を変える人もいる。ひとつのハンドル名だけを使う人もいるが、この場合は、自分の日常の性格とは反対の理想の人や、抑圧された感情を引き出せる人物を演じている」のである<sup>注27)</sup>。

ネット社会では、相手が変身している、あるいは仮面をかぶっているかもしれないという最小限の自己防衛意識を、とくにインターネットを始めたばかりの人は、常に持っていなくてはならない。

### 5.3 サイバー空間の集団力学

「オンライン・グループの仲間と特別に深い関係を築くとき、その結びつきは、実世界のグループよりもはるかに強いものになる」ことがあり、「実社会で会うことを考えていない集団に何らかの『集団性』が生じるとすれば、それはオンライン・コミュニケーション力学のせいである。」しかし注意すべきことは、「ネット上での過度の『集団成極化』」である。すなわち対面集団のときと比べて結論に達するまでの過程で集団の冒険者となるべく、ぎりぎりの境界線まで進む意見を述べたりすることが見られる。」(Wallace, 1999)

サイバー空間にもリアル世界にある「いじめ」の構図がある。このような「凝集性が高い集団」では、集団の中で相互に強く影響しあい、やがて時間の経過とともに仲間内だけに通じる用語や言い回し、話題、ルールが生まれてくる。そしてこれに同調できない人は集団から離れていくので、ますます内部の結束が強固になり、成員への同調も強く求められるようになる。また、集団の意見に沿わない発言はたとえそれが正論であっても、

つよい抑制がはたらき、ときには罵詈雑言ともいえる強烈な発言のあらしや「いじめ」に見舞われることになる。相手の姿が見えないだけに、また匿名性があるだけに、いっそう強烈になりやすい。バーチャル世界でリアル世界ではできない「憂さ晴らし」をしている場合もあり、これに巻き込まれない工夫や注意が必要である。

### 5.4 集団間の葛藤と協力

インターネットはテレビなどの従来のマスメディアと次の2点で大きく異なる。

ユーザーが「主体的」に「参加」している。

ラジオやテレビなどのマスメディアでは視聴者が無目的・受動的に情報を受け流すことができるが、インターネットでは「ながら族」はありえず、ユーザーはある目的や意思を持って主体的に関わっている<sup>注28)</sup>。ユーザーたちが主体的にこのような関わり方をするので、そこに共通の趣味や価値観を持った人たちのネットワーク(集団)が形づくられてくる。膨大な数の多様な人々がインターネットにアクセスし、このような多くの集団が日々、離合集散を繰り返している。

インターネットや集団への参加は、誰からも強制されず、まったく自由であり、集団からの離脱もまったく自由である。

ある共通の目的や意思、価値観をもったユーザーたちで作られた集団であり、それに共鳴する人が自分の意志で主体的に参加したとはいえ、ある事柄について、集団内のメンバー全員の意見が一致することはほとんどありえない。集団内での意見や価値観と自分のそれとの違いが大きくなったとき、ユーザーは集団から離脱していくので、この集団は、「凝集性の低いゆるやかな(内)集団」といえる。このとき、「たとえば部外者の侵入のような何らかの刺激が加わると、集団の意見は収束し、その集団に固有のルールをいっそう徹底させて、凝集性の高い緊張度の高い集団を作り上げる。」(Wallace, 1999)<sup>注29, 30)</sup>この関係は、集団と個人の間にも、また集団と集団の間でも成り立つ。個人同士や集団同士は、ときには反発し、

ときには協力している。

また、インターネットの「参加自由」という性格は、参加メンバーの「地位平等化」現象を引き起こす。実世界では、職業や地位、服装、表情、話し方、ときには「無言」でいることでの威圧感、などが話し合いに強い影響力をもってくる。しかし、インターネットでは文字で情報交換が行われるので、上記の要素は役に立たず、だれもが単なる1メンバーとして集団に参加しているので、集団の意見に同意できるかどうかは実世界以上に大きな意味をもってくる。異なる意見をもつ者同士での猛烈な反論・反駁合戦が繰り広げられることも希ではない。ネットでの意見交換は相手の人格攻撃にまでエスカレートしやすいという側面がある<sup>注31)</sup>。

#### 5.5 フレーミング(ネットにおける攻撃)

実世界で相手を攻撃するにはさまざまな方法があるが、ネット上では、唯一文字に頼るしか方法がない。そのために実世界以上に過激な表現をしたり、そういう表現をしたという行為そのものに自分自信が刺激を受けたりする。また、自分の書いた意見に対する相手の反応でまたまた刺激を受け、「刺激のスパイラル」が生じる。一度この状態になると、インターネットの特徴である匿名性や密室性、文字情報、即時性などが悪い方に働き、興奮は興奮を呼び、議論は「反対の為の反対」となり、一気呵成に最悪の事態へと突入してしまう。

このように、意図しないのに結果として争いになることもあるが、インターネット特有の現象に「フレーミング」がある。電子メールのメッセージ、ニュースグループの投稿記事、掲示板の書き込みなどで、意図的に相手を激昂させたり侮辱したりする行為のことであり、そのような文書が原因で発生するネットワーク上でのけんかをフレームとも言う。

文字だけに頼る非対面での対話では、対面での対話のときに比べて、表情や口調が伝わらない分、情報は目減りして伝わる。目減りする情報でキャッチボールをしていると、伝言ゲームのように、

ついにはとんでもない誤情報となる。途中で誤解・曲解が入り込めば誤解が誤解を生むということになりかねない。インターネットの世界には、この弱点を悪用して故意に「フレーム合戦」を煽る人がいる<sup>注32)</sup>。

フレーミングを回避するには、文中で相手を怒らせる表現を使っていないか、誤解される言葉や言い回しがいいかを慎重に吟味しなければならない。すぐにメッセージを書き込まなければならない場合には一層の注意が必要である。また挑発的な文書は無視する勇気も求められる。

## 6. おわりに

インターネットはわれわれの生活に計り知れない恩恵をもたらしてくれた。eメールのように実世界の延長としての利便性もあるし、高度な愛他主義(たとえば地球規模での援助活動や、きわめて特殊な小グループ活動)の実施も可能にしてくれた。

「光が明るければ明るいほど、影もまた濃い」。いまさら情報ネットワーク社会から逃れることができないのは自明の理である。であるなら、「インターネットの世界で陥りがちな現象」、たとえば、実世界と異なりネット世界では相手に関して極めて限られた情報しか得られないこと、現実と演技の境界があいまいであること、したがって誰もが仮面をかぶって役割演技できること、そして議論の振り子は右と左に極端に振れがちであること、また匿名性ゆえに攻撃的になりやすいこと、などなどについて知っておくことが重要ではないだろうか。このようなネットに特有な現象を知っていれば、「なぜあんな攻撃的なメールを書いたのだろうか」とか「なぜそんな情報を信じたのだろうか」と後悔しなくてもすむ。ネットに存在するこれらの性質を知ったうえで、「情報加害者」や「情報被害者」にならないように心がけながら、良きネチズンとしてネットの恩恵を享受する、というのがこれからの情報化「社会人」に求められる要件だろう<sup>注33)</sup>。

「バーチャル世界の様相には、人の最善の面を

引き出す側面もあれば、最悪の面を引き出す側面もある。しかし、そのような事象が起きる原因を理解していれば、自分のために、そしてオンラインで交流する人のために、何かをなすことができる」というウォレスの言葉（Wallace, 1999）は情報倫理教育を研究している筆者をさらに「情報心理」研究へと導くヒントとなった。

本小論は、情報倫理研究の一環として「情報心理」をとりあげたが、項目の羅列にとどまり十分な検証までには至らなかった。今後、「情報心理」としての体系化や、「文字情報がオンライン・ペルソナ形成におよぼす影響」についても考察をすすめていきたい。

#### 注

- 1) 組織内のコンピュータネットワークへ外部から侵入されるのを防ぐシステム。また、そのようなシステムが組みこまれたコンピュータ。企業などのネットワークでは、インターネットなどの外部ネットワークを通じて第三者が侵入し、データやプログラムの盗み見・改ざん・破壊などが行なわれることのないように、外部との境界を流れるデータを監視し、不正なアクセスを検出・遮断する必要がある。このような機能を実現するシステムがファイヤーウォールである。（e-wordより、<http://e-words.jp>）
- 2) ルータやファイヤーウォールが持っている機能の一つで、送られてきたパケットを検査して通過させるかどうか判断する機能。最も一般的かつ簡便なセキュリティ技術として知られており、最近のルータは大半が持っている機能だが、よく知られているだけに破る手段も多い。（e-wordより）
- 3) 例えば「ガーディアン・エンジェルス」（<http://www.angels.or.jp>）のような民間による規制もある。この組織は、1979年、ニューヨークの犯罪多発地域であったサウスブロンクスで、12人の若者たちによって誕生した。当初は「Dare to Care」をモットーに当時危険であった地下鉄のバトロール、ストリートで発生する様々な犯罪を防止することに主眼が置かれていたが、1995年からはインターネットにおける「サイバー・ガーディアン・エンジェルス」の活動も始め、現在では、「世界最大のオンライン・セーフティ組織」とし

て国連機関等に認知されている。世界11ヶ国、50の都市で多くのメンバーを抱える国際的な犯罪防止NPOとして活動している。

- 4) 「情報心理」は（心理学は門外漢である）筆者が取りあえず作った言葉である。筆者の調べた範囲では「情報心理」という単語は見当たらなかったが、すでに心理学分野では存在する用語かもしれない。
- 5) ネチケット（netiquette）に似た言葉にnetwork ethic（ネット倫理）を短縮したネティック（nethic）がある。これは（ハッカー的）労働倫理と金銭倫理とともに、ハッカー倫理を構成する3つの倫理の一つで、ネチケットよりも広くて深い意味をもっている。ペッカ・ヒマネン（「リナックスの革命」の著者）によれば、「パソコン、インターネット、ウェブ、リナックスなど、情報社会を支える主要な技術を作り出したのは、企業ではなく、プログラム作りに夢中になったハッカーたちである。彼らは、プログラムという仕事を、義務ではなく自分の楽しみのために行い、創造性を重視し、情報は共有されるべきで、仲間からの賞賛に価値を見出す……といった統制のとれた行動倫理を持っている。ネット時代を形成してきた労働・金銭倫理は、産業時代を支えてきた倫理とは明らかに異なっているように、このハッカー倫理も、ハッカーだけでなく、メディアや一般企業に勤める人々にも当てはまり、重大な影響を及ぼそうとしている。」
- 6) リアルな世界でも役割分担かウケ狙いか意識的に奇妙な言動を取る人がいるが、ここではインターネットという世界では「意識しないのにそのような言動をとってしまう人がいる」という意味である。
- 7) ここ数年、インターネット世界の人間行動として、心理学や社会情報学の枠組みで分析しようとする試みがされてきた。なかでもウォリスは膨大な数の研究論文をもとに、「インターネットの心理学」（Wallace, 1999）をまとめた。
- 8) 多くの大学で、「情報教育＝情報リテラシー教育」と捉え、情報倫理教育は「他人に迷惑をかけるのはやめましょう」とか、「ネチケットを守りましょう」、あるいは「著作権侵害で裁判沙汰になると困るので気をつけましょう」などのような精神訓話的な話や法律論などで済ませている例が多い。「PC・ネットワーク環境を学生に提供するに際しては、その適正運用のために一定のルールを定め、これを学生に示すことが必要である」ということが従来の経験から明らかになっているが、

規則や倫理観の一方的な押しつけには教育的効果が薄く、特に大学生を相手にした実効性を期待できない」(原田ほか「早稲田大学における情報倫理を重視したコンテンツ主導授業の実践」<http://qef.h.kobe-u.ac.jp/Eip99/>)(下線筆者)とする意見に同感である。そのためには、「なぜこれが迷惑メールになるのか」とか、「掲示板への書き込みが他の人(の心理)にどんな影響を与えるか」などを体験として実感できるような機会を学生に与え、「規則や倫理観」の重要性を、分からせる工夫が必要である。(茶園, 2002)

- 9) インターネット(Internet)と自分(1)がともに英大文字の“1”ではじまっているのは偶然とはいえ、暗示的である。
- 10) この問題は、コンピュータが職場や家庭に導入されることによってより身近な問題として取り上げられた。コンピュータ利用が引き起こす健康障害問題として、長時間ディスプレイを見つめることによる視力障害、長時間同じ姿勢で座りつづけることによる健康障害などが取り上げられ、コンピュータ労働時間の問題は基準を設定するなど改善がはかられてきた。またディスプレイから放射される電磁波の影響についても論議され、電磁波防止シートやエプロンの使用や、ディスプレイそのものの改良など技術的な解決策などが取られてきた。
- 11) 「インターネット・パラドックス」とは、カーネギーメロン大学のクラウトらによって95年から97年にかけて行われた調査結果から発表された考え方で(Kraut, R., 1998, <http://www.apa.org/journals/amp/amp5391017.html>), 「インターネットの利用は、インターネット上で知り合う新しい人間関係を増加させる一方で、インターネット利用に時間を取られることから、身近な家族や友人等とのコミュニケーションが減少してしまい、対人関係や心理的健康が阻害される」とする。(ただし、この調査はインターネットの普及があまり進んでいない時期のものであったため、インターネットによるコミュニケーションの相手が既存の人間関係ではないという点に注意をする必要がある。)(平成13年度国民生活白書, 4章, 2002より)
- 12) Japan.internet.com はインターネット・ユーザー300人に、インターネットまたはEメールを利用するようになってからの他人とのコミュニケーションの頻度や量の増減について調査を実施した。その結果、家族とのコミュニケーションについては37%が、友人とのコミュニケーションについては61%が「増えた」と回答し、「減った」

と回答したのはそれぞれ4%と2%であった。なお、新しい人と知り合う機会については、42%のユーザーが「(機会が)増えた」と回答しており、友人とのコミュニケーションを中心に、全体のコミュニケーションの頻度・量共に増加しているようである。(デイリーリサーチ: インターネットによるコミュニケーションの変化, <http://japan.internet.com/research/20020618/2.html>)

- 13) 「インターネット中毒」は'Internet addictionまたはpathological Internet use'が使われる。ヤングは「インターネット中毒(患)者」に'online-aholics'という言葉を使っている。
  - 14) Websense Inc.の最新調査結果によれば、従業員の4人に1人がWeb中毒に陥っており、一方、職場でのネット中毒を認識している企業は8%にとどまっていることが明らかになった。( <http://www.websense.com/company/news/pr/02/082102.cfm> ) Websenseの委託によりHarris Interactiveが実施した今回の調査は、最大従業員数38,000人の企業各社の従業員305人および人事部門管理者250人を調査対象として実施された。報告によれば、従業員は1週あたり1日分の就業時間を上回る時間を業務と無関係なWebサイトのネットサーフィンに費やし、さらに、24%の従業員がショッピング・サイトは最も習慣性が強いオンライン・コンテンツであると答えている。
  - 15) このことから、バーチャルの生活とリアルな生活の区別がつかなくなる、という見方することもできるが、いっぽう、インターネットに夢中になっている人の方がむしろ「バーチャルとリアルな切り替えをはっきり意識し、区別しているのではないか」という見方をする人もいる。
  - 16) インターネット中毒関連の情報は'the Center for On-Line Addiction' (<http://www.netaddiction.com>) を参照されたい。ここでは、インターネット中毒になっているかどうかを自己診断できる。
  - 17) 携帯電話では外部から家族のメンバーにダイレクトに連絡が入るために、親は子供の友人関係がさっぱり分からないなど、携帯電話の普及で従来の家族関係が変わってきているようだ。
  - 18) スマイリー(smilly)やエモーティコン(emoticon)などとも言う。笑顔(^\_^)や泣き顔(×\_×)など、様々なものがあり、欧米では:-)のように横に倒した顔文字が使われることが多い。あまり親しくない人に対して使うと馴れ馴れしい印象を与えることがあるので注意が必要であり、仕事など改まった場では用いるべきでない。(e-wordより)
- 1982年にScott Fahlmanがオンラインメッセージに

- :-)と書き入れたのが始まりで、顔文字誕生から20年経った。現在では顔文字(スマイリー・フェイス)は、文字だけにたよるオンラインコミュニケーションで欠かせないものになっている。  
([http://www.zdnet.co.jp/news/0209/19/xert\\_smile.html](http://www.zdnet.co.jp/news/0209/19/xert_smile.html))
- 19)「ソフナー」が硬水を軟水に変えたり、潤いのある肌に変えるはたらきをしたりするように、電子メールやチャットで自分の意見を書くときに、一種のためらいや自身のなさを示すために加える短いことば。たとえば「～です」と言い切ると無愛想とか独断的と思われかねないので、「～だよな」とか「かな?」「～みたい」などを付けて中身を曖昧にし、無用な摩擦をさけようとする。
- 20)電子メールを「eメール」と呼ぶのに対して、従来の郵便でのメールが亀やカタツムリのように遅いことを揶揄して「タートルメール」とか「スネールメール」と言うこともある。
- 21)通常の会話では「間」も重要な要素であり、上手なインタビュアーは、ときには10分も15分も相手が話し出すのをジッと待っていることすらあるという。(東山紘久・プロカウンセラーの聞く技術・大阪・創元社・2000・214p.)しかし、チャットや掲示板では相手の姿が見えないので、このような「間」というものがない。
- 22)遠隔教育の例でいえば、同期型はリアルタイム型であり、講師と学習者はネットワークを通じてリアルタイムにやりとりできる。これにたいして非同期型は蓄積型であり、教材を教育用サーバに蓄積しておき、学習者は好きなときに学習できる。非同期型が中心のeラーニングは“いつでも、どこでも、1人でもできる”という特長があるが、それだけに挫折しやすいという欠点もある。
- 23)Multi User Dungeon. 70年代の終わりにリチャード・バトル氏とロイ・トラブショー氏が公開したコンピュータでプレイするテキストベースのゲーム。後に、ユーザー(プレイヤー)たちがゲームを自分好みに変えて、ストーリーをコントロールできるゲームをMUDと呼ぶようになった。
- 24)人は他者の容貌、行動、風評などを手がかりにして、他者の内面にひそむ情動や意図、さらにはもっと永続的なパーソナリティ特性を推論しようとする。初対面の人に接したとき、外見からの印象が判断に与える影響が大きいことはよく知られている。ネット上で真偽不明な情報に接したとき、情報の出所が判断材料となるが、それが信用できるかどうかをどうやって判断すればよいのだろうか。
- 25)通常、実生活のペルソナとオンライン・ペルソナとが同じでもとくに支障はないが、ときには別人格としての役割演技をしなければならない場合もある。
- 26)実社会ではさまざまなシガラミから「言いたくても言えない」ことがあるので、別人格のオンライン・ペルソナを持つこと自体は悪いことではない。内部告発などもその一つであろう。ストレス発散の効果もある。
- 27)人格は、本来、統一性が保たれているものであり、その統一性に障害をきたし、全く別の人格が交互に出現する状態を「二重人格」と言う。多くの場合、主人格は第2の人格を意識しないが、ある程度意識していることもある。このような形のものを同時的二重人格と呼ぶ場合もある。ネット上では意図的に擬似二重人格(あるいは多重人格)を演じることができる。
- 28)ユーザーが主体的に関わるのは、ラジオ<テレビ<新聞<インターネットの順だろう。
- 29)「普段は多様な民族・人種が混在し、自由な意見が飛び交っているが、ひとたび外敵が現れると、一気に挙国一致体制となる」アメリカ社会に、インターネットの集団は似ている。
- 30)「こうしたネットワークはコミュニティという形で無数に存在している。コミュニティを形成しているメンバーは極めて凝集性、同質性が高いため企業にとって質の高い消費者になりうる潜在的可能性を秘めていると言える。新しい顧客層を開拓したいという企業はターゲットを綿密に設定し、こうしたネットワークコミュニティに情報を的確に発信していくことによって、潜在的顧客層・潜在的マーケットを創出していくことが可能となる。つまり、従来のマスマーケティングの手法では決して出会うことのなかった消費者と商品とが出会える場、それがインターネットである。」(急速に進行するインターネット革命/インターネットは企業の本質が問われる、リアルコミュニティ通信, Vol.21, 1999.7.5, <http://www.2002worldcup.co.jp/bijin/maga/real21.htm>)
- 31)その反面、同好の士による「極めて凝集性の高い集団」も作られやすい。たとえば、サイトで知り合ったもの同士による「同情自殺」や、死にたいと書き込んだ人に薬品を渡しての「殺人幫助」などの事件例がある。
- 32)この種の事件は枚挙にいとまがないほど頻発している。一例をあげれば「浜崎あゆみファンサイト荒らし事件」がある。これは浜崎あゆみが2001年末に開催されたカウントダウンライブで「障

害者を差別した」発言をしたというものである。しかしその後、事件の被害者であるべき障害者そのものの存在が無いことから、サイト攻撃に熱心なグループが引き起こしたと騒動と思われる。( <http://www.calvadoshof.com/artist/HamazakiAyumi/avex2310.html> )

- 33) 掲示板やチャットでは見知らぬ人とのバーチャルな人間関係を可能にした。これは人類史上初めての出来事であり、プラス面も大きい。一方、出会い系サイトなどを利用した、婦女暴行、強制わいせつ、恐喝、詐欺、名誉毀損、児童買春、などの事件を引き起こし易くした。「情報倫理」教育に期待される部分も大きい。

#### 参考文献

- 1) Brod, Craig : Technostress, Addison-Wesley Publishing, 1984, 242p. ( 池央耿訳「テクノストレス」. 新潮社 . 1984 )
- 2) Himanen, Pekka : The hacker ethic, and the spirit of the information age, New York, Random House, c2001, 232 p. ( 安原・山形訳「リナックスの革命-ハッカー倫理とネット社会の精神」. 河出書房新社 . 2001 )
- 3) Kraut, R., Lundmark, V., Patterson, M., Kiesler, S., Mukopadhyay, T., & Scherlis, W.: Internet Paradox - A social technology that reduce social involvement, American Psychologist, Vol. 53, No. 9 , pp. 1017-1031, 1998.
- 4) Wallace, Patricia M.: The psychology of the Internet, Cambridge, UK; New York: Cambridge University Press, 1999, 264 p. ( 川浦・貝塚訳「インターネットの心理学」. NTT出版 . 2001 )
- 5) Young, Kimberly S.: Caught in the net: how to recognize the signs of Internet addiction, and a winning strategy for recovery, New York: J. Wiley, c1998, 248 p. ( 小田嶋訳「インターネット中毒」. 毎日新聞社 . 1998 )
- 6) 川上善郎 . 情報行動の社会心理学 送受する人間のこころと行動 . ( シリーズ21世紀の社会心理学 ; 5 ) . 京都 . 北大路書房 . 2001 . 143p.
- 7) 岸田秀・西村清和 . 電子メディアの心理学 . Voice . 2000. 03
- 8) 坂本章 ( 編 ) . インターネットの心理学 教育・臨床・組織における利用のために . 2 版 . 東京 . 学文社 . 2002.
- 9) 島井哲志・出口弘 . インターネット利用と心理社会的な健康との関係 . 大学教育と情報 . WINTER 2001, Vol. 9 , No. 3 . 私情協
- 10) 茶園利昭 . “ 文科系大学における情報倫理教育に関する一考察 ” . 日本橋女学館短期大学紀要 . No.12. ( 1999 ) pp. 39-52
- 11) 茶園利昭 . “ 情報倫理教育に関する一考察 ( ) ” . 日本橋女学館短期大学紀要 . No.13. ( 2000 ) pp. 33-49
- 12) 茶園利昭 . “ 情報倫理教育に関する一考察 ( ) ” . 日本橋女学館短期大学紀要 . No.14. ( 2001 ) pp. 1-28
- 13) 茶園利昭 . “ 情報倫理教育に関する一考察 ( ) ” . 日本橋学館大学紀要 . No. 1 ( 2002 ) pp. 79-92
- 14) 内閣府【編】. 平成13年度 国民生活白書 家族の暮らしと構造改革 . 4 章ITの普及と家族 4 . 家族のコミュニケーションとIT . ぎょうせい . 2002 . 232p.

# インターネットにみる今日のシャーマニズム - 霊性のネットワーキング -

塩月 亮子\*1      佐藤 壮広\*2

..... キーワード .....

シャーマニズム (shamanism)    霊性 (spirituality)    インターネット (internet)  
ネットワーキング (networking)    相互扶助 (mutual aid)

## 1. はじめに

宗教復興が世界各地で盛んになっている今日、日本においても一見遅れている風習とみなされてきたシャーマニズムに対する再評価がなされ始め、「シャーマニズム復興」とでもいべき現象が起こっている。この動きを明らかにするため、筆者らはこれまでユタとよばれる沖縄のシャーマンの宗教的世界観をはじめ、沖縄映画や沖縄文学にみられるシャーマニズム復興現象を考察してきた<sup>1)</sup>。今回はさらにその研究を進めるため、インターネット上のホームページにみられるシャーマニズム復興現象について、どのような団体がどのような視点から日本のシャーマニズムに関するホームページを作成しているのか、そのホームページに順次書きこみをしていくのはどのような人々で、その内容は何か、シャーマニズムに関するホームページがどのようなネットワークを生み出しているのか、についての調査・分析を行った。本研究は、宗教人類学や宗教学等で現在最も注目されている「霊性 (spirituality)」<sup>2)</sup> 研究の一環であり、「霊性」を重視したネットワークづくりの現代的な局面を明らかにするものである。

本稿ではまず、日本におけるシャーマニズム関連サイトの概要を論じる。次に、事例として「巫女クラブ」(<http://www.ne.jp/asahi/pasar/tokek/TG/mikoclub/>)というホームページを取りあげ、インターネット上に展開されている霊性のネットワーキングのあり方を分析する。これにより、日本におけるシャーマニズム復興現象の一側面を明らかにすることを試みたい。

## 2. 日本におけるシャーマニズム関連サイトの概要

### 2.1 検索カテゴリーとしての「シャーマニズム」

宗教人類学者の佐々木宏幹によれば、かつて日本におけるシャーマニズムはともすれば迷信・俗信あるいは前近代的な信仰形態として位置付けられがちであった(佐々木, 1992)。それが今日、シャーマニズムの語はインターネットの検索カテゴリーに加えられまでになっている。もともと「shaman (シャーマン)」という用語は、マンシュール・ツングース系諸族の社会に存在する呪術・宗教的職能者を指す「サマン」に由来するとされている(佐々木1980: 22)。このシャーマンが関わる宗教現象を、研究者らは広く“shamanism”と定義した。それ以後、世界諸地域における呪術・宗教的職能者は、多かれ少なかれこのシャーマニズムというカテゴリーに関わりつつ研究されてきた。日本においては、巫者あるいは巫女の研究が

2002年9月30日受理  
Shamanism Today on Internet: A Networking of Spirituality

\*1 Ryoko SHIOTSUKI  
日本橋学館大学人文経営学部

\*2 Takehiro SATO  
大正大学文学部国際文化学科(非常勤)

これに該当する。

膨大な情報がうずまくインターネットの世界では、カテゴリー別に情報を弁別・選択するために検索エンジンが用いられる。代表的な検索エンジン“Yahoo! JAPAN”(http://www.yahoo.co.jp/)において、シャーマニズム(1)は、宗教のカテゴリーに分類されている(カッコ内はサイト数。以下同様)。この宗教カテゴリー内には、シャーマニズムと並びイスラム教(8),キリスト教(800),神道(236)といういわゆる宗教別項目と、生長の家(12),オウム真理教(アレフ)(5),天理教(26),法輪功(2)などの教団別項目がある(2002年9月30日現在)。シャーマニズムは、教という宗教や 教団とは別立てのカテゴリーとして位置付けられているのである。また、現代のシャーマニズム復興の動きと大きく重なるニューエイジ(21)とも、一応区別されている。

検索語を含むページが検索できる“Google”(http://www.google.co.jp/)では、シャーマニズムの語を含むページは4720件である(2002年9月30日現在)。ほかの検索エンジンでも、4500件前後のページがヒットする。シャーマニズムでヒットするYahoo!のサイト数は1件だが、ページ検索に切り替えると、その数は4500件を超える。このことから、シャーマニズムという語の示す内容が、カテゴリーとして独立性の高い宗教現象ではなく、広範な領域で見出される<シャーマニズム的な現象>を指していると考えられる。

## 2.2 シャーマニズムの拡がりの背景

なぜ、シャーマニズムの語がインターネットの世界で拡がりを獲得しているのか。この問いを二つの点から考えてみる。一つは、シャーマニズムがいわゆるカウンター・カルチャーやサブカルチャーの領域につながっているという点である。斎藤英喜は、現代は小説、映画、コミック、音楽などにシャーマニズム的要素が見出される時代だと指摘する(斎藤2001:13-14)。シャーマニズムの定義が拡大すると、分析概念としてのシャーマニズムの有効性が失われることは否定できない。しかし

斎藤は、「なぜシャーマニズムが『拡大解釈』を可能とするようなエレメント(要素)をもっているのか」(斎藤2001:15)という点こそ重要だという。そのエレメントとは、1960年代の米国でのカウンター・カルチャーの流れを汲む「ネオ・シャーマニズム」(マイケル・ハーナーがその牽引者)の理念である。つまり、体制化され制度化された宗教ではなく、個人の意識変容を契機とした健康と治癒のための技法としてのシャーマニズムである(M. Harner 1980=1989)。ハーナーは、ワークショップへの参加者が体験する意識変容を「シャーマニズム的意識状態(Shamanic state of consciousness = SSC)」とし、宗教的实践を試みている。また、癒しと健康のための方法を紹介したホームページの多くは、シャーマニズムに関する解説ページを用意している。多くのハーブやマッサージのページにも、シャーマニズム関連のリンクが貼られている。トランスパーソナル心理学のワークショップでは、シャーマニズムの技法が取り入れられており、その開催日時等がウェブ上で告知されるという動きも確認できる。

インターネットにおけるシャーマニズムの拡がりを考えるもう一点は、シャーマニズムの実践とその担い手がどのような人々であるかということである。インターネットと宗教について論じている土佐昌樹(土佐 1998)は、宗教に関係するインターネットの特徴を7つ挙げている<sup>3)</sup>。そのなかで特に、「匿名性」(利用者が裸の人格になる)と「マイノリティー」(インターネットは無数のマイノリティーによる微細な相互作用にふさわしい生息域)の2点は、担い手の特質を理解する指標になる。匿名性とは、端末の前に座る個人が、自身の社会的属性(容姿・年齢・性別・職業など)を失う(=それらから解放される)ことである。このことにより、メーリングリストや掲示板を通しての会話が、日常の人間関係では語りにくい悩みや不安の告白・相談の場となるケースが多くなるのである。また、「インターネットがなかったら泡沫のように消えていたであろう少数派の声に、それは手軽に社会的実体を与える」(土佐

1998：220）と土佐が述べるように、公的メディアや制度の枠に収まらないマイノリティーの声を表出させるのも、インターネットの特徴である。こうした土佐の指摘からも、ネット上のシャーマニズムの拡がりの理由と、その担い手のある程度の層を知ることができよう。3章の事例研究で詳述するが、インターネット上でのシャーマニズムのネットワークの担い手（仕掛け人ではなく、おもにホームページに引き寄せられる人々）は、多かれ少なかれ病いや痛み、孤独を抱えた人々である。癒しを求める人々と言ってもいいだろう。もちろん、シャーマニズム関連サイトとそこに展開する世界は多様であり、また変容していく可能性もある。だからこそ、シャーマニズムの多様性・動態性を明らかにするためにも、特定地域に調査に入り聞き取りや儀礼の参与観察をするといった従来のシャーマニズム研究に加え、今日ではインターネットが開示するシャーマニズムの世界についても目を向け、そこにみられるネットワークの特性や行動様式の特質も考察しなければならない。その基礎作業として、次節ではシャーマニズム関連ホームページの概要を述べる。

### 2.3 シャーマニズム関連サイト

シャーマニズムの語をキーワードにしたサイトやページの内容を整理すると、(1) 学術系、(2) 情報提供系、(3) 実践系、(4) 相談系の4つにまとめることができる。(厳密には(1)も(2)に含まれ、(3)と(4)も重なり合うが、特徴を分かりやすくするため弁別した。)

#### (1) 学術系

文化人類学をはじめとする研究者らが、世界のシャーマニズムの調査研究報告をネット上で公開しており、クリックひとつで専門的視点に基づいた研究成果を目にすることができる。社会人類学者の平山眞のホームページ(<http://www3.justnet.ne.jp/mackharry/>)では、東北のシャーマニズムに関する博士論文の要旨や相当数の研究業績を読むことができる。同じく人類学者の蛭川立(江戸川大学 <http://www.edogawa-u.ac.jp/hirukawa/>)や塩月亮子

(日本橋学館大学 <http://homepage2.nifty.com/Ryoko/>)のホームページには、写真・図表を用いたシャーマニズムの解説がある。奥野克巳(桜美林大学)の充実したホームページ(<http://www.obirin.ac.jp/okuno/>)では、ボルネオのシャーマニズムについての論文が公開されている。また、トランスパーソナル心理学の視点を交えたシャーマニズム論考は、まんだら浩(菅原浩・長岡造形大学)による「シャーマニズム私論」(<http://homepage1.nifty.com/mandala/shaman.html>)で読むことができる。まんだら浩は、「霊性学入門」(<http://www.nc9.ne.jp/mandala/>)というホームページを立ちあげ、霊性という観点からの論考も公開している。

#### (2) 情報提供系

学術研究とは若干異なるが、シャーマニズムについての概要や知識を整理して提供しているホームページは少なくない。また、エッセイ形式でシャーマニズムに関して語るページもある。米国在住の大串幹夫のもの(<http://web4.integraonline.com/mikio/>)は、シャーマニズムに関するエッセイが充実している。また、メーリングリストで意見交換を行なっている「ミライ・ブゾク」(<http://www.ne.jp/asahi/r/s/>)では、主宰者ココペリ(ハンドルネーム。映像ディレクター)をはじめ、参加者らのエッセイが公開されている。エッセイのタイトルは「縄文、アイヌ、シャーマニズム」「シャーマニズムとスピリットの世界」「レイヴとシャーマニズムの向こうに見えてくる、いろんなこと」などである。ここからもシャーマニズムが現代のどのような領域と関連して語られているかを知ることができる。北欧神話に関する情報提供や意見交換を行なっている「不連続な間奏曲」(<http://www.enjoy.ne.jp/nao70/> 主催者：葦原漣)では、「シャーマニズム基礎理論講義」(<http://www.enjoy.ne.jp/nao70/novel/ss7.htm>)のページでシャーマニズムの基礎知識が整理されている。また、「癒しの園」(<http://www.geocities.jp/sgrysn/> エネルギーセラピー研究会)というホームページでは、タイマッサージ、ハーブ、アートセラピーの項にまじり、セラピーの技法としてシャーマニズムが挙げ

られている。ここでは『シャーマンへの道』(マイケル・ハーナー著)が癒しのテキストとして紹介され、ハーナーが主宰するシャーマニズム研究所 (<http://www.shamanism.org/>)へのリンクも貼られている。

### (3) 実践系

代表的なものは「イーグル・トライブ」(<http://home4.highway.ne.jp/Eagle/>)である。主宰者は東大阪市の男性、濱田秀樹。日本プロカウンセリング協会のカウンセラーでもある。イーグル・トライブは、1998年に非営利のサークルとして活動開始。ネイティブ・アメリカンの知恵と生き方にふれながら、シャーマニズムの技法を体験するワークショップも行なっている。ワークショップの体験記も公開され、掲示板では、ワークショップ後の参加者の質問や感想のやりとりを読むことができる。このサイトの特徴は、国外の関連サイトを集めたリンク集にある。濱田は、シャーマニック・サークルズという世界のシャーマニズム・ネットワーク組織のメンバーであり、そのメンバーが紹介され、米国や英国、アイルランドやニュージーランドなど各国のメンバーに直接コンタクト出来るようになっている。また、ネオ・シャーマニズムの提唱者マイケル・ハーナーが主宰するシャーマニズム研究所 (<http://www.shamanism.org/>)や、心理学のエサレン研究所 (<http://www.esalen.org/>)などもリンクされており、主宰者の志向が反映されている。

イーグル・トライブのほかに、古代ハワイのシャーマニズムの知恵であるHUNA(男性的要素と女性的要素の結合と調和の思想)を取り入れ、呼吸法などを通して心身の健康を得るためのワークショップを行なっているAloha Spirit Bodyworkのページ (<http://www2.gol.com/users/maira/Huna.html>)もある。主宰者のカミムラ・マリコは、“Urban Shaman”の著者サージ・カヒリ・キング博士のもとでトレーニングを受けた、セルフ・ヒーリングやボディー・ワークの指導者であるという。ここでは月2回のボディー・ワークのクラスが開かれている。サージ・カヒリ・キングは、ハワイ・

カウアイ島で Aloha International という団体 (<http://www.huna.org>) を主宰しており、この団体の講師が日本へ指導に訪れている。ワークショップの参加者は、そこでハワイアン・シャーマニズムにじかに触れることができる。

### (4) 相談系

日本のシャーマニズム的伝統で取りあげられる「ユタ」(奄美・沖縄の民間巫者)や「イタコ」・「ゴミソ」(津軽の民間巫者)などによるサイトでまず挙げられる宗教的实践は、人々の“相談”である。これは、ネオ・シャーマニズムの理念を核とした、いわゆるワークショップ志向のサイトとは異なる。占い、運勢判断、相性判断、除霊などがそれに含まれる。かつては地域共同体で行なわれていたこれらの相談事がウェブ上で受け付け可能になり、相談依頼先もピックアップできるようになるのが、インターネット時代の特徴である。相談系サイトは、利用者のニーズに伴って徐々に充実の様相を見せている。

ホームページのタイトルにシャーマンの語が使用されるケースも出てきている。「ハッピー・シャーマン」([www5d.biglobe.ne.jp/h-shaman/](http://www5d.biglobe.ne.jp/h-shaman/) 2002年9月30日現在確認不可)では、人生鑑定や方位鑑定、開運、除霊などが1万~2万円で依頼できる。登録されているのはともに女性の易学鑑定士で、直井妙真(1938年生まれ)と山田珠令(1936年生まれ)。自己紹介ページによれば、直井は「靈感」をもち、山田は住宅地建物取引主任の資格を活かして家相鑑定を行なうとある。依頼者は用意された「プロフィールシート」のページで、氏名、年齢、性別、住所、希望日時、来訪・出張の別などと記入し、送信ボタンを押せばいいのである。

「イタコ/降霊/交霊」([http://rose.zero.ad.jp/zad86409/itako\\_kourei.htm](http://rose.zero.ad.jp/zad86409/itako_kourei.htm))では、先祖の霊を降ろし、その思いを伝えることを基本とした相談受付を行なっている。もともとは不登校や病気、愛情問題、情緒不安定などの相談を受けていたミカミ・ヨシコ(女性・青森市在住)が、多数の人々からの強い希望で「イタコ/降霊/除霊」を始めた

(2002年6月)というのが経緯。紹介ページには顔写真もある。利用者は電話で予約し、一回5000円で相談ができる。「相談者からの手紙」というコーナーでは、青森県内のみならず「相談してよかった!」という東京都の相談者からの声も掲載されている。

「シャーマン心霊相談サイト」(<http://isweb6.infoseek.co.jp/computer/mojira-j/> 主宰者は鈴木シャーマン淳・男性)では、相談書込みのコーナーがあり、男性・女性・女子中高生の相談と3つに分かれている。相談内容については非公開。相談は予約制(予約フォームあり)。料金体系も明記しており、30分3千円。高校生以下の割引も考慮されている。鈴木自身の心霊体験の公開ページや、ほかの心霊系ホームページへのリンクがあり、内容はバラエティーに富んでいる。また、「ユタヌヤ(ユタの家)」(<http://www.pink.ne.jp/iriya/yuta/>)というホームページには、奄美大島や宮古島のユタへの相談訪問記や、ユタの氏名・住所・電話番号まで紹介されている。主宰者の圓聖修(1966年生まれ・男性)は奄美大島育ちで、現在都内で活動している占い師である。

以上は、日本のシャーマニズムに伝統的にみられる相談事を請負う人々のサイトである。相談事を広く占いと捉え、「靈感」を用いた鑑定や相談も現代の日本のシャーマニズムの様相として理解するならば、インターネットを利用して相談受付を行なう例はかなりの数に上る。その一例が、2002年5月13日にオープンした「日本霊能者連盟」(<http://www.nichikon.co.jp/reinou.html> 大阪市浪速区)である。トップページには“霊能世界にIT導入する”とあり、占い師、霊媒師、運勢鑑定士、前世鑑定士、宇宙チャネラー、霊能演歌歌手という肩書きの人々が相談に応じるという。インターネットでの先祖供養や祈祷も受け付けており、就職や進学への祈祷は3万円、特別な祈祷は10万円と明記してある。

以上、数あるサイトとページからいくつかを紹介しつつ整理してきた。次章では、具体的事例をとおして、シャーマニズム関連サイトにおけるネ

ットワークとコミュニケーションの特徴を論じる。

### 3.事例とその検討 - 「巫女 クラブ」にみられる霊性のネットワーキング -

ここ数年、沖縄のユタや青森のイタコなど日本のシャーマン自身、あるいはそれに関心を持つ人々が、日本のシャーマニズムに関するホームページを作成し、インターネット上で公開するという現象がみられるようになった。なかでも、以下に事例として取りあげる「巫女 クラブ」は、単にシャーマニズムに関する知識提供を目的とするだけではなく、「霊的世界を探求する人々」のネットワークづくりを目指しているという点で、大変ユニークなホームページである。本章では、当ホームページにみられる内容を分析することで、インターネットを使用した不特定多数の霊性のネットワーキングという、シャーマニズムを媒介とした現代的紐帯の様相について考察する<sup>4)</sup>。

「巫女 クラブ」は平成13(2001)年8月に設立された。主催・管理者は、百瀬直也氏という男性である。彼はある神社の元信徒で、宮古島のユタに詳しいという。このクラブは会員制になっており、「ユタや巫女のような能力があるか、またはそういう人々に強い関心がある」人だけが入会できるなどの条件を挙げ、非公開のメーリングリストを作り活動している。また、東京でオフ会(会合)を開いたり、沖縄や宮古島などの聖地へ行く、あるいはユタや巫女に会いに行くなどの活動を行なっているという。さらにこれらと並行して、インターネット上に「GUEST BOOK」や「ユタ掲示板」、「ユタ体験記」<sup>5)</sup>というコーナーも作っている。以下、一般の人々にも公開されているこれらのコーナーのなかでも、特に人々が自由に書きこみをして意見交換を行なっている「GUEST BOOK」と「ユタ掲示板」に焦点をあて、それらの内容を分析する。

まず、ホームページにみられる「巫女 クラブ」の設立主旨を紹介する。

「巫女 クラブ」とは、沖縄の巫女であるユタなどのシャーマンをきっかけとして、霊的世

界を探求する人々のグループです。危機的な状況にあるこの世界を少しでも変えていくために、共に祈ってくれる人々を募集しています。巫女的な人々に関する情報を交換したり、高い霊的な能力をもった人々とコンタクトをとったり、聖地へ行って平和を祈ると言う活動も行っています。ユタや巫女のような能力をもった人々の間の横のつながりを作る為の「広域巫女ネットワーク」でもあります。巫女的・霊的資質をもっていて、人に言えない悩みなどをもつ方にとっては特に、貴重な相互扶助の場です。たんなる「メーリングリスト」ではなく、現実世界で集まって世界全体の平和のために活動するのがメインの目的です。＜中略＞霊的資質をもっているが故に、「神ダーリ」などで人知れず悩んでいるそこのあなたも、巫女クラブで仲間を見つけてください。

これをみると、当クラブの主な目的は、(1) 巫女的資質をもった人々の相互扶助の場づくり、(2) 世界平和の祈り、の2点にまとめられよう。(1)に関しては、「広域巫女ネットワーク」という言い方で、霊力がある人同士の「横のつながり」を作ると説明している。これは、アルコール中毒者や癌患者同士にみられる自助グループと同様、なかなか他人には理解されないため、言えなかった苦しみをカミングアウトし、励ましあっていく仲間同士のネットワーキングとみなすことができる。また、(2)は、現在の世界の危機的状況(恐らく具体的には戦争や環境汚染などが考えられる)に対して、霊的資質をもった人々の力で平和の祈りを捧げるという活動である。これは、宗教者としての役割とその存在意義を公にアピールし、同じ志をもつ人々に広く呼びかけることにほかならない。

次に、「GUEST BOOK」に書かれている平成13(2001)年8月1日から平成14(2002)年7月1日までの約1年間にわたる49件のやり取りについて分析した結果を示すことにする(表1参照)。

「GUEST BOOK」の特徴(カッコ内は延べ人数)

書きこみ者数(含む主催者)...35(49)人  
地域...関東14(18)人、沖縄7(12)人、

日本橋学館大学紀要 第2号(2003)

近畿5(6)人、九州3(3)人、東北2(6)人、東海1(1)人、四国1(1)人、その他2(2)人  
性別...女性16(21)人、男性4(6)人、不明15(22)人  
年齢...10代1人、30代2人、自称「中年」1人、不明31(45)人  
職業...反射療法士1人、主婦1人、無職1人、仕事と家事1人、巫女1人、不明30(44)人  
内容...ユタ・イタコの紹介依頼12(12)人、霊的体験の相談・告白10(15)人、その他13(22)人

に関しては、49件のうち複数回書きこみをした人もいるので、実際は主催者を含めて35人が参加している。書きこみに対してはほぼ毎回、主催者が簡単なコメントを返しているが、それは数に含めなかった。については、日本の様々な地域からアクセスがあった。なかでも関東に住む人からが最も多く、ついで沖縄、近畿、九州、東北、東海・四国の順となった。沖縄が多かったのは、当ホームページが沖縄の宮古島のユタについて詳しく取りあげているからであろう。また、沖縄からはユタについての話題が多く、東北からはイタコについての質問があり、地域と質問内容との関連性がうかがえた。の性別については、女性が男性を大幅に上まわり、不明のうちの多くも恐らくは女性と思われる文体・内容であった。の年齢に関しては、記述されたものがほとんどなく、明らかだったのは10代の高校1年生1人と、30代の女性が2人、中年と名乗る人1人のみであった。ただ、不明者の殆どは、文体や内容から30~40代の人が多いように推察された。の職業もその大部分が不明だったが、仕事で悩んだり行き詰まったりしている人が散見された。また、専業主婦や家事と仕事双方をこなしている人も見受けられた。反射療法士(リフレクソロジー)や巫女など、身体や精神の癒し・治療を職業とする人が参加していた。この点は、本サイトの特徴のひとつといえよう。の内容に関しては、以下に詳述する。

表1 「GUEST BOOK」 平成13(2001)年8月1日～平成14(2002)年7月1日

番号	名前	地域	性別	年齢	職業	内容の概略
1	百瀬	関東	男			ゲストブックの案内
2	茶子	関東	女			挨拶
3	工藤真雪	関東	女			オフ会参加希望
4	Mayumi	その他の国	女			挨拶
5	松原レイ子	九州	女	30代	反射療法士	スピリチュアルな世界に興味 宮古島のシャーマン・霊的スポット知りたい
6	きくがわ ちなつ	近畿	女	37歳	主婦	ユタにみてもらいたい・私には神の世界がみえる
7	ちびた	東北	男?		元事務職・今無職	ユタでアクセス 精神不安定になった・生きるエネルギーのことなど体験語りたい
8	一代	関東	女			宮古島のユタに会いたい・聖地も巡りたい
9	めたこ	関東	女			祖父は池間島出身 霊聴・霊視・家庭の不幸
10	おとうちゃん	近畿	男			前世知りたい 親友と妻の白血病による死・息子のこととの関連
11	MIZUE	関東	女			不思議な体験 ユタに興味・宮古島のユタ紹介を依頼
12	としかず	四国	男			不思議な体験 聖地巡礼に行く 沖縄のユタやカミンチュウの紹介を依頼
13	琉球国王	その他の国	男?			琉球のHPの主催者 リンク依頼
14	長山のりこ	沖縄	女			沖縄県具志川市のユタを教えて
15	竹中秀彦	九州	男			仕事うまくいかず シャーマニズムにひかれる・ユタに会いたい
16	まゝ娘	関東	女			沖縄に住んでいた ニューエイジに興味 ユタやカミンチュウと交流あり
17	デサラ	関東	男?			本島でユタに会えた(上原さんつながり) 私はカミダリーだった
18	学ぶ中年	近畿	不明	中年		心理療法との関係でシャーマニズムに興味 沖縄で調査したい・カミンチュウ・巫女に会いたい・青森の巫女にも会いたい
19	やまちゃん	沖縄	女		仕事あり・家事も	神ダリーをする 先祖 神様の指示がある 那覇のユタが師匠 会社も休み中で体も重くきつい、HPあつて嬉しい
20	トントン	近畿	女?			巫女に興味 宮古島に旅行にいったことあり
21	おれんじ	沖縄	男?			面白いHP
22	エアリス	東北	女?			イタコになりたい・ユタとの違いは?
23	エアリス	東北	女?			私は盲目でもなく霊感もない・修行って?
24	エアリス	東北	女?			イタコに会いたい 巫女クラブって?
25	やまちゃん	沖縄	女		仕事あり・家事も	師匠と弟子の6人とで高千穂に拝みに行った・体調治った・天照様や八百万の神様に会った
26	長月	沖縄	不明			やまちゃんさんに対するメッセージ 神開きのよい年になますように・自分も護国寺や出雲大社等を以前まわった)
27	やまちゃん	沖縄	女		仕事あり・家事も	今回のおがみで自分はユタやオガミサーでないことを確信・自分はなにもの? スクープあり
28	長月	沖縄	不明			やまちゃんさんに対して「カミダリー」の説明 自分は拝む人だが金銭はもらっていない等
29	やまちゃん	沖縄	女		仕事あり・家事も	長月さんの言葉は師匠と同じ神様の言葉 明るい未来・素直に進進しよう
30	百瀬直也	関東	男			「ユタ体験記」ページ公開のお知らせ! ユタ掲示板もつくる?
31	長月	沖縄	不明			長古の人 掲示板はよい情報交換の場になる
32	エアリス	東北	女?			シャーマンキング(漫画)面白い イタコやユタの口寄せの詞を教えて
33	日名	東海	女		巫女	巫女として奉職・神様に呼ばれてお仕え 掲示板心強い
34	レナ(元エアリス)	東北	女?			イギリスにもイタコはいる?
35	百瀬直也	関東	男			ユタ掲示板ができたことのご案内
36	井上夢間	関東	不明			リンクの承諾
37	通りすがり	沖縄	不明			ヒズカンは「火の神」ではなく「陽の神」では?
38	tokotatiyo	関東	女			古神道・巫女・沖縄に深い縁あり 沖縄に行った 琉球は龍宮 言霊・神道系のHP作った
39	tokotatiyo	関東	女			沖縄はムー大陸と深いつながり
40	tokotatiyo	関東	女			18歳の頃の此花咲耶媛の夢をきっかけに古神道や言霊と縁ができる・前世もエネルギーワークの叡智である
41	nyan	関東	不明			沖縄に初めて行くのでユタの紹介を依頼
42	Mana	九州	女			宮崎在住 宮古島のユタの紹介を依頼
43	うちな	沖縄	女?			母が宮古出身 私や家族はサーダカ生まれ 叔母(八王子在住)はユタ 私修行中 興味本位でユタを訪れるな
44	びよ	近畿	女?			ユタにみてもらったことがある
45	ふみ	関東	女			ユタ掲示板に書いた
46	ごんた君	関東	男?	高1		修学旅行で沖縄に行くのでユタについて知りたい
47	びっちゃん	沖縄	女			夫が沖縄出身・自分は本土出身で沖縄在住 天橋立や出雲にひかれるのは? 沖縄のウタキや拝所を回りたい
48	トントン	近畿	女?			お寺で老婦人が「おさま! ませ! 」といっていたのをみて不思議な感覚になった その理由は?
49	テオ	関東	女?			母が分裂病 完治したら私が分裂病に。診断されて沖縄のユタのことが気になり会いたい 霊的な体験もある

注) 性別欄の「女?」「男?」は、文面から恐らくそのように推察できるが、断定はできなかったものを意味する。一方「不明」は、文体からも性別がほとんどわからなかったものである。また、年齢・職業の空欄は不明のもの。

表2 「ユタ掲示板」 平成14(2002)年5月30日～平成14(2002)年8月3日

番号	名前	地域	性別	年齢	職業	内容の概略
1の1	ふみ	不明	女			長月さんに電話でお世話になった 今度沖縄に会いに行く
1の2	百瀬	関東	男			よかった
2の1	ごんた君	関東	男	高1		ユタについて学校で発表 ウタキを回らされるのは夢遊病?
2の2	百瀬	関東	男			そうとは限らない
3の1	未冬	不明	女			ユタに会いたい・靈感はない
3の2	百瀬	関東	男			靈感があるかは関係なく 熱意があれば会える
4の1	トコタチヨ	関東	女			沖縄に行ってきた ネイティブ・アメリカンの土地も旅行 聖なるパワーとメッセージを受ける UFOもみる
4の2	百瀬	関東	男			地名は重要な情報が含まれている アメリカには独特のエネルギーがある
5の1	テオ	関東	女?			母が分裂病 完治したら私も分裂病に。ユタが気になり会いたい 霊的体験もある
5の2	百瀬	関東	男			ゲストブックにレス
6の1	日名	東海	女		巫女	日の大神様のお顔が陰っているように思えるが 同じことを感じる人は?
6の2	百瀬	関東	男			これからいろいろ大変に
7の1	S S	不明	男			父を癌で亡くす(未告知)父はどう感じた? 女房・親戚と久米島～那覇へいくのでユタの紹介を依頼
7の2	百瀬	関東	男			本島のユタの情報はあま先っていない
7の3	S S	不明	男			ユタに会うのを楽しみにしている
7の4	百瀬	関東	男			ユタにも限界があり 万能ではない
8の1	asato	不明	女			小説を読んでユタに会いたい
8の2	S S	不明	男			最後に自分がユタになってしまう小説?
8の3	百瀬	関東	男			『ユタが愛した探偵』? 『神に追われて』は読む価値あり
8の4	S S	不明	男			田口ランディの『コンセント』では?
8の5	百瀬	関東	男			そうかも。でも現実には興味ない
9の1	sasara	不明	女			母が宮古島出身で父方の祖父が僧侶 両親離婚 夫の父の死 人とは違うものが見える 修行中
9の2	百瀬	関東	男			ユタや霊能者に頼り過ぎるのは問題 先祖や神様に感謝し祈る。メールは深刻な悩みを抱える人からが多い
10の1	ひとりごと	不明	不明			ヤマトがユタに会うには並大抵のパワーじゃだめ

注) 性別欄の「女?」「男?」は、文面から恐らくそのように推察できるが、断定はできなかったものを意味する。一方「不明」は、文体からも性別がほとんどわからなかったものである。また、年齢・職業の空欄は不明のもの。

書きこまれた内容には、ユタ(沖縄のシャーマン)に興味があり、会ってみたいので紹介して欲しいというものが多い。その理由は、単なる興味からよりも、何らかの家庭的不幸や仕事上の悩み、あるいは「カミダリー」とよばれる巫病の苦しみからというものが多い。なかでも沖縄からの参加者で、カミゴト(神事)の先輩(「長月」)が、現在カミダリーに苦しんでいる後輩(「やまちゃん」)を励まし、アドバイスしているやりとりが数回みられ、このクラブの主旨である「相互扶助の場」をまさに実現していた。ほかにも、自らの霊的体験を語り、神や祖先霊等について意見を述べたり相談をしたりする記述も多くみられた。以上から、霊的世界を自ら体験している、あるいは霊的資質はなくとも霊的世界に興味を持っている人が多数参加していると考えられる。彼女(彼)らは霊地を巡り、霊能者といわれる人々に会った経験を持つ。あるいは、そうしたいという希望を持っている。特に沖縄のユタには興味を示し、古神道など神道関係についても言及している。また、「スピリチュアル」、「ムー大陸」、

「霊的スポット」という用語がしばしば会話に登場しており、いわゆるニューエイジ的な知識・興味も濃厚であることがわかった。

続いて、「GUEST BOOK」と内容が酷似している別のコーナー、「ユタ掲示板」についてみていく。これは、平成14(2002)年5月30日～同年8月3日までの約3ヶ月間に書かれたものである。件数は、主催者の応答を含め、24件であった(表2参照)。

「ユタ掲示板」の特徴(カッコ内は延べ人数)

書きこみ者数(含む主催者)…11(24)人

地域…記述が無いので不明

性別…女性6(6)人, 男性3(16)人,  
不明2(2)人

年齢…記述が無いので不明

職業…記述が無いので不明

内容…ユタの紹介依頼4(4)人, 霊的体験の相談・告白4(4)人, その他  
3(16, うち百瀬氏のレス11)人

については、当コーナーが始まったばかりでまだ11人の参加者しかいない。名前をみると、先

ほど取りあげた「GUEST BOOK」の参加者と4人が重なっている。この掲示板より前に「GUEST BOOK」が作られたためか、その内容は「GUEST BOOK」の方が詳しかった。・ ・ ・については記述がないので不明。の性別は、実数でみると女性の参加者が男性の2倍であり、女性が多いことは「GUEST BOOK」と同様であった。また、の内容に関しても、ユタの紹介依頼と霊的体験の相談・告白が大部分を占めていた。小説(田口ランディ『コンセント』幻冬社 2000)を読んでユタに会いたいというものもあった。「GUEST BOOK」にも漫画(武井宏之『シャーマンキング』集英社 1998～)についての記述があり、書籍を通してシャーマニズムに関心をもつケースもあることがわかる。内容で特に目を引くのは、霊的なことで悩む人が書きこみをしている点である。これは「GUEST BOOK」でも1件(「うちな」)あったが、霊的なものを統御できない人がアドバイスを求めたり、苦しみを告白する場をこれらのコーナーが提供していると考えられる。

「GUEST BOOK」と「ユタ掲示板」の両方にみられる参加者の特徴をまとめると、次のようになる。

- (1) 地域は日本全国から。なかでも多いのは関東、次いで沖縄。
- (2) 女性が多い。
- (3) 年齢は10代と30代の記述があった。恐らく30代前後が多いと考えられる。
- (4) 霊的資質(靈感)を持つという人とそうでない人とが約半々。皆、霊的なことに関心が高い。霊能者や修行中の人も参加。
- (5) 内容はユタをはじめとするシャーマン、および沖縄の聖地の紹介依頼と、霊的体験の相談・告白が顕著。

これらの特徴は、現在、いわゆる「霊性」を重視するニューエイジ的な人々により、インターネット上のホームページを使った情報交換や悩み相談が真剣に行なわれていることを示す。「こんなホームページがあったらいいなと思っていた」「やまちゃん」との声もあり、これまで誰にも

悩みや苦しみを相談できずにいた人同士が、このようなホームページのコーナーを通じて新たなネットワークを形成しつつある。その紐帯のあり方は、どの地域からでも自由にペンネームで参加できるというように、非固定的なゆるやかなものである。また、これらのコーナーは、会員制の「巫女クラブ」への入会の契機も与えている。会員になれば、外部に内容が漏れることなく、相談や告白ができる。さらに、オフ会に参加することでフェイス・トゥ・フェイスでの付き合いも可能となる。

このように、「巫女クラブ」は、「霊性」にまつわることについて気軽に相談ができ(だがその相談内容は深刻)、気に入れば会員となり、一緒にユタなどシャーマンを訪ね、霊地を歩いて共に平和を祈るという機会を提供している。これは、まさにインターネット出現以前には不可能だった、地域や文化を隔てた者同士による苦しみの緩和・相互扶助を目的とした「霊性のネットワーク」とよべるものである。今後は、当ホームページがどのように発展・変化するのか、あるいはこのような目的をもったホームページが増加するのかどうかについて、さらなる研究を進めて行く必要があるだろう。

#### 4. おわりに

世界各地の宗教復興に伴い、日本でも、それまでは前近代的とされたシャーマニズムに対する再評価がなされ始めた。このシャーマニズム復興現象は、インターネット上においてもみられた。本稿ではこの現象を明らかにするため、まず、日本におけるシャーマニズム関連サイトについて概観し、次に「巫女クラブ」というホームページを取りあげ、インターネット上に展開されている霊性のネットワークのあり方を分析した。その結果、日本におけるシャーマニズム関連サイトは、(1) 学術系(2) 情報提供系(3) 実践系(4) 相談系の4種類に大別されることがわかった。さらに、(4)の相談系サイトに関しては、匿名性の高い人々がインターネットを通じて苦しみの緩和

和・相互扶助を目的とした「霊性のネットワークづくり」を実践していることが明らかとなった。

今後は、以上の結果を踏まえ、さらにシャーマニズムがインターネット上でどのような位置を占めていくのか、さらにシャーマニズムが生み出すインターネットによるネットワークづくりがどのような展開をみせるのか、継続的な調査を行なうことが課題となろう。

#### 注

- 1) 塩月亮子 2002「表象としてのシャーマニズム - 沖縄の映画と文学にみるアイデンティティ・ポリティックス - 」『哲学』第107集 p.1-20参照。
- 2) 霊性 (spirituality) とは、宗教的 (religious) に対する用語であり、伝統的な「宗教」の後に来たものを指す (島藺1996: 48-52)。また、当事者の個人的な超越的体験、超自然的な感覚、非実証的な意味の基盤などを表すという指摘もある (伊藤2001: 53)。
- 3) 土佐が挙げるのは次の7つである。1-高速性・双方向性, 2-雑居性, 3-匿名性, 4-イメージ中心, 5-流動性, 6-マイノリティー, 7-関係性。土佐は以下の指摘をしている。「こうした特性群がどのような宗教的实践に適合的かは想像にかたくない。これまで社会の周縁に位置していた実験的で先端的な存在こそがインターネットにもっとも自らの活路を見出すのである。流動的な社会環境にふさわしく、流動的で不安定な相互作用が無数に現われては消えるが、細く短い糸が一本の綱によられていくように、やがて確かな足どりが刻まれていく。インターネットはそうしたマイノリティーの培養シャーレであり、孤立した周縁的運動を相互に関係づけ、グローバルな運動に発展させるプロセスを加速する」(土佐1998: 222)。
- 4) インターネットを介してできるネットワークは「電子ネットワーキング」、あるいは「電子コミ

ュニティ」、「情報縁」、「バーチャル・コミュニティ」などともよばれている (田村2000: 11)。

- 5) このコーナーでは、従来は研究書でしか取りあげられなかったようなユタとクライアントとのやり取りが、クライアント自身によって克明に紹介されている。これは、体験者が自らの体験を感情を交えてありのままに記述し、語ることができる場の出現として意義深い。

#### 参考文献

- 1) Michael Harner, *The Way of Shaman*, New York: John Brockman Associates Inc., 1980=1989 (高岡よし子訳『シャーマンへの道』平河出版社)
- 2) 池上良正・中牧弘允編1996『情報時代は宗教を変えるか』弘文堂
- 3) 伊藤雅之 2001「宗教・宗教性・霊性 - 文化資源と当事者性に着目して - 」国際宗教研究所編『現代宗教2001』東京堂出版 p.49-65
- 4) 国際宗教研究所編 2000『インターネット時代の宗教』新書館
- 5) Serge Kahili King, *Urban Shaman*, New York: Fireside, 1990
- 6) 岡部隆志・斎藤英喜・津田博幸・武田比呂男 2001『シャーマニズムの文化学』森話社
- 7) 黒崎浩行編著 2000『電子ネットワーキングの普及と宗教の変容』國學院大學日本文化研究所
- 8) 佐々木宏幹 1992『シャーマニズムの世界』講談社学術文庫
- 9) 島藺 進 1996『精神世界のゆくえ - 現代世界と新霊性運動 - 』東京堂出版
- 10) 塩月亮子 2002「表象としてのシャーマニズム - 沖縄の映画と文学にみるアイデンティティ・ポリティックス - 」『哲学』第107集 p.1-20
- 11) 田村貴紀 2000「電子ネットワーク上のコミュニケーション」黒崎浩行編著『電子ネットワーキングの普及と宗教の変容』國學院大學日本文化研究所 p.11-16
- 12) 土佐昌樹 1999『インターネットと宗教』岩波書店

## マルク・メルジェ「ぼくはこの足でもう一度歩きたい」

朝吹 由紀子 訳

日本橋学館大学人文経営学部 長澤 泰子

著者マルク・メルジェは、婚約者と過ごしたクリスマス休暇の帰途、交通事故に遭遇し、一命は取り留めたものの、下半身対麻痺となり、車いすの生活を余儀なくされることとなったフランス人である。結婚し、二人の子供に恵まれ、大学講師を勤めており、一般的には「素晴らしい障害者」という評価を受ける生活をしている。しかし彼は、SUAW (stand up and walk) プロジェクトに賛同し、世界初の手術を受けた。これは、体内にマイクロチップと歩行に必要な筋肉への電気回路を植え込み(インプラント)、体外のコンピュータから、電気刺激を送り、歩行を可能にしようという画期的な研究プロジェクトである。理論的には確かに可能であっても、実際の手術においては何が起こるか予測できない。本書は、渋る妻を説得し、この研究に参加した勇気あるメルジェによる、「インプラント手術に至るまでの経過とハイリスクに挑戦した著者の内部を赤裸々に描いたヒューマンドキュメント」である。

評者は、障害児・者のリハビリテーションに長年携わり、後遺症も含めその障害との共生をクライアントとともに考えてきた。他のほとんどの人々とは異なる制限の中で、いかに自己実現を果たしていくか、いかに満足した幸せな生活を送るかは、それ自体大きな課題である。しかし、実際には、ほんの少しでもよいから、もとのような生活、または「普通」の生活がしたいと思うものである。その感情や理想と、以前とは異なる現実とのギャップを受け入れることがない限り、障害を持った人の精神的安定は困難である。メルジェの素晴らしさは、この精神的安定を構築した上で、なおかつ、更なる一步を踏み出しているところにある。彼の発想は、失ったものを取り戻すことではなく、あくまでも未知への挑戦という前向きのものである。失敗もあった。不安もあった。しかし、前向きな姿勢は失わなかった。この不屈の精神の背景と考えられる、非常に人間的な、家族のサポートやラビシオン博士はじめプロジェクトチームの構成員との信頼関係も語られている。

さらに特筆すべきことは、このような人間の素晴らしさを教えてくれる本書の訳者、朝吹由紀子氏が本学の教員仲間であること。テーマの性質上、専門的な生理学的・工学的な記載が多く出現するが、素人の読者にも分かるような訳文はさすがである。マイクロチップ埋め込みに関する、専門的な解説が付記されていることも、本書の価値を高めている。ちなみに解説者はご子息である。

専門的な論文も数多く発表されていると思われるが、手術を受けた本人の、淡々とした中にも、強烈な人間の生き様を見せてくれる本書は決して「障害を持つから」ではなく、ごく一般的な人々が生きていく上での、様々な示唆を与えてくれる。これからの社会を背負って立つ若い人たちに是非読んで貰いたい一冊である。

(新潮社, 2002年, 237頁)

## 日本橋学館大学紀要

### 投稿規程

1. 本誌には教育・研究に関する原著論文，報告・資料，書評等を掲載する。
2. 論文は未公開のものに限る。
3. 投稿の資格は原則として本学の専任および兼任の教職員とするが本学と関連をもつ研究者を認める場合がある。
4. 「原著論文」および「報告・資料」は一般投稿を原則とするが，「報告・資料」「書評」等は委員会が執筆を依頼する場合がある。
5. 本誌に掲載する原稿の採否は，紀要編集委員会で審査のうえ決定する。
6. 掲載された論文等の著作権は，国立情報学研究所による電子化・公開、及び本学ホームページその他に無料公開することを許諾するものとする。
7. それぞれの内容は次の要件を備えているものとする。
  - a. 「原著論文」は，問題・方法・手続き・結果・結論・考察の各部分から構成され，独自の論旨が明確であること。
  - b. 「報告・資料」は，本学教育・カリキュラム等に関する考察，および教育のための教材および参考資料，実態調査の報告などとする。
8. 投稿は次の要領による。
  - a. 原稿の他に同文のコピー 1 部を添付する。
  - b. 和文原稿はなるべくワードプロセッサで執筆し，ハードコピーとともにフロッピーディスクをそえて提出することが望ましい。その場合 16,000 字以下（1 行40 文字×30行を 1 頁とする）としA4 判用紙を用いる。  
原稿用紙の場合は，図表その他の資料等すべてを含めて40枚以下とする。
  - c. 欧文原稿の場合は，65ストローク33行ダブルスペースで15枚以下とし，A4 判用紙を用いる。
  - d. 日本語およびその英訳のキーワードを 5 個以内つける。
  - e. 題名，執筆者所属氏名には欧文を付する。また，「原著論文」については 450 語程度の欧文抄録（およびその日本語訳）をつける。
  - f. 本文において章・節などの記号をつける場合は，次のように記すのを原則とする。  
序・結論を除き，
 

章にあたるもの	1 .	2 .	3 .
節にあたるもの	1 .1	2 .1	3 .1
項にあたるもの	1 .1 .1	3 .1 .1	3 .1 .1
項以下のもの	1 .1 .1 .1	2 .1 .1 .1	3 .1 .1 .1
  - g. 文字は，当用漢字，現代かなづかいを原則とし，数字は算用数字，欧文は活字体，統計記号はイタリック体で記す。

h . 外国地名・人名は原語を用いる。外国語はなるべく訳語を付ける。ただし、日本語として慣用化している外国語はカタカナで記す。

i . 図表は別紙にトレースのないように描き、次のように記す。

図 1 , 図 2 , 表 1 , 表 2 , Figure 1 Table 1

なお、本文中に図表のスペースを換算して位置を明記する。

j . 邦文の引用文はすべて「 」でくくり、欧文の引用は" "でくくる。

その直後に、著書名・年号・所在ページを示す( )でくくる。

[ 例 ] " \* \* \* \* " ( Davies, 1968; p.153 )

k . 注には( 1 )( 2 ) のように番号を付し、本文末にまとめる。

l . 参考文献の記載はつぎの方式によりアルファベット順に並べ番号をつける。

#### 1 ) 雑誌論文の場合

著書名 . " 論文名 " . 誌名 . 巻数 , 号数 , 出版年 , はじめのページ - おわりのページ .

例 1 若松昭子 . " ピアス・バトラーによる印刷史コレクションの形成 : インクナブラの収集を中心に " . 図書館学会年報 . Vol. 44, No. 1, p. 1 - 15 ( 1998 )

例 2 Davis, Trisha L. " The evolution of selection activities for electronic resources " . Library Trends. Vol. 45, No. 2 ( 1997 ) p. 391 - 403

#### 2 ) 図書 1 冊の場合

著書名 . 書名 . 版表示 . 出版地 , 出版者 , 出版年 , 総ページ数 .

例 1 永嶺重敏 . 雑誌と読者の近代 . 東京 , 日本エディターズスクール出版部 , 1997 , 281p .

例 2 Mann, Thomas. Library Research Models : a Guide to Classification, Cataloging and Computers. New York, Oxford University Press, 1993, 248p .

#### 3 ) 図書の 1 章又は一部の場合

著書名 . " 章の見出し " . 書名 . 版表示 . 出版地 , 出版者 , 出版年 , はじめのページ - おわりのページ .

例 1 井手文雄 . " 3 界面制御の技術 " . 界面制御と複合材料の設計 . 東京 , シグマ出版 , 1995, p. 12 - 43 .

例 2 Smith, L. C. " Defining the role of information science " . Library and Information Studies Education in the United States. London, Mansell , 1998, p. 119 - 139 .

m . 原稿の末尾に脱稿年月日を記入して提出する。

n . 執筆者校正は 2 校までとする。原則として加筆修正は認めない。

紀要編集委員会

平成 15 年 1 月 22 日

## 編 集 後 記

日本橋学館大学紀要第2号発行のはこびとなった。編集委員会は厳正な審査制度を堅持するために、学外にも査読者を求めて審査をすすめた結果、今号には8篇の論文を掲載するに至った。

今号から、編集事務全般について、岩崎学術出版者の村上和生出版部長から専門的なご指導を得ることができた。その結果として、紙面レイアウトを中

心に、全体の体裁が大きく改善された。ご多忙の中を再三にわたってお時間を割いて下さって、懇切な説明を頂くなご村上氏のご尽力に、深謝申し上げます。

また、西村光弘事務局長ほか課員の方々には、いつもながら的確・迅速に事務能力を発揮して頂いている。ここに感謝申し上げます次第である。

(編集委員長 岩崎 徹也)

日本橋学館大学紀要 第2号

ISSN 1348-0154

平成15年 3月25日 印刷

平成15年 3月30日 発行

編集者 日本橋学館大学  
紀要編集委員会

委員長 岩崎 徹也  
委員 池木 清 山口 操  
江崎 頌子 平尾 浩三  
楠原 偕子 中山 晃

発行者 日本橋学館大学  
〒277-0005 千葉県柏市柏1225-6  
TEL 04-7167-8655  
<http://www.nihonbashi.ac.jp/>

印刷所 十一房印刷工業株式会社  
〒130-0024 東京都墨田区菊川3-11-6

# Bulletin

No.2 March 30, 2003

## Original Article

- A preliminary study on the communication analysis  
in the clinical work at the educational setting ..... Taiko NAGASAWA 3  
Maki OTA
- The Neoclassical Paradigm and Information Asymmetry ..... Eiji FURUYAMA 15
- A Consideration of the structure of mother's needs while parenting  
baby younger than three months old  
With the prospect of supporting child-care ..... Yoshiyuki SHIBAHARA 27  
Eriko HASHIMOTO
- Le carrozze ed una reggia:  
l'influenza dell'uso del cocchio nei progetti  
secenteschi per Palazzo Pitti ..... Hiromasa KANAYAMA 39
- Effect of Simulated Altitude Training and Climbing on Soft parts  
Tissue of Thigh ..... Sanae TAKAHASHI 53  
Katsumi ASANO  
Hideyuki TAKAHASHI  
Kazunobu OKAZAKI

## Report

- Tendency of Students' Peripheral Circulation and Bone Mass Density  
..... Takashi KOYAMA 61
- A Study of "Information Ethics and Psychology on Web Sites"  
..... Toshiaki CHAZONO 69
- Shamanism Today on Internet  
A Networking of Spirituality ..... Ryoko SHIOTSUKI 79  
Takehiro SATO

## Book Review

- LÈVE-TOIET MARCHE  
By Marc Merger, translated by Yukiko Asabuki ..... Taiko NAGASAWA 89